

判決

百三十七丁

故障

百八十四丁

第二節 區裁判所ノ公判

百九十三丁

第三節 地方裁判所

二百〇七丁

第六編 上訴

二百十九丁

第一節 上訴ノ通則

二百十九丁

第二節 通常上訴

二百五十七丁

控訴

二百五十七丁

抗告

二百七十五丁

第三節 非常上訴

二百八十五丁

上告

三百八十五丁

非常上告

三百四十一丁

再審

三百四十七丁

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟

手續

三百六十四丁

第八編 裁判執行復權及ヒ特赦

三百六十九丁

第一節 裁判執行

三百七十丁

第二節 復權

三百七十六丁

第三節 特赦

三百八十丁

刑事訴訟法義解下卷

第六節 檢證搜索及ヒ物件差押

ルン豫審判事カ自カラ裁判所外ニ於テ證憑ヲ集取スル處分中證人ノ住所ニ就テ訊問スル等ノ事アリト雖モ然カモ檢證搜索ノ二者ヲ以テ最も重要ナリトスル第百二條乃至第百十四條ニ規定スル所ナリ

檢證トハ犯罪ノ場所ニ蒞ミ現場ノ模様ヲ檢視シ其發見シタル物件ニシテ被告人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ狀況ヲ知ル材料タル可キモノ等ヲ差押及ヒ圖面ヲ寫取リ其他犯罪ノ性質、方法、日時、場所、被告人ヲ證スル可キ模様、被告人ノ利益ト爲ル可キ模様等ヲ錄取シテ調書ヲ作ル

如何

處分ヲ云フナリ(第二條乃至第百六條)

搜索トハ被告人ノ住居又ハ証據物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居又ハ其他ノ場所ニ蒞ミ搜索ヲ爲シ又ハ同上記載者ノ身体並ニ之ニ屬スル

第四百四條
ニ云ヘル
藏匿ノ解

物件例へハ衣類器具ニ就キ搜索ヲ爲シ其發見シタル証據物件(何人ノ所有ヲ問ハス)ノ差押ヲ爲ス處分ヲ云フナリ(第四百四條乃至第四百七條) 茲ニ一ノ注意ス可キモノアリ他ナシ第四百四條初項中藏匿スル疑アル者ノ文字是ナリ今正面ヨリ此文字ヲ解釋スレハ則チ犯罪ヲ証明ス可キ物件ナルヲ知テ故意ニ隱蔽藏匿スル者タルヲ蓋疑フ可ラサルカ如シ然レモ果シテ此意義ニ解釋スル時ハカノ故意ニ隱匿スルニ非スシテ單ニ所持スル者若クハ受托者ノ住居ニハ搜索ノ處分ヲ施ス可能ハサル結果ニ至ラン而シテ故意ニ隱匿スル者ニ非サレハ素ヨリ搜索ノ必要ナク單ニ裁判所へ其物件ヲ持參ス可キヲ命シテ可ナリト謂フ者アランモ知ル可ラスト雖モ余ヲ以テ之ヲ觀ルニ此所説ハ或ハ實際ニ迂ナル感ナキ能ハサルナリ何トナレハ其當時ハ單ニ所持スルニ過キサル者ニシテ其後裁判所ヨリ持參ノ命令ヲ爲シタル時ハ被告人ノ爲メ業已ニ他ニ隱匿シ若クハ湮滅セシムル恐ナキ能ハサルヲ勿論ナレハ

豫審判事
カ犯罪事
件ノ證憑
トシテ差
押ヘ又ハ
開披スル
能ハサル
物件

ナリ其レ然リ故ニ藏匿ノ二字ハ之ヲ所持ノ意義ニ解釋スルヲ頗ル穩當ナルカ如シ夫レ搜索ノ處分ハ住居ノ靜寧所有ノ保安ヲ滅殺スルモノナルカ故ニ輒スク法文ノ意義ヲ擴充ス可ラサルヲ勿論ナリト雖モ豫審判事カ事實發見ノ爲メニハ亦實ニ已ムヲ得サルニ出ツルト謂フ可キナリ

然リト雖モ第二百二十五條ニ記載スル官吏公吏其他醫師藥商穩婆又ハ辨護士辨護人公証人若クハ神官僧侶等カ其身分又ハ職業ニ關スル默秘、可キ事件ニ付キ記載シタル書類ナルヲ申立タル時ハ豫審判事ト雖モ強テ之ヲ差押へ又ハ開披スルヲ得ス何者此等ノ者ハ証人トシテ陳述ヲ爲ス義務ヲモ免セラレタル者ニシテ而シテ口頭ニテ陳述セサルト筆記ヲ展示セサルトハ元來差異アルヲナク且若シ法律ニ於テ其一ヲ免スル理由アリトスル時ハ同時ニ他ノ一ヲ免スル理由モ亦之アリト謂ハサル可ラサレハナリ是レ第四百十四條ノ規定アル所以ナリトス

檢證處分ハ前段述べタルカ如ク事實ヲ發見セシカ爲メニ行フモノナルカ故ニ場合ニ依リ其臨檢ノ場所ニ於テ直チニ證人、參考人等ヲ訊問シ調書ヲ作ルコトアルヘシ(第百十條)

總テ當時ノ實況ヲ檢視シ及ヒ詳録スルコトハ後ニ至テ被告人又ハ証人ノ供述ニ照查考合スルニ付キ最モ有要ナリトス其他檢証處分ノ必要ナルコトハ今更喋々ノ辨ヲ煩ハス要ナキナリ

物件搜索
ト被告人
ト被害者
ト間ニ差異
アル理由

凡ソ檢証處分ト搜索處分トヲ問ハス通常(即チ現行犯ニ非サル)ノ場合ニ於テハ豫審判事ニ非サレハ之ヲ爲スコト能ハスカノ令狀ノ執行ヲ爲サンカ爲メニハ巡查憲兵卒ニ於テ家宅搜索ヲ爲ス可キコト余前ニ之ヲ述ヘタリ然レモ此ハ畢竟被告人其者ヲ逮捕スルカ爲メ行フモノニシテ敢テ人ノ秘密ヲ發クニ非スコレ二者ノ間大ニ軒輊アル所ナリ
家宅搜索ハ人ノ住居ヲ侵ス處分ナリ夫レ故ナク人ノ住居ヲ侵シタル者ハ刑法ニ依テ處罰ス(刑法第百七十一條以下)今豫審判事カ之ヲ爲ス

ヤ實ニ私益ヲ屈シテ公益ヲ伸スモノナリ公益ノ爲メ法律ノ許シタル處分ヲ爲ス之ヲ故ナク人ノ住所ヲ侵ス者ナリト謂フ可ラサルヤ論ヲ俟タス然レモ苟クモ公益上人ノ家宅ヲ侵ス必要アルレハトテ亦須ラク私益ヲ保護スル手段ナカル可ラス是レ搜索ヲ受ケル住居ノ本人又是等ノ者在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ又其在ラサル時ハ市町村長ノ立會ヲ要スルモノト爲シ且被告人勾留ヲ受ケサル時ハ自カラ之レニ立會ヒ若クハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得ルト定メ一ニハ辯護ニ必要ナル模様ヲ視認メ置キニハ其處分ノ擅恣ニ涉ラサルヤ否ヤヲ注視スルコトヲ得ル便チ與ヘタル所以ナリ
檢證ハ場合ニ依リ未タ公訴ノ起ラサル前之ヲ爲スコトアルモ搜索ハ必ス公訴起リタル以後ニ非サレハ之ヲ行フ可キモノニアラス而シテ此等ノ處分ニ因リ證據物件ヲ差押ヘタル場合ニ於テ其目錄ヲ作り及ヒ其物件ヲ監護シ又ハ遞送スル等ノ事務ハ裁判所書記ノ專ラ擔任スル所

ナリ(第六六條)

檢證、搜索等ノ處分中ハ何人ト雖モ豫審判事ノ允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁セラル、コアルヘシ而シテ若シ此禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得可キモノトス。第百十一條コレ事實發見上實ニ已ムヲ得サル處分ナリト云フ可シ何トナレハ若シ其出入ヲ自由ニセシ平證人タル可キ義務ヲ免カレント欲スル者ハ散逸シテ再ヒ之ヲ知ルコトヲ得サル可ク其被告人ノ爲メニ證據ヲ湮滅セント欲スル者ハ現場ニ進入シテ證據物件ヲ持去ル愛ナシトセサレハナリ況ンヤ豫審ノ秘密ヲ保タンカ爲メニハ前述ノ處分ヲ以テ其傍觀者ヲ杜絶スル必要アルヲヤ。豫審判事右處分ヲ爲シ其日ニ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得可キナリ(第七七條)但其場所人ノ住居等ニ係ル時之ヲ閉鎖スレハ家人ノ迷惑スルコト勿論ナルカ故ニ容易ニ之ヲ爲サス

成ル可ク看守者ヲ置ク可キコトニ注意セサル可ラス。搜索ハ日出前日没後ニ之ヲ爲ス可ラスト雖モ若シ日没前ニ着手シタル時ハ日没後ニ繼續スルコトヲ得ヘシ此事ニ付テハ令狀執行官吏ガ家宅搜索ヲ爲スニ付キ定メタルモノト毫モ異ナルコトナシ(第百四條第三項)又證據物件藏匿ノ疑アル者ノ家宅身体等ヲ搜索スルニ付テハ豫審判事ハ其藏匿ノ充分ナル疑アル者ニ非サレハ容易ク之ヲ爲サルコトニ注意セサル可ラサルナリ。臨檢搜索物件差押豫審中最モ必要ノ處分ナルカ故ニ豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ此處分ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルコトヲ得ヘシ其管轄地外ニ係ル時囑託ヲ爲シ得可キコトハ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ(第百十二條)

檢證ノ肝要ナルコト前既ニ開説シタル所ノ如シ去レハ裁判所ニ於テモ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢事又ハ其他訴訟關係人

公判々事
ニ於テ檢
證處分ヲ

爲シ得ル
場合アリ

ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ受命判事ヲシテ臨檢ノ處分ヲ爲シ報告
ヲ爲サシムルコトヲ得可キナリ但此場合ニ於テハ要急ナルヲ以テ對手
人即チ被告人等ノ立會アルコトヲ必要トセス又此規定ハ地方裁判所ノ
公判事件ニ限ルモノトス(第二百三十八條)其然ル所以ノモノハ他ナシ
區裁判所ノ公判事件ハ元來輕微ナルカ故ニ裁判所ニ於テ特ニ臨檢ヲ
爲ス必要ナシトスルニ由ルナリ
法律ハ事實發見ノ爲メ豫審判事ニ許スニ上來解説シタル者ノ外尙ホ
驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ
關係アル者例ヘハ被告事件ニ付キ嫌疑ヲ被ムリ曾テ訊問ヲ受ケタル
者又ハ民事擔當人等ノ如キ者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタ
ル書類電報又ハ物件ヲ受取リ開披スルコトヲ得ル權ヲ以テセリ是レ物
件差押ノ手續ニ依ラス單ニ受取證書ヲ官署又ハ會社ニ交付シテ同上
文書物件ヲ取寄スルコトヲ得ルモノナリ但其書類物件等不用ニ屬シタ

ル時ハ直チニ之ヲ返付セサル可ラサルコト勿論ナリトス(第百十三條)
以上開說シタル豫審ノ處分タル素ト人ノ住居ヲ侵害シ書類ノ秘密ヲ
摘發シ又ハ所有權ノ行用ヲ妨害スルモノナルコト勿論ナルモ奈何セン
社會公益ノ爲メニハ吾人ノ私益ハ到底數歩ヲ讓ラサルヲ得サルナリ

第七節 證人及ヒ鑑定

證人及ヒ鑑
定ノ義解

余ハ本節ニ於テ證人(第百十五條以下)及ヒ鑑定(第百三十五條以下)ノ事
ヲ義解セント欲ス人証トハ偶然犯罪ノ場所ニ在リタルカ爲メ若クハ
犯罪前後ノ情況ニ付キ見聞スル所アリテ而シテ判事カ檢證スルコトヲ得
サル事柄ヲ陳述スル者ヲ云ヒ鑑定トハ學藝職業ニ依リ經驗アル者犯
罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ檢案考査スルヲ云フ而シテ犯罪ノ性質トハ例
ヘハ殺人罪ノ場合ニ於テ毒殺ナリヤ將タ毆打殺ナリヤノ性質ヲ云ヒ
方法トハ毒殺トスレハ果シテ如何ナル劇劑毒ヲ用ヒタルモノナルヤ
ノ方法ヲ云ヒ結果トハ致命ノ原因毒ニ在リヤ將タ他ノ原因ニ因ルヤ

ノ結果ヲ云フ蓋此等ノ事ヲ明カニスルハ或ル學藝ニ通スル者又ハ職業者ニ非サレハ到底了知シ難キモノアルカ故ナリ是レ許多ノ場合ニ於テ鑑定ノ必要アル所以ナリ

證人及ヒ鑑定人ハ呼出狀ヲ以テ裁判所ニ呼出ス可ク若シ法律ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外呼出ニ應セサル時ハ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可ク其言渡ヲ受ケタル者ハ闕席ナルモ故障ヲ爲スコトヲ得ス唯其言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得ルノミ若シ抗告アリタルトキハ其執行ヲ停止スル効アルモノトス是レ第百十八條ニ規定スル所ニシテ亦鑑定人証人ニ通用ス可キナリ
證人鑑定人呼出狀ヲ受ケテ出頭セサルニ因リ罰金ヲ言渡シタル場合ニ於テ豫審判事ハ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ若シ仍ホ出頭セサルハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ其呼出ニ關スル費用ノ賠償ヲ爲サシムルコトヲ得可シ且證人ニ對シテハ場合ニ因リ右再度ノ呼出狀

證人鑑定
人ニ對ス
ル制裁及
ヒ其間ニ
差異アル
理由

ヲ發セスシテ直チニ勾引狀ヲ發シ又ハ再度ノ呼出狀ニ應セサルハ始メテ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ルモ鑑定人ニ對シテハ右何レノ場合ニ於テモ勾引狀ヲ發スルコトヲ得サルナリ(第百三十六條但書)蓋此區別アル所以ノモノハ他ナシ抑々鑑定ハ終始好意ニ之ヲ爲シテ然後始メテ允當ナル結果ヲ得可ク設ヒ強制方法ニ據テ之ヲ命スルモ苟クモ本人ノ好意ニ之ヲ爲スニ非サレハ決シテ允當ナル結果ヲ得可キモノニアラス加之ナラス世間鑑定ニ必要ナル學藝ニ通シ職業ニ從フ者敢テ勘シトセス豈ニ復盍ソ其自カラ欲セサル者ヲ強ユルヲ須ヒン哉而シテ證人ハ之ニ異ナリ其見聞シタル實況ヲ有ノマ、ニ供述スルモノニシテ強テ之ヲ出頭セシメ強テ之レカ供述ヲ望ムモ敢テ事ニ害ナキ而已ナラス彼ノ鑑定人ニ於ケルカ如ク他人ヲ以テ此者ニ代フルコトヲ得可ラス何者他人ハ此者ト同一ノ見聞ヲ爲サ、ル者ナレハナリ其レ然リ故ニ若シ法律ニ於テ強テ證人ヲ出頭セシメ供述ヲ命スル規定ナキ時ハ時ニ

或ハ必需ノ證據ヲ失ヒ爲メニ有罪ヲ脱シ無辜容ル、恐ナシト謂フ可
ラス是レ此區別ヲ設ケタル所以ナリ

前段記述スル二倍ノ罰金トハ二圓以上二十圓以下ノ二倍ナル四圓以
上四十圓以下ノ罰金ヲ謂フニ非スシテ即チ前ニ言渡シタル罰金ノ二
倍ヲ謂フ例ヘハ初度ノ呼出狀ニ應セサルニ付五圓ノ罰金ヲ言渡シタ
ル并再度ノ呼出ニ應セサルトキハ五圓ノ二倍即チ十圓ノ罰金ニ處ス
ル類ナリ

證人鑑定人罰金言渡書ノ送達ヲ受ケタルヨリ三日内ニ其出頭セサリ
シト正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキ例ヘハ初度又ハ再度ノ呼出
狀ヲ受ケサリシト其呼出狀第百十五條ニ記載スル規定ニ背キタルト、
又ハ洪水震災等ノ天變ニ因リ出頭スル能ハサリシト證明シタル時
ハ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前キニ爲シタル罰金及ヒ賠償ヲ命シ
タル決定ヲ取消ス可キモノトス(第百十九條)

宣誓

證人鑑定人ハ先ツ良心ニ從ヒ正實ニ供述又ハ鑑定ス可キトヲ宣誓セ
サル可ラス而シテ此宣誓タル彼レ歐洲各國ニ於ケルカ如ク聖神ニ誓フ
モノニアラス又本邦舊時ニ屢々行ハレタル神明ニ誓フト云フ意義ニ
非スシテ即チ已レノ良心ニ誓ヒ社會公益ノ爲メ裁判所ニ於テ正實ニ
供述若クハ鑑定ス可キトヲ宣フルモノニシテ是レ蓋誓ニ儼正ノ式ヲ
用ヒ證人鑑定人ノ誠心ヲ發揮セシメ道義上ノ制裁ヲ希フノミニアラ
ス若シ宣誓シテ詐僞ノ供述又ハ鑑定ヲ爲シタル時ハ則チ刑法ニ依テ
處分センカ爲メナリ(刑法第二百十八條以下)然レモ其宣誓ヲ爲サスシ
テ供述若クハ鑑定ヲ爲スモ是レ只事實參考ノ爲メタルニ過キサレハ
設ヒ詐僞ニ涉ルト雖モ敢テ刑法上ノ制裁アルトナシ
論者或ハ證人及ヒ鑑定人ノ事ニ付キ説ヲ爲シテ曰ク豫審ニ於ケル證
人鑑定人ノ供述ハ單ニ豫審判事カ被告事件ヲ公判ニ付スルニ足ルヤ
否ヤヲ決スル資料タルニ過キス故ニ證人鑑定人ハ公判ニ於テ更ニ其

供述ノ變更ヲ爲スコトヲ得ヘシ更ニ之ヲ詳言スレハ豫審ノ供述ハ假定
 ノモノナリ公判ニ於テスル供述ニ非サレハ必スシモ實害ヲ與フ可キ
 モノニ非ス故ニ又偽證ノ罪ヲ構成スルコトナシ豫審ニ於ケル證人鑑定
 人ト公判ニ於ケル證人鑑定人トノ間ニ此偽證罪成否ノ區別ヲ來タス
 所以ノモノハ法律ニ明文ナシト雖モ其供述ノ性質前述ノ差異アルノ
 ミナラス第百九十五條及ヒ刑法第二百十八條第二百二十四條ニ徵ス
 レハ暗ニ其區別アルヲ見ル可シ即チ第百九十五條ニハ公判ニ於ケル
 證人鑑定人ノ供述詐偽ナル場合ニ對スル手續ヲ掲ケタルモ豫審ニ於
 ケル證人鑑定人ノ供述詐偽ナル場合ニ對スル手續ノ定メアルコトナシ
 是レ豫審ノ偽證ハ罪ト爲ラストスル所以ノ一ナリ又刑法第二百十八
 條ニ於テハ刑事ニ關スル証人トシテ裁判所ニ呼出サレタル者被告人
 ヲ曲庇スル爲メ云々トアリ同第二百二十條ニハ被告人ヲ陷害スル爲
 メ云々トアリ但第二百二十條ハ刑事ニ關スル云々ノ一句ヲ省略シタ

リト雖モ等シク此冠詞アルモノトシテ讀マサル可ラサルハ勿論ナリ
 而シテ所謂裁判所トハ何ヲカ指スヤ他ナシ公判ノ裁判所即チ控訴院ニ
 在テハ判事五名ヨリ成ル合議裁判所地方裁判所ニ在テハ判事三名ヨ
 リ成ル合議裁判所區裁判所ニ在テハ一名ノ判事ヲ以テスル裁判所是
 ナリ而シテ公判ニ於テハ判事ノ一名タルト數名タルトヲ問ハス齊シク
 之ヲ裁判所ト稱ス第百九十五條第二百十二條第二百三十一條第二百
 三十八條第三百三十九條等ニ裁判所ニ於テ云々トアルニ依テ知ル可
 シ之レニ反シテ豫審ニ於テハ常ニ豫審判事ハ云々ト云ヒテ裁判所ニ
 於テ云々ト云フコトナシ是レ豫審ノ偽證ハ罪ト爲ラストスル所以ノ二
 ナリト

此主說ハ惟フニ其源ヲ佛國治罪法ノ解釋ニ採リタルモノナラン該法
 ニ從ヘハ右ノ主說ハ敢テ非難ス可キニアラスト雖モ及ホシテ之ヲ本
 法ノ解釋ニ採用セントスルハ決シテ其當ヲ得タルモノニ非サル可シ而

豫審ニ於
 テスル偽
 證ハ罪ト
 爲ラハス
 證人トシ
 テハ非ス
 云ハスル
 理由ナル
 由ナリト

ノ刑法第二百十八條ニ所謂「裁判所ニ於テ云々」ノ語ハ控訴院以下ノ各裁判所及ヒ公判豫審ノ裁判所ヲ區別セシテ記載シタルモノナレハ此等ノ各裁判所ヲ包含シタル者ナリト解釋セサルヲ得ス焉之ヲ以テ公判豫審ノ偽證ニ區別アル理由ト爲スニ足ランヤ又第九十五條ニ於テ規定シタルモノハ止タ一種公判廷ニ於テ爲シタル偽證ノ現行犯ヲ處分スルニ付キ特別ノ手續ヲ定メタルニ過キス固ヨリ豫審ニ於テスル偽證ヲ理セサランカ爲メ故ラニ公判ニ於テノ偽證ニ係ル手續ヲ定メタルモノニアラス然リ而シテ此レト同一ノ處分ヲ豫審判事ニ許サ、ル所以ハ抑豫審ハ事ヲ秘密ニ取扱フ所ニシテ彼ノ公判ニ於ケルカニ如ク公衆ノ面前ニ於テスルモノニ異ナルカ故ニ若シ此等ノ處分ヲ許ス時ハ世人ヲシテ或ハ擅横ノ處分ニ出タルカノ疑ヲ懷カシムルヤモ知ル可ラサルヲ以テナリ去レハ豫審判事若シ證人カ詐僞ノ供述ヲ爲シタルヲ發見シタル時ハ即チ職務執行中犯罪ヲ知り得タル者ト

爲シ第五十二條ニ從ヒ之ヲ檢事ニ告發シテ可ナリ若シ又其偽證タルヲ發見セシテ本案事件ヲ公判ニ付シタル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ告發スルモ亦可ナリ寧ソ第九十五條ノ規定アルニ因リ豫審ニ於テスル偽證ヲ問フ可ラストスル理アラシヤ又豫審ノ供述ハ假定ノモノナリト云フト雖モ是レ亦誤謬ノ甚シキモノト謂ハサル可ラス何者本法ノ所定ニ據ルモ豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ公判ニ於テ更ニ呼出スヲ得ルノミニシテ必スシモ之ヲ呼出ス可キモノニアラス(第九十八條)然レハ則チ其公判ニ於テ更ニ呼出シタル時ハ其證人カ曾テ豫審ニ於テ爲シタル供述ハ之ヲ假定ノモノナリシト云フヲ得ルトスルモ更ニ其證人ヲ呼出サスノ止タ其供述調書ヲ朗讀セシメタリトセシ平朗讀シタル調書ハ公廷ニ於ケル證人ノ供述ト同一ノ効ヲ有スルヲ勿論ナル故ニ裁判所ニ於テ其証言ニ因リ無罪若クハ有罪ノ言渡ヲ爲ス場合モ亦實際必ス居多ナラン之ヲ如何ンソ專ラ假定ノモノト云フ

証人鑑定
人呼出ニ
應セサル
時ノ刑ト
出廷シテ
宣誓ナシ
セテ陳述
シハ陳述
又ハ宣誓
ナシハ陳
テハ陳述
トノ時ニ
重トクハ
ルノ時ニ
理由差ア
輕刑アリ

証人鑑定人呼出ニ應シテ出頭シタルモ宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供
述ヲ肯セサル時ハ豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聞キ刑法第百八十條ニ從
ヒ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可キモノトス是レ公務ヲ行フ
ト拒ム罪アルニ由ル然リ而シテ其呼出ニ應セサル時言渡ス所ノ罰金
ニ比シテ更ニ重キ所以タル蓋其呼出ニ應セサリシ者ハ非除ヤ法律上
已ムトヲ得サル事情ナキニモセヨ本人其者ノ爲メニハ實際已ムトヲ
得サル事情アリタルヤモ知ル可ラス加之ナラス現ニ出頭シナカラ宣
誓ヲ肯セス又ハ宣誓シナカラ供述ヲ肯セサル者トハ其情狀ニ於テ固
ヨリ徑庭ナカル可ラサルヲ以テナリ
前段述フル所ハ通事ニ付テモ敢テ異ナル所ナキナリ(第百一條)
茲ニ一言セサル可ラサルモノハ抑刑法第百八十條ニ記載スル罰金ハ
カノ第百十八條等ニ規定スル單ニ本法ニ於テ豫審判事ニ一任シタル

証人鑑定
ニ出頭シ
爲サハル
トシテ出
シテ供述
ナシハハ
ルキニハ
差異アリ

罰金ト自ツカラ其性質ヲ異ニシ刑法ニ規定シタル通常ノ輕罪ナルカ
故ニ須ラク裁判所ノ處分ニ付ス可ク之ヲ豫審判事ノ處分ニ一任ス可
ラサルモノニ似タリ蓋不告不理ハ治罪ノ原則ナルニ此場合ニ於テハ
未タ公訴ノ起ラサルニ拘ラス判決言渡ヲ爲シ得ルヲ以テナリ然レモ
是レ一種特別ノ變則ニシテ固ヨリ常則ヲ以テ推ス可ラサルナリ
證人又ハ鑑定人トシテ豫審判事ノ呼出ヲ受ケタル者ハ必ス出頭セサ
ル可ラサルト若シ出頭セサルキハ罰金ノ言渡ヲ受クルニ至ル可キト
ハ前段既ニ記述スル所ノ如シ然レモ此規定ニハ例外アリ官吏公吏又
ハ官吏公吏タリシ者カ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スル場
合及ヒ醫師藥商穩婆辯護士辯護人公証人神職僧侶カ其身分職業ノ爲
メ委託ヲ受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關ス
ル場合ニ於テハ其事情即チ官吏公吏タル職務上默秘ス可キ義務アル
コト又ハ醫師藥商等ノ身分若クハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リ

獄秘ス可キ義務アルコトヲ開示シテ證言ヲ爲スコトヲ拒ムヲ得可シ是レ
第二百二十五條ニ記載スル所ナリ然ルニ該條ニ記載スル者豫審判事ノ
呼出ヲ受ケテ出頭ヲ爲サルハ如何余惟フニ無論第百十八條ニ依
リ罰金ヲ言渡スヲ得可シ何者彼等豫審判事ニ對シ證言ヲ拒ムヲ得可
キモ漫然之ヲ拒ムコトヲ得可キモノニアラス即チ第百二十五條末項ニ
記載スルカ如ク拒絶ノ原因タル事實ヲ開示シテ且之ヲ説明スルコトヲ
要ス今夫レ法律カ官吏其他ノ者ヲシテ證言ヲ拒絶スルコトヲ得セシメ
タルモノハ要スルニ其職務上身分上若クハ職業ノ德義ヲ保タシメン
カ爲メニ外ナラス苟クモ秘密ヲ供述セサレハ裁判所ニ出頭スルモ彼
等毫モ職務上身分上若クハ職業上ノ德義ニ傷ツクル所ナシ果シ然ラ
ハ則チ其出頭セサル者ニ對シ證人トシテ供述スル義務アル者ガ呼出
ニ應セサルハ均シク罰金ヲ言渡ス可キコト理宜シク然ラサルヲ得ス
是レ第百二十五條初項ニ「證言ヲ拒ムコトヲ得ト記シ出頭ヲ拒ムコトヲ

得ル場合ヲ示サ、ル所以ナリ

凡ソ何人ト雖モ犯罪事件ニ付キ見聞スル所アル者ハ證人ト爲リテ供
述スルコトヲ得可ク學藝職業ニ依テ特別ノ學識經驗アル者ハ鑑定ヲ爲
スコトヲ得ルヲ以テ原則トス然レモ第百二十三條及ヒ第百二十四條ニ
記載スル數者ハ證人鑑定人ト爲ルコトヲ許サス蓋前條ハ專ラ或ル身分
ニ關シ後條ハ專ラ能力ニ關スルモノタリ是レ分テ二條ト爲シタル所
以歟尤モ舊治罪法草案ニ於テハ前條ニ記載スル者ハ宣誓ヲ爲スト爲
サ、ルト本人ノ意思ニ任シ(草案第百九十七條)後條ニ記載スル者ハ宣
誓ヲ許サストセリ(草案第百九十八條)舊治罪法及ヒ本法ニ於テ分テ二
條ト爲シタルハ亦幾分カ該草案ノ痕跡ヲ遺スモノト云フモ可ナリ而
シテ此等ノ者ヲシテ證人タルコトヲ得サラシムル理由ニ至テハ二者自ッカ
ラ別ナキニアラス蓋第百二十三條ニ記載スル者ハ自己ニ利害ノ關係
アリ又ハ情義若クハ親愛上ノ關係アル者タリ然ルモ仍ホ彼等ヲ證

言鑑定ヲ爲サシメン乎情理ヲ傷ハサラント欲セハ則チ誓矢ニ背カサルヲ得ス誓矢ヲ全クセント欲セハ則チ情理ノ外ニ立ヲサルヲ得ス夫レ情理ヲ棄テ利益ヲ犠牲ニスルト誓矢ニ背キテ刑辟ニ觸ル、ト二者必ス其一ニ居ラサル可ラストスルカ如キハ洵ニ法律ノ忍ヒサル所ナリ宜ナリ法律カ証人ノ義務ナキ者ト爲シタルヲ但彼等若シ自カラ進テ證人タルヲ望ム時ハ法律ニ於テ飽マテ之ヲ拒絕スル理由ナキカ如シト雖モ法律上視テ以テ何等ノ關係ナキ證人ノ供述ト同一ナリトセス故ニ設ヒ實際ニ宣誓ヲ爲サシメ證人トシテ供述セシメタリト雖モ其供述ハ即チ事實參考タルニ過キスト爲シ詐僞ノ供述アリト雖モ之ヲ以テ僞証ノ刑ニ處スルヲ得サルモノトス第百二十四條ニ記載スル者ハ前條ニ記載スル者ニ異ナリ專ラ能力ニ關スルカ故ニ其中或ハ宣誓ノ輕忽ニ爲ス可ラサルヤ否ヤ即チ其趣旨ヲ了解スルヲ能ハサル者アラン又或ハ宣誓ノ如何ナルモノタルヤ了知スルモ廉恥ノ責

ム可ラサル殆ンド其宣誓ヲ爲シタル實ナキ者モ亦之アラン然ルニ尙ホ此等ノ者ヲシテ宣誓ヲ爲サシメ真ノ證人鑑定人ト爲スカ如キハ法律上此等ノ者ノ宣誓ニ信ヲ指クヲ明言スルト同様ナレハ是レ曷ソ法律自カラ宣誓ノ力ヲ弱ムルニ異ナラン寧ロ元來證人鑑定人タルヲ許サ、ルノ愈レルニハ若カサルナリ但茲ニ一言ス可キハ第百二十四條第六號ニ記載スル者ハ寧ロ第百二十三條ニ入ル、ノ穩當ナルカ如シ何者其現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者ハ自己ノ利益上關係スル所アルモ能力上毫モ證人鑑定人タルヲ得サル理由アラサレハナリ鑑定ヲ命セラレタル者前述二條ニ記載スル者ナル時ハ其鑑定ハ固ヨリ事實參考ニ供セラル、ニ過キササルモノトス然レモ事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲハ或ル急速ヲ要スル場合ノ外決シテアルヲナシ何者

實際他ニ正當ノ鑑定人ヲ得ルヲ得可キヲ以テナリ
證人鑑定人呼出狀ニ因リ出頭シタル時ハ呼出狀ヲ豫審判事ニ差出ス
可ク若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲ疏明ス可キモノトス(第
百二十條)

余ハ今茲ニ聊カ注意ヲ惹ク可キモノアリ即チ本法ニ屢々用ヒタル所
ノ證人トハ單ニ第二百二十二條ニ記載スル宣誓シタル眞正ノ證人ノミ
ニアラスシテ事實參考人ヲモ包括シタル場合甚ダ多キヲ是ナリ例ヘ
ハ第百十五條乃至第百十七條ニ云ヘル證人第百二十條第百二十一條
第百九十一條以下等ニ云ヘル證人ノ如キ是ナリ

凡ソ證人ハ豫審ト公判トヲ問ハス細節ニ涉リテ訊問スルヲナク先ツ
概括シタル問ヲ起シ證人ヲシテ其見聞シタル事實ヲ陳述セシメ聽取
スルヲ通常トス故ニ此點ニ就テハ彼ノ被告人訊問ト大ニ差異アリト
云フ可シ蓋被告人ハ言ヲ飾リ詞巧ミニシ汲々トシテ唯己レニ不利ナ

ランヲ畏ル故ニ動モスレハ他事ニ涉リ却テ緊要ノ供述ヲ爲サ、ル
ヲアリ夫レ此ノ如キ場合ニ於テハ豫審判事ハ其曖昧ナル所、愈甚ナル
點ニ付キ追究推問ノ事實發見上最モ必要ナル場合ニ遭遇スルヲ甚ダ
多カル可シ固ヨリ證人ノ供述トテモ事、枝葉ニ涉リ且明瞭ナラサル點
アル時ハ之ヲ推問スルヲナキニアラスト雖、其訊問ノ方法二者ノ間
自ッカラ精粗ノ區別ナキニアラス本法ニ於テハ表題ニ證人訊問被告人
訊問ト同一ノ文字ヲ用ヒタリト雖、其性質上自ッカラ區別アルヲ固ヨリ
疑アラサルナリ

豫審ノ證人鑑定人ニ付テ定メタル規則ハ總テ公判ノ證人鑑定人ニモ
適用セラル可キモノトス第百九十條ニ曰ク「第百十五條以下ノ規定ハ
公判ノ證人ニ第百三十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準
用ス」ト然レハ則チ此第百十五條以下ノ規定ヲ説明スル時ハ亦隨テ右
準用ス可キ公判ノ規定ヲ講解シタルモノト云フ可キナリ

證人ト爲
ルハ人民
ノ公務ナ
ルヲ及ヒ
其公務ヲ
免セラレ
タル者ア
ル理由

夫レ法律ニ於テ罪ヲ犯シタル者ヲ罰スル必要アリトスレハ亦其證憑ヲ集取スル必要ナカル可ラス既ニ證憑集取ノ必要アリ人民ニ負擔セシムルニ證人タル義務ヲ以テセサルヲ得ス是レ法律ニ於テ證人タルヲ肯セサル者ニ對シ若干ノ制裁ト強制ノ方法トヲ定メタル所以ナリ然リト雖モ官吏公吏醫師藥商穩婆等第二百二十五條ニ記載スル者其身分若クハ職業上ノ義務ニ關シ若クハ委託ヲ受ケタル秘密ノ事件ニ付テハ法律ハ強テ此等ノ者ヲシテ證人タラシムルヲ欲セス蓋此等ノ者ハ社會ノ公安ニ關シ又ハ人民ノ身體及ヒ財產ノ重ヲ委スル者ニ非サレハ則チ道德宗教ノ司命者タリ社會ニ一日モ缺ク可ラサルモノト云フ可シ然ルニ法律ニ於テ此等ノ者カ其身分又ハ職業上最モ必要ナリトスル不羈ノ精神ヲ奪ヒ強テ受託ノ秘密ヲ揚發シ陰私ヲ漏告セシムルモノトセン乎社會人民ハ何チ以テカ此等ノ者ニ信任スルヲ得ン如斯ハ寧ロ公益ヲ傷フモノニアラヤ是レ我刑法ニ於テ第三百六十

條ノ設アリ本法ニ於テ特ニ第二百二十五條ノ規定アル所以ナリ但刑法ニハ公證人ノ語ナシト雖モ惟フニ是レ偶々遺脱シタル者ナルヘキノミ
證人ハ他ノ證人又ハ被告人ト各別ニ訊問スルヲ要ス(第二百二十七條、第二百九十三條)是レ雷同ノ弊ヲ豫防スル趣旨ニ出ツ然レモ爰ニ注意ス可キハ此各別ニ之ヲ訊問ス可シトノ語ハ豫審ニ於ケル場合ト公判ニ於ケル場合トニ依リ自ツカラ其意義ヲ異ニスルモノアルト是ナリ抑豫審ニ於テハ他ノ證人及ヒ被告人ト同廷セシメスシテ訊問スルヲ常ト爲シ或ル例外ノ場合即チ格別ノ必要アル場合ニ於テノミ他ノ證人及ヒ被告人ト同席即チ對質セシムルヲアルナリ公判ニ於テモ亦他ノ證人ト同廷ノ上供述セシムルモノニアラス順次各別ニ供述セシムルヲ常トスルト雖モ其既ニ供述シ終リタル證人ハ必スシモ直チニ退廷セシムルヲ要セサルノミナラス裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ擅

ニ退廷スルコトヲ得サルナリ(第九十三條)又公判ニ於テ證人供述ヲ爲ス時ハ被告人ハ同廷シテ之ヲ聽クコトヲ常則ト爲スコレ辯護ノ權ヲ保護スル意ニ外ナラス而シテ裁判長ニ於テ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テハ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタル時ハ其證人ノ供述中被告人ヲ退席セシムルコトヲ得ルノ規定アリ(第九十七條)ト雖モ是レ唯或ル例外ノ場合ニ於テ然ルノミ要スルニ公判ノ證人ハ檢事及ヒ被告人ノ面前ハ更ニモ言ハス公衆ノ面前ニ於テ供述スルヲ通常ノ規定ト爲ス而シテ豫審ノ場合ト公判ノ場合トニ於テ法律ニ所謂各別ニ之ヲ訊問ス可シノ文意自ツカラ差異アリト云ヘルハ則チ之レカ爲メナリ

豫審ト公判トヲ問ハス判事ハ原被ヨリ指名シタル者ヲ呼出スコトヲ得ルノミナラス其指名セサル者ト雖モ職權ヲ以テ呼出スコトヲ得可シ又非除ヤ原被ノ指名シタル者ト雖モ事實發見上少シモ必要ナシト思料

スル時ハ之ヲ呼出ササルコトヲ得可ク又曩ニ調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得可キナリ(第八十五條)

舊治罪法ノ所定ニ依レハ豫審ノ證人ハ總テ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少ナクモ二十四時ノ猶豫アル可キモノト爲シ公判ノ證人ハ違警罪事件ニ付テハ少ナクモ二十四時輕罪事件ニ付テハ少ナクモ一日重罪事件ニ付テハ少ナクモ二日重罪事件ニ付テハ少ナクモ一日猶豫アル可キ者ト爲シタリ(治罪法第七十三條第三百二十五條第三百五十五條第三百八十五條參看)蓋證人呼出ニ付キ多少ノ猶豫ヲ與フル趣旨タル要スルニ着手シタル事業ヲ差措キ出頭スル迷惑ヲ斟酌シタルニ外ナラス果シテ然ラハ則チ法律カ犯罪事件ノ輕重ニ因リ此猶豫期間ヲ異ニスル必要ナキコト勿論ナレハ本法ニ於テ犯罪ノ輕重ニ因リ猶豫期間ヲ異ニスル規定ヲ採ラサリシハ余ノ最モ喜フ所ナリ何トナレハ大凡

証人ノ物タル其實際見聞シタル有リノ儘ヲ供述スルニ過キサルカ故ニカノ被告人ニ於ケルカ如ク豫シメ訊問ス可キ事柄ヲ知ラシムル要ナク又分疏辯解ノ準備ヲ爲ス等ノコトアル理ナケレハナリ
凡ソ證人ハ現行犯ノ場合ヲ除ク外呼出ヲ受ケテ出頭シタル者ニ非サレハ之ヲ訊問スルコトヲ得サルモノトス是レ原則ナリ此規定アル所以ハ他ナシ或ハ被告人ニ含ム所アルカ將タ徳トスル所アリテ故ラニ虚偽ノ供述ヲ爲サンカ爲メ自カラ出頭シタル者ニ非サルカノ疑アルニ由ル然レモ檢事其他訴訟關係人ニ於テ異議ノ申立ナキ片ハ同上ノ嫌疑アル者ニ非サル可シト推測シ得可キカ故ニ裁判所ニ於テ證人トシテ其供述ヲ聽クコトヲ得可キ者トス(第二百十七條末項是レ例外ナリ而テ此例外アルハ要スルニ更ニ呼出ス費用ヲ省減スルヲ得可ク實際利アリテ毫モ其害ヲ見サルニ由ル但爰ニ一言ス可キハ此證人カ未ダ被告人若クハ他ノ證人ノ供述ヲ少シモ聽カサリシヲ要スルコト是ナリ何

者既ニ被告人若クハ他ノ證人ノ供述ヲ聽キタル者ハ或ハ他ニ雷同スルコトアリテ眞ニ事實ノ供述ヲ爲スヲ得サル可シトノ嫌疑ヲ免カレサレハナリ

公判ノ證人ニ特別ナル規定

夫レ犯罪ハ非常ナリ犯罪ナキハ尋常ナリ非常ナルカ故ニ人ノ犯罪アルコトヲ言フ者ハ亦必ス之ヲ證明セサル可ラス尋常ナルカ故ニ進テ犯罪ナキコトヲ證明スルニ及ハス只タ人ノ犯罪アルコトヲ主張スルニ方リ始メテ其犯罪ナキ所以ヲ證明ス可キノミ依此觀之公訴ハ則チ檢事先ツ之ヲ證明シ私訴ハ先ツ民事原告人之ヲ證明シ其證明セラレタルニ追テ被告人及ヒ民事擔當人其公私兩訴ノ主張非ナルコトヲ證明スルハ攻撃辯護ノ方法素ト自然ノ順序タルヤ知ル可シ故ニ本法ニ於テ別ニ其規定ナシト雖モ證人數名アル時ハ其特別ノ理由アルモノハ格別先ツ檢事ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ヨリシ民事原告人ノ請求ニ因

公判ノ證人正當ノ事由ニ由リ出頭セサル場合ニ於テ其證人ヲ必キハトスルニ要スルハ之ヲ奈何ス可キ乎

證人ノ氏名ハ之ヲ相手方ニ通告スルニ要スル理由

リ呼出シタル證人之レニ次キ被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ハ最終ニ訊問スルヲ至當ト信スルナリ

證人正當ノ事由ナク呼出ニ應セサルハ罰金及ヒ費用償還ノ言渡ヲ受ケ尙ホ勾引狀ニ依リ引致セラル、コアル可シト雖モ若シ正當ト認ム可キ事故例ヘハ自己ノ疾病ニ因リ又ハ父母ノ疾病ヲ看護スル者ナキニ因リ離去スルコト能ハサル公務ニ従事スルニ因リ呼出ニ應スルコト能ハサル旨ヲ説明シタル場合ニ於テ仍ホ其證人ノ訊問ヲ必要トスルキハ裁判所ハ其部ノ判事一名ニ命シ又ハ其地ノ區裁判所判事ニ囑託シ證人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得可シ而シテ其受命判事又ハ受託判事ハ通常ノ手續ニ從ヒ證人訊問調書ヲ作り之ヲ同上裁判所ニ提出ス可キモノトス(第九十一條)

又檢事又ハ被告人若クハ民事原告人ノ請求ニ因リ證人ヲ呼出スルハ開廷ヨリ一日前其證人ノ氏名目錄ヲ各相手方ニ送達スルコトヲ要ス(第

百九十二條)是レ相手方ヲシテ證人資格ニ係ル異議ノ有無ニ付キ豫考スル所アラシメ將タ相手方ニ證人アルヲ視テ己レモ亦證人呼出ヲ請求セント欲スル者ノ便宜ヲ計リタルニ外ナラサルナリ

證人ハ裁判長ニ於テ之ヲ訊問スルヲ規則ト爲シ陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケテ直チニ之ヲ訊問スルコトヲ得ルモ被告人民事原告人民事擔當人辯護人等ハ止タ其辯論ニ必要アリト思惟スル事柄ニ付キ其訊問ヲ裁判長ニ請求スルコトヲ得ルノミ(第九十四條)是レ蓋訊問ノ條項錯雜シ審理ノ順序其宜シキヲ失フ恐アルカ爲メナリ然リ而シテ檢事モ亦畢竟訴訟關係人タルニ外ナラスト雖モ立法者ニ於テハ敢テ前述ノ恐ナキモノタルヲ信シ特ニ自カラ訊問スルコトヲ許シタルモノナラン歟然レモ余ヲ以テ之ヲ視ルニ裁判長ニ於テ審理ノ順序方向ニ付キ相當ノ取締ヲ爲ス時ハ總テ訴訟關係人ヲシテ直チニ證人ヲ訊問セシムルモ亦敢テ不都合ナキノミナラス寧ロ便宜ナル可シト思量セラ

ル、ナリ

爰ニ注意ス可キハ第九十四條末項ノ「訴訟關係人」ト云ヘル中ニハ被告
人ヲモ包含スルコト是ナリ故ニ被告人ニ於テモ亦裁判長ニ證人ノ訊
問ヲ請求スルコトヲ得可ク又本條ノ規定ニハ訴訟關係人ヨリ被告人訊
問ノ請求ヲ爲シ得ルコト及ヒ被告人數名アル時甲被告人ヨリ乙被告人
訊問ノ請求ヲ爲シ得ルコトニ付キ別ニ規定スル所ナシト雖モ此等ノ請
求ハ本條ニ準據シテ之ヲ爲シ得ルコト勿論ナリトス

證人公廷
ニ於テ偽
證ヲ爲シ
タル時ノ
處分方法

證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ(則チ偽證)禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ
者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ
又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ其供述ノ筆記ヲ添ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判
事ニ送致スル言渡ヲ爲ス可キナリ(第九十五條)而メ其供述ノ筆記ヲ
添フルモノハ即チ偽證事件ノ由テ起ル所ナレハナリ又第九十五條
ノ末項ニハ本條ノ場合ニ於テハ云々本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得ト

云ヘリ是レ偽證罪ノ成否ハ大ニ本案ニ關係ヲ有スルニ由ルナリ

鑑定ニ特別ナル規定

鑑定ニ係ル規則ハ概シテ證人訊問ノ規則ト同一ナル(第三十六條)カ
故ニ鑑定ニ特別ナル規定ニシテ特ニ詳説ス可キ程ノモノアルコトナシ
去レハ余ハ只簡單ニ之ヲ解説スルニ止マシ

豫審判事ハ初ヨリ事件ノ難易ニ依リ鑑定人一名若クハ數名ヲ命シ又
ハ初メ命シタル鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増員シ
又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得要其適實ナル結果ヲ得ントスル
ニ在ルノミ

鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事ハ
檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シト雖モ
勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス(第三十八條)是レ余カ前ニ解説シタル所ナ
リ

判事ハ成ル可ク鑑定ニ立會フ可シ是レ管ニ鑑定ノ手續ヲ嚴密ナラシムル益アルノミナラス其生スル結果ヲ親シク目撃スルハ心證ヲ得ル上ニ於テモ亦大ニ裨益アル可キヲ以テナリ

鑑定人ハ鑑定書ヲ作り鑑定ニ要シタル時間其由リタル手續方法結果及ヒ結果ノ理由并ニ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所等詳細ニ記載スルヲ要ス若シ數名ノ鑑定人各其意見ヲ異ニシタル時ハ各自ニ同上ノ記事ヲ爲サ、ル可ラス第四百四十條ニハ其理由ヲ記載ス可キヲ言ハスト雖モ斯々ノ理由ナルニ因リ斯々ノ結果ヲ生シタリ等ノ説明ハ判事ヲシテ其結果ノ適否ヲ考厥セシムルカ爲メ最モ必要ナルヲ覺ユルナリ況ンヤ鑑定人數名ノ鑑定一致ニ出テサル場合ニ於テラヤ

鑑定人鑑定書ヲ作ルニハカノテ簡易ナル文字ヲ用ヒ了解シ易カラシメサル可ラス豫審判事鑑定書ヲ受取リタル時ハ最モ注意シテ其記載ヲ檢閲シ若シ了解シ難キ點アル時ハ其説明ヲ爲サシメ其質問及ヒ供

述ハ之ヲ調書ニ作り訴訟書類ニ添置ク可キモノトス

以上述フル所ノ外尙ホ多少ノ言フ可キモノナキニアラサルモ事皆ナ簡易ナルカ故ニ更ニ詳解ヲ要セサル可シ

第八節 現行犯ニ特別ナル規定

余ハ本節ニ於テ現行犯ニ特別ナル規定即チ現行犯ノ搜查起訴及ヒ豫審ニ關スル總テノ規定ヲ解説ス可シ

現行犯ノ定義ハ第五十六條ニ指示セリ

第五十六條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發

現行犯ノ
定義

覺シタル罪ヲ謂フ

本條ノ所定ニ依レハ大凡現行犯罪トハ犯罪ノ現ニ行ハル、モノ若クハ現ニ行ヒ終リテ仍ホ罪跡ノ暖ナルモノヲ云ヒ其犯罪アリテヨリ若干ノ時間ヲ經過シタル時ハ之ヲ現行犯罪ト云フ可ラス即チ非現行犯ナルカ故ニ此區別ハ其實犯罪ノ區別ニアラス更ニ之ヲ悉言スレハ犯

罪ノ性質若クハ種類ニ基キタル區別ニアラサルヤ知ル可シ蓋シ總テ犯罪ハ其現ニ行ハル、時アリ又業已ニ行ハレ終リタル時アリ凡ソ何レノ犯罪ト雖モ必ス此二箇ノ繼續シタル狀況ヲ具備セサルコトナカル可ケレハナリ但其現行犯タリ非現行犯タルハ則チ犯罪ノ發覺シタル時ニ因テ區別セラル、モノトス而シテ法律ニ此ヲ區別スル所以ノモノハ畢竟訴訟手續上彼此其揆ヲ一ニセサルモノアルニ因ル尤モ此區別ノ利益及ヒ理由等ニ付テハ余曾テ刑法講義ニ於テ之ヲ詳説シタルハ宜シク參觀ス可キナリ(刑法講義三百四十一頁以下)

前掲第五十六條ハ純粹ノ現行犯罪ヲ明示シタリト雖モ他ニ其實現行犯罪ニ非スシテ尙ホ現行犯罪ニ准セラル、モノアリ

現行犯ニ
准ス可キ
場合

第五十七條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

- 第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラルルトキ
- 第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帯シ又ハ身體被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思

料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

本條第一號及ヒ第二號ノ場合ハ其現行犯罪ニ非サルコト論ヲ俟タサルモ或ハ人ニ追呼セラレテ逃走スルニ因リ或ハ兇器、贓物等ノ物件ヲ携帯シ又ハ犯罪ノ痕跡アリタルニ因リ其犯人タル可キコトヲ推測セシムルニ足ルモノニシテ又其第三號ノ場合ハ敢テ追呼セラレタルニアラス又兇器、贓物等ノ物件ヲ携帯シ又ハ犯罪ノ痕跡アリタルニハアラスト雖モ濫ニ戸主ヨリ此等ノ處分ヲ求ム可キモノニアラサレハ苟クモ其求アラシムニハ必スヤ迅速ニ處分ス可キ犯罪アルコトヲ推測セシムルニ足ルヲ以テ齊シク之ヲ現行犯ニ准シ處分スヘキモノト爲セリ爰ニ戸主ヨリ云々トアルト雖モ一概ニ一戸ノ主ト斷了ス可ラス故ニ戸主

ニ代ル可キ者例へハ戸主ノ代人又ハ留守者ノ求アリタル場合ニ於テモ亦須ラク本條ニ據ラサル可ラサルナシ
余ハ此ニ豫審處分ニ關シ現行犯罪ト非現行犯罪トヲ區別スル利益ヲ示サン

處分上現行犯ト非
現行犯ト非
區別スル
利益如何

第一 若干ノ犯罪ニ付テハ法律ハ現行犯ノ場合ノ外犯罪ノ舉証ヲ許サ、ルモノアリ語ヲ換ヘテ言ヘハ現行ニ非サル時ハ法律上犯罪トシテ罰セサルモノアリ

例へハ刑法第二百六十一條ニ記載スル賭博罪同第四百二十五條六、二、第四百二十六條一、二、五、八、第四百二十七條三、四、六、十二、十四、第四百二十八條六、九、第四百二十九條六、十一、十二、等ニ規定スル違警罪ノ多クノ場合ノ如キ是ナリ

現行犯ト
非現行犯ト
於ケル第一
二ノ差

第二 重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ司法警察官及ヒ巡查憲兵卒ハ勿論平人ト雖モ令狀若クハ命令

ナクシテ直チニ犯人ヲ逮捕スルヲ得第五十八條第六十條然ルニ非現行犯ノ場合ニ於テハ平人ハ勿論司法警察官及ヒ巡查憲兵卒ト雖モ令狀若クハ命令ナクシテ犯人ヲ逮捕スルヲ得サルモノトス

巡查憲兵卒現行犯人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ司法警察官ニ引渡シ司法警察官ハ其逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ルモノトス(第五十九條)又司法警察官自カラ犯人ヲ逮捕シタルカ又ハ巡查等ヨリ犯人ヲ受取リタル時ハ假リニ犯人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可キナリ(第四百四十七條)

平人ニ於テ現行犯人ヲ逮捕シタル時モ亦司法警察官ニ引致セサル可ラスト雖モ若シ實際事務ノ差支アリ若クハ其實力犯人ノ引致ヲ爲スニ耐ヘサル場合ニ於テハ自己ノ氏名職業住所及ヒ其逮捕ヲ爲シタル事由ヲ陳述シテ假リニ之ヲ巡查又ハ憲兵卒ニ引渡スヲ得然レモ其

引渡ヲ爲シタル逮捕者ハ第四十九條第五十三條ノ規定ニ從ヒ速ニ告訴(自己被害者タル時)告發(他人被害者タル時)ヲ爲サ、ルヲ得ス何トナレハ通常巡查等カ現行犯人ヲ逮捕シテ司法警察官ニ引致シタル時ハ司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ルヲ前陳ノ如シト雖モ此場合ニ於テハ巡查等ハ自カラ犯人ヲ逮捕シタルニアラス假リニ其引渡ヲ受ケタルニ過キサ、ルヲ以テ又自カラ告發ヲ爲ス可キモノニアラサレハ其逮捕者ニ於テ告訴告發ヲ爲スヲ當然ナレハナリ而シテ巡查等ハ其逮捕者ノ陳フル所或ハ怪訝ス可キモノアルカ又ハ判然セサル廉アル時ハ官署ニ同行センヲ求ムルヲ得可シ其同行ヲ求メラレタル逮捕者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ之ヲ拒ムヲ得ス(第六十一條)其然ル所以タル畢竟擅ニ人ヲ逮捕スル憂ヲ防クニ在リテ凡ソ人ノ自由ヲ保護センカ爲メニハ實ニ必需缺ク可ラサル法規タルヲ信スルナリ

罰金ノ刑ニ該ル非現行犯ノ被告人ハ第七十二條ニ記載スル例外ノ場合ヲ除ク外勾引狀ヲ以テモ尙ホ之ヲ逮捕スルヲ能ハサルハ余カ本編第一節ニ於テ業已ニ詳説シタル所ノ如シ故ニ現行犯ノ場合ニ於テハ其被告人ノ犯人タルヲ殆ント疑テ容レサル而已ナラス苟クモ機ヲ愆ル時ハ犯人逃走シテ再ヒ之ヲ確認スルヲ能ハサルカ如キ場合ナキニ非スト雖モ尙ホ一時タモ之ヲ取押ラルヲ許サ、ルナリコレ第六十條ニ於テ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪云々ト云ヒテ單ニ輕罪云々ト云ハサリシ所以ナリ又違警罪ニ付テハ犯罪中最モ輕微ナルカ故ニ其現行犯ノ場合ト雖モ巡查憲兵卒ハ直チニ之ヲ逮捕スルヲ得ス

被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之ヲ即決ヲ爲ス可キ官署即チ當今ニテハ警察署又ハ憲兵屯所ニ告發ス可キモノト爲シ止ダ其氏名住所分明ナラサルカ又ハ逃亡ノ恐アル者ニ限り檢事又ハ同上官署ニ引致スルヲ得ルモノト爲セリ(第五十八條第二項)

現行犯ト
非現行犯ト
於ケル間ニ
三ノ差第ニ

第三 重罪輕罪ノ非現行犯罪ニ付キ豫審處分ヲ爲スハ一ニ豫審判
事ノ職權ナリト雖モ現行犯ニシテ急速ヲ要スル場合ニ於テハ地
方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ニ其旨ヲ通知シ豫審
判事ヲ待ツコトナク直チニ犯所ニ臨檢シ罰金及ヒ費用賠償ノ言渡
ヲ爲ス外豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得可ク(第四百四十四條
第四百四十六條)又司法警察官ト雖モ勾留狀ヲ發スル外假リニ同様
ノ處分ヲ爲スコトヲ得可キナリ(第四百四十七條)

第四百四十四條ニ所謂豫審判事ニ屬スル處分トハ即チ被告人又ハ證人
訊問、鑑定、搜索、物件差押、令狀發付等凡ソ犯罪ノ性質、方法、日時、場所及ヒ
被告人ノ人違ナキコト又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ付テ教示ヲ與フ可キ
證據及ヒ徵憑ヲ集取スル處分ヲ包括スルモノト去レハ檢事ハ翅ニ
現場ニ居合セタル證人又ハ參考人ヲ訊問スルノミニアラス場合ニ依
リテハ或ル特別ノ學術家、技藝家、若クハ職業者、一名若クハ數名ヲ召喚

シテ檢證ノ補助ヲ求ムルコトアルベシ例ヘハ人命犯ニ付テハ醫師、舍密
家ヲシテ其死屍ヲ檢案セシメ殺害ノ方法、致命ノ原因ヲ探求スル要ア
ル可ク、盜罪ニ付テハ工師、泥匠、偽造變造罪ニ付テハ書家、彫刻師若クハ
鑛物師ノ補助ヲ要スルコトアルヘシ蓋此等ノ證憑即チ供述及ヒ鑑定ハ
其事件ニ付キ現時収録シタルモノナルカ故ニ管ニ豫審ニ於ケルノミ
ナラス公判ニ於テモ亦最モ貴重ニシテ且勢力アル教示ヲ裁判所ニ與
フルモノタリ然ルニ若シ急速ニ之レカ處分ヲ爲スニ非サレハ被告人
ハ勿論證人、參考人等漸ク飾言實ヲ包ムノ弊、實際免レサルノミナラス
現場ノ證憑ハ時日ト共ニ滅失シ他日舉證ノ困難ヲ招クコト亦無シトセ
ス是レ獨リ檢事ノミニ止マラス更ニ司法警察官ニ許スニ假リノ豫審
處分ヲ爲ス權ヲ以テシタル所以ナリ
爰ニ注意ス可キハ抑、檢事カ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲シ得ルハ若シ
其處分ヲ即時ニ爲サ、ル時ハ諸多ノ貴重ナル證憑ヲ舉テ之ヲ滅失セ

シメ又ハ犯人ノ逃亡ヲ來ス患アルヲ以テナリ去レハ第四百十四條ニ「檢事ハ云々犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ属スル處分ヲ爲ス」ヲ得云々トアリテ都テ緩急ノ區別ヲ爲サ、ルカ如シト雖モ檢事ノ豫審權タル素ト例外ニ属スルヲ以テ法律ニ於テ此例外ヲ設ケタル精神ニ基キ止タ其急速ニ集取セサレハ滅失ス可キ恐レアル證憑若クハ逃亡ス可キ恐レアル犯人ニ付テノミ集取又ハ逮捕ノ處分ヲ爲ス」ヲ得可キナリ要スルニ檢事ノ豫審處分ヲ爲スヤ公益ノ爲メ必須己ム」ヲ得サルニ出ル例外ナレハ可成丈ケ速ニ其正則ニ復歸セシムル」ニカメサル可ラス是レ檢事カ犯所ニ臨檢スルハ其事件急速ヲ要スル場合ニ限り且必ス其旨ヲ豫審判事ニ通知スル」ヲ要スル所以ニノ畢竟スルニ豫審判事ヲ自カラ犯所ニ臨檢セシメントスル旨趣ニ非サルハ莫シ去レハ檢事ハ判事只豫審ノ只犯所ニ到着スル迄ノ間之レニ代理スルモノト謂フ可シ凡ソ此等ノ旨趣ニ付テハ法文ニ「檢事ハ云々豫審判事ヲ待ツ

トナク云々トアルニ依テ之ヲ觀ルモ亦以テ明晰ナリトス茲ニ所謂證人トハ現ニ犯所ニ在テ其犯罪ノ實況又ハ前後ノ狀況ヲ供述スル」ヲ得可キ總テノ者ヲ云ヒ鑑定人トハ前段ニ解説シタル諸多専門ノ學術、技藝者及ヒ職業者ヲ汎稱シタルモノトス蓋現ニ犯所ニ在リタル者ハ成ル可ク直チニ訊問スルヲ良シトスル所以ハ當時ニ於ケル見聞ヲ變更セシムル間隙ナク事實發見上頗ル利益アリ加之ノミナラス豫審判事カ他日此等ノ者ヲ召喚シテ訊問セントスルモ或ハ事業ノ時間ヲ奪ハル、カ爲メ或ハ證人タル」ヲ嫌忌スルカ爲メ犯罪ノ現場ニ在ラサリシトガ又ハ犯所ニ在リタルモ其實況ヲ確知セストカ成ル可ク證人ノ地位ヲ避去セントスルハ實際ノ經驗ニ照シテ殆ント然ラサルハ莫シ此弊害ヲ豫防スルハ實ニ必要ナリト謂フ可シ於是乎カノ第一百十一條ノ檢證處分中何人ト雖モ猥リニ其場所ニ出入スル」ヲ禁スル効用アルヲ見ル可シ何トナレハ其場所ノ出入ヲ隨意ニスル時

ハ其現場ニ在リシ者モ證人ト爲ル煩ヲ避ケンカ爲メ直チニ立チ去リ爲メニ事實發見上一箇ノ便益ヲ失フノ憂アレハナリ
檢事カ證人ヲ訊問シ及ヒ鑑定ヲ命スルニハ別ニ宣誓セシメサルヲ法トス故ニ其供述ハ之ヲ事實參考ト爲スニ過キス蓋證人ヲ訊問シ及ヒ鑑定ヲ命スルコトハ素ト豫審判事本然ノ職務ニシテ檢事カ之ヲ爲スハ要例外ノ規定タルヲ以テナリ而シテ通常鑑定人ハ其鑑定シタル事柄ニ付キ鑑定書ヲ作ル(第四百十條)ト雖此場合ニ於テハ唯鑑定ニ付キ供述ヲ爲シ檢事ニ於テ其供述ヲ錄取ス可キモノトス
證人及ヒ鑑定人檢事ノ訊問ヲ受ケテ供述ヲ肯セサル時ハ如何檢事ハ自カラ罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス只豫審判事ニ請求シテ之ヲ言渡サシムルコトヲ得ルノミ其自カラ罰金ノ言渡ヲ爲スコト能ハサル所以ハ敢テ余ノ解説ヲ待タサル可シ何トナレハ抑罰金ハ判決ヲ以テ之ヲ言渡ササルヘカラス然ルニ檢事ニ於テ刑罪ノ言渡即チ判決ヲ爲スコト能ハ

サルハ固ヨリ明瞭ナレハナリ

第四百十七條初項ニ曰ク「第四百十四條第四百十六條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得ス」ト此司法警察官カ假ニ爲ス所ノ豫審處分ハ職務上自カラ起テ之ヲ爲スト將タ上官タル檢事ノ命令ニ因テ之ヲ爲ストハ敢テ區別スル所ニ非サルナリ蓋司法警察官ハ豫審判事又ハ檢事ノ現場ニ在ラサルニ因リ假ニ其處分ヲ爲スモノニシテ其自カラ起テ之ヲ爲スハ固ヨリ居多ナル可シト雖此檢事他ニ差支アリテ之ヲ爲スコト能ハサルニ因リ司法警察官ニ命令シテ代理セシムルコト亦必スシモ無キニアラス其何レノ場合タルヲ問ハス司法警察官ノ爲ス處分ニ付キ其權限ニ毫モ差異アルコトナシ勾留狀ヲ發スルコト能ハサル外勾引狀ヲ發スルコトハ勿論其他總テ檢事ト同一ノ處分ヲ爲スコトヲ得可キナリ而シテ其勾留狀ヲ發スルコトヲ許サル所以ハ元來人ノ身體自由ヲ無限ニ束縛

スル事ノ輕忽ニ爲ス可ラサルニ由ル
 司法警察官ハ自カラ其逮捕シタル者ト他人ヨリ受取リタル者トヲ問
 ハス假ニ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル上證憑書ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ
 地方裁判所又ハ區裁判所ノ管轄檢事ニ送致セサル可ラス是レ同條第
 二項ニ規定スル所ナリ

司法警察官ハ假ニ豫審處分ヲ爲スルハ如何ナル意義ヲ有スルモノナルカ抑
 リテ如何ナル意義ヲ有スルモノナルカ抑

本條ニハ「第百四十四條第百四十六條ニ於テ云々假ニ之ヲ行フコトヲ
 得云々」ト云ヘリ。此假ニノ語ハ如何ナル意義ヲ有スルモノナルカ抑
 司法警察官カ豫審處分ヲ爲スハ甚シキ變例ニ係ルヲ以テ眞ニ所謂假
 ノ處分ニシテ爾後檢事ニ於テ之ヲ仕直スニ非サレハ眞ノ處分ト爲ラ
 サル意乎然レトモ檢事カ司法警察官ヨリ被告人ヲ受取リタル場合ノ
 手續ヲ定メタル第百四十八條ニ於テハ「地方裁判檢事ハ云々二十四時
 内ニ之ヲ訊問シ云々」トアルノミニシテ唯被告人ノ訊問ハ更ニ之ヲ爲
 スヲ以テ即チ仕直スモノト假定スルモ其他勾留狀發付ノ一事ヲ除ク

外檢證處分證人鑑定人ノ供述ヲ聽ク事等一切ノ要急處分ニシテ司法
 警察官ノ爲シタル事項ニ付キテハ曾テ檢事ノ之ヲ仕直スヲ規定シ
 タルヲ見ス依此觀之ハ前述眞ニ所謂假ノ處分云々ノ說ノ正鵠ヲ得タ
 リトスルニ足ラサルヤ晰ケシ然レハ則此假ニノ語ハ果ノ如何ナル意
 義ニ解釋シテ可ナル乎蓋司法警察官カ豫審判事又ハ檢事ヨリ先キニ
 重罪、輕罪ノ現行犯アルヲ認知シタル場合ニ於テ徒ラニ手ヲ空クシ
 テ此等官吏ノ至ルヲ待ツ可キニ非サレハ乃チ自カラ進テ檢事ニ代理
 シ單ニ豫審ノ假處分ヲ爲スモノニシテ其處分ノ結果ニ付テハ一ニ檢
 事ノ意見ニ任スル意ナルヘシ更ニ之ヲ詳言スレハ司法警察官カ爲シ
 タル豫審處分ハ先ツ假ニ効力ヲ有スルニ過キササルモノニシテ若シ檢
 事カ其處分ヲ認メテ至當ナリト爲シ引續キテ公訴ノ提起及ヒ實行ヲ
 爲スニ因リ爰ニ始メテ前キノ司法警察官カ爲シタル假處分ハ更ニ變
 シテ確的ハ効力ヲ生スル意義ヲ示スニ在リト義解スルヲ以テ法意ヲ

得ルニ庶幾キモノト思惟ス而シテ地方裁判所検事ハ其自カラ豫審處分ヲ爲シタル時ト區裁判所検事又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタル時トヲ問ハス之ヲ豫審判事ニ送致シ又ハ直チニ公判ニ付スルト將タ棄却即チ起訴セサルト一ニ自己ノ意見ニ任スルヲ得可シ是レ第百四十九條ニ規定スル所ナリ之ヲ要スルニ司法警察官カ假ニ爲シタル豫審處分ハ後ニ檢事ノ之ヲ是認シタルト否トニ因リ或ハ豫審處分ト爲リ或ハ豫審處分ト爲ラサル可ク然ラサル間ハ單一ノ假處分ニ過キスト謂フ可キノミ

司法警察官カ假ニ爲ス豫審處分ニ付テ余ノ見解前段述フル所ノ如シ而シテ司法警察官ハ元ト檢事ノ補助官タルニ過キサレハ其上官タル檢事ヨリ更ニ巨大ノ職權アル可テサルヤ論ヲ竣タス檢事カ犯所ニ臨檢スルニハ先ツ豫審判事ニ通知スルヲ要スルカ故ニ司法警察官カ假豫審ノ處分ヲ爲スニ當リテモ亦其旨ヲ豫審判事ニ通知セサル可ラサ

ルモノナラン蓋可成的正則ニ復スルヲニカメサル可ラサレハナリコ
レ第百四十七條ニ「檢事ニ許シタル職務ハ云々」ノ語ニ據テ須ラシ推察
シ得ラル可キモノナリ然リ而シテ若シ司法警察官ハ檢事ニ代リテ假ニ
處分ヲ爲スモノナリトスル時ハ又同時ニ檢事ニ其旨ヲ通知セサル可
ラサル理アルニ似タリ然レモ法律ニ於テハ曾テ其規定アルヲ見サル
ナリ

余ハ司法警察官ニ於テ假ニ豫審處分ヲ行フヲ得ルトノ規定ニ付テハ
立法上聊カ疑義ナキニアラスト雖モ事ノ枝葉ニ涉ルヲ恐レ茲ニ贅ス
ルヲ敢テセサルナリ

地方裁判所檢事區裁判所檢事又ハ司法警察官ヨリ被告人ヲ受取リタ
ル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ起訴ス可キモノナリト思料シタル時
ハ勾留狀ヲ發シタルト否トヲ問ハス重罪及ヒ地方裁判所ノ管轄ニ屬
スル輕罪事件ニシテ重難ナルモノニ限リ一切ノ書類ニ豫審請求書ヲ

添へ豫審判事ニ送致シ其輕易ナル事件ニ付テハ直チニ地方裁判所ニ
 公判ヲ求ム可シ又若シ起訴ス可ラサルモノト認メタル時ハ直チニ被
 告人ヲ放免ス可キナリ(第四百四十八條第四百十九條)
 爰ニ一言ニ可キハ抑、檢事及ビ司法警察官カ豫審處分ヲ爲スハ特ニ
 現行犯ノ場合ニ限リタルモノニシテ而シテ既ニ現行犯ト云フ以上ハ其
 起訴ス可ラサルモノト思料ス可キ場合實際アルコトナカル可シト速了
 スル者ナキニアラス然レニ第五十六條ノ現行犯罪ノ場合ニ付テハ其
 レ或ハ然ル可シト雖モ第五十七條ニ記載スル准現行犯罪ノ場合ニ於
 テハ其既ニ諸多ノ處分ヲ爲シタル後始メテ被告人ノ人違ナルコトヲ發
 見スル等往々ニシテ之レアルヘキナリ
 豫審判事ニ於テ檢事又ハ司法警察官カ爲シタル處分ヲ以テ或ハ十分
 ナラスト做シ或ハ不相當ノ廉アリト思料シタル時ハ更ニ自カラ其取
 調ヲ爲スコトヲ得可シ然レモ檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ他

現行犯ト
 非現行犯ト
 下ノ間ニ
 於ケル第
 四ノ差

日ノ參考トシテ必ス之ヲ訴訟書類ニ添置ク可キモノトス

第四 通常ノ場合ニ於テハ豫審判事ハ檢事請求アルニ非サレハ豫
 審ニ着手スルコトヲ得ス隨テ自カラ公訴ヲ起ス手續ヲ爲スコトヲ得
 ス然ルニ現行ノ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ属スル輕罪ニシテ
 其事件急速ヲ要スルモノナル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス其旨ヲ通
 知シテ犯所ニ臨檢シ總テノ豫審處分ヲ爲スコトヲ得而シテ此場合ニ
 於テ豫審判事檢證調書ヲ作リタル時ハ之ヲ以テ公訴ヲ受理シタ
 ルモノ即チ公訴ノ提起アリタルモノト爲ス

是レ第四百四十二條第四百四十三條ニ規定スル所ナリ而シテ豫審判事自カ
 ラ檢證處分及ビ被告人證人鑑定人ノ訊問其他總テノ處分ヲ爲シタル
 時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致セサル可ラス然レモ既ニ公訴ノ提起ア
 リ又豫審ノ處分ニ着手シタルモノナルカ故ニ設ヒ檢事ニ於テ豫審手
 續ヲ繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ豫審

終結ヲ爲サ、ル可ラス然リ而シテ此豫審判事カ檢事ノ請求ナキニ拘ラ
ス豫審處分ヲ爲スコトヲ得ル變例ヲ設ケタルモ亦急速ニ事ヲ處セサレ
ハ忽チ證憑ノ滅失ヲ來シ被告人ノ逃亡スル憂アルヲ以テ公益上實ニ
已ムコトヲ得サルニ出ルモノナリ

第九節 豫審終結

豫審終結
豫審判事
ノ決定
ハ如何
ナル手
續ヲ以
テ爲ス
乎

豫審判事ハ上來詳説セル諸多ノ處分ニテ集取シ得タル證憑ニ依リ其
被告事件己ノ管轄ニ屬スルヤ否ヤ公判ニ付ス可キモノナルヤ否ヤノ
決定即チ豫審終結ノ言渡ヲ爲サ、ル可ラス而シテ豫審ノ終結アルト同
時ニ豫審判事ハ其事件ノ管掌ヲ脫離スルモノニシテ而カモ亦被告事
件公判ニ付セラル、カ否ヤノ判ル、所ナレハ事ノ最モ重要ニ屬スル
モノナルコト論チ埃タス故ニ被告事件己ノ管轄ニ非スト思料シ又ハ他
ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルニ因リ豫審ヲ終結セントスル時
ハ先ツ其訴訟記録ヲ送致シテ檢事ノ意見ヲ求ムヘキナリ檢事ハ豫審

未タ十分ナラスト思料スル時ハ其條件ヲ明示シ更ニ取調ヲ請求スル
コトヲ得可ク又豫審ノ結果ニ依テ犯罪ノ證憑十分ナリト思料スル時ハ
其意見ヲ付シテ三日内ニ訴訟記録ヲ還付ス可キモノトス
夫レ如此豫審判事ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル上ニテ豫審終結ノ處分ヲ
爲ス可キモノナリト雖モ而カモ檢事ノ意見ニ拘束セラル可キモノニ
非サレハ設令ヒ檢事ノ意見ハ證憑十分ナラスト云フモ證憑十分ナリ
ト思料スル時ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スコトヲ得可ク之レニ反スル場
合ニ於テモ亦同一ノ理ナリ加之ナラス檢事ヨリ豫審未タ十分ナラス
トテ或ル條件ニ付キ更ニ取調ノ請求アリタル場合ニ於テモ其取調必
要ナラスト信スル時ハ之ニ應セサルモ亦可ナリ然レモ此場合ニ於テ
ハ檢事ハ或ル條件ニ付キ更ニ取調フルコトヲ必要トシテ請求シタルモ
ノニシテ未タ本案ノ處分ニ付テノ意見ヲ付シタルモノニアラサレハ
若シ此儘豫審ヲ終結スルモノトスルトキハ本案事件ニ付テハ殆ント

檢事ノ意見ナリシテ終結スルニ等シキ結果ニ至ル可キヲ以テ此場合
 ニ於テハ必ス豫審判事ハ其請求ニ應モサル旨ヲ通告スルヲ要ス然
 ルルハ檢事ハ疑ニ請求シタル條件ヲ取調ヘサレハ到底豫審ヲ終結ス
 可キモノニアラストカ又ハ公判ニ付ス可キモノナリトカ免訴ス可キ
 モノナリトカノ意見ヲ付シテ二十四時内ニ記録ヲ還付ス可キナリ(第
 百六十一條第百六十二條)

檢事カ豫審終結ノ意見ヲ付スルニ付キ三日ノ猶豫アル所以タル抑豫
 審ハ急速ヲ要スルモノナリト雖モ既ニ終結ヲ爲サントスルニ迫ンテ
 ハ其要急ナル處分ハ勿論大凡取調ヲ可キモノハ必ス概シテ取調ベタ
 ル可ゲレハ最早即時ニ書類ヲ還付スル必要ナル可ク加之ナラス縱
 令ヒ即時ニ之ヲ還付ス可キモノトスルモ檢事亦各々他ニ諸多ノ事務
 アル可ク然ラサルモ記録浩瀚容易ニ通讀ダモ爲スヲ得サルカ如キ
 事件ナキニアラサレハ實際即時ニ還付スルヲ得ザル場合アル可シ

豫審ノ終
 結ヲ告ク
 ルニハ判
 決ヲ以テ
 決ス以テ
 其故如何

且此重要ナル豫審終結ノ意見ヲ付スルニ方リ若シ輕忽ナル意見ヲ付
 スル如キアラハ其意見ハ到底豫審判事ヲ誤ルニ非サレハ則チ豫審判
 事ノ無價視スル所ト爲ラシテ檢事ノ意見ヲ付スル寔ニ忽諸ニス可ラサ
 ルナリ
 又第百六十二條ノ法文ニ依レハ檢事カ其更ニ取調ヲ請求スルニ方リ
 テハ別ニ訴訟記録ヲ豫審判事ニ還付セサルモノノ如シト雖モ豫審判
 事カ其請求ノ當否ヲ考覈センカ爲メニハ之ヲ還付スルヲ最モ良シト
 思料ス蓋今日實行上ニ於テモ亦然ルモノ、如シ
 豫審判事カ豫審終結ノ處分ヲ爲スニハ決定ヲ以テシ判決ヲ以テセス
 是レ犯罪ノ有無ヲ判決スルニ非ス判決ヲ爲ス可キ裁判所ニ被告事件
 ヲ移シ或ハ其管轄ニ非サルヲ若クハ訴訟手續ヲ繼續ス可ラサルヲ
 告クル決定タルニ過キササルニ由ル夫レ既ニ判決ニ非ス故ニ判決ニ關
 スル諸多ノ規定ヲ適用ス可キモノニ非サレハ只決定書ヲ作り其正本

ヲ檢事及ヒ被告人ニ送達スルノミ(第七十一條)固ヨリ公廷ニ於テ檢事及ヒ被告人出廷ノ上言渡ヲ爲ス可キモノニアラス是レ豫審ト公判ト大ニ異ナル所アルニ由ルナリ蓋、公判ニ於テモ犯罪ノ有無ヲ判決スルニ非スシテ單ニ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キ場合ナキニアラス(第二百二十四條)ト雖、然レモ其孰レノ場合タルヲ問ハス公判ノ言渡ハ到底自ツカラ判決ノ性質ヲ有スルモノタル可キナリ

豫審終結ノ決定言渡ニ四種アリ

第一 管轄違ノ言渡 ○是レ第六十四條ニ記載スル所ニシテ即チ土地ノ區劃ニ關スル管轄犯罪ノ性質ニ關スル管轄例ハ、軍事犯被告人ノ身分ニ關スル管轄例ヘハ皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付テノ規定ニ違ヒ被告事件ヲ受理シタル場合ニ於テ爲ス可キモノトス

管轄違ノ言渡

管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示スルヲ

要ス例ヘハ土地ニ關スル管轄違ノ場合ニ於テハ、本案被告事件ハ當裁判所ノ管内ニ非サル某地ニ於テ生シタルモノナルニ因リ當裁判所ノ管轄ニ屬セス云々ト言渡スカ如キ是ナリ

爰ニ一ノ注意ス可キハ犯罪ノ種類ニ關スル管轄違ノ場合ナキト是ナリ何トナレハ重罪ハ必ス豫審ヲ要スルモノナレハ更ニ論ナシ輕罪ハ其輕重難易ニ因リ或ハ豫審ヲ求メ或ハ豫審ヲ求メサルモノナリト雖、モ其所謂輕重難易ハ元來劃然タル區別アルニアラス其之ヲ重難トシ、將タ輕易トスルハ一ニ豫審ヲ請求スル者即チ檢事其人ノ思定如何ニ在テ存スルカ故ニ設ヒ豫審判事ニ於テ事輕易ナリト信スルモ法律上管轄違ノ言渡ヲ爲スヲ許サス又事件區裁判所ノ管轄ニ屬ス可キ輕罪又ハ違警罪ナリシトセンカ此等事件ハ元來豫審ノ請求ヲ爲ス可キモノニ非ス故ニ語ヲ換テ言ヘハ豫審判事ノ管轄ニ非サルヲ明瞭ナリト雖、然カモ最初ヨリ區裁判所ノ管轄ニ屬ス可キモノナルヲ明白ナ

ルトキハ檢事ハ豫審ヲ請求セサル可キヲ言フ竣タサレハ多クハ豫審中又ハ豫審ノ末始メテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス可キモノナルヲ發見スル場合ナル可シ而シテ此場合ニ於テハ豫審判事ハ管轄違ノ言渡ヲ爲サスシテ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可キヲ規定シテ第六十七條初項ニ在ルカ故ニ犯罪ノ種類ニ關スル管轄違ノ決定ヲ爲ス可キ場合ハ到底遭遇スルコトナカル可キナリ

總テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該リ且勾留ヲ要スルモノト思料スル時ハ則チ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發スルコトヲ得ルモノトス(第六十四條)是レ法律ニ於テ被告入逃亡若クハ證據湮滅ノ恐レアル場合ニ於テ公益ノ爲メ特ニ管轄ニ非サル豫審判事ニ付與シタル職權ナリ然レモ此前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發スルコトヲ得可キハ少ナクモ管轄違ノ言渡ヲ爲スト同時ナラサル可ラス何トナレハ豫審判事ハ豫審終結ノ處分ヲ

爲スト同時ニ全ク被告事件ヨリ脫離スルモノニシテ其以後ニ在テハ固ヨリ何等ノ職權ヲモ有スルモノニアラサレハナリ

豫審判事ノ爲シタル管轄違ノ言渡確定シタル時ハ豫審判事ハ其事件ヲ檢事ニ交付シ檢事ハ第六十四條初項ニ循ヒ之ヲ其管轄ト思料スル裁判所ノ檢事ニ送致ス可キナリ

第二 免訴ノ言渡○是レ第六十五條ニ記載スル所ニシテ即チ犯罪ノ證據十分ナラサルトキ(一)被告事件罪ト爲ラサルトキ(二)公訴ノ時効ニ罹リタルトキ(三)確定判決ヲ經タルトキ(四)大赦アリタルトキ(五)法律ニ於テ其罪ヲ免全スルトキ(六)及ヒ告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付キ告訴ナクシテ公訴ヲ受理シ又ハ告訴ヲ爲シタル後被害者カ告訴ノ拋棄ヲ爲シタルトキ(七)犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ヲ廢止シタルトキ(八)ニ於テ爲ス可キモノトス但本條ニハ右最終ノ二者ヲ明言セスト雖モ此二個ノ場合ト雖モ他ノ場合ト齊シク元來起ス可ラサル公

第二免訴ノ言渡如何ナル場合ニ免訴ノ言渡キ乎

訴ヲ起シ若クハ中ゴロ公訴消滅ノ原由ヲ生シタルヲ以テ被告人ヲシテ其訴訟ヨリ免脱スル言渡ヲ爲ス可キト最モ至當ナリト謂フ可シ
 公判ニテハ前段ニ述ヘタル(一)(二)即チ犯罪ノ證據十分ナラサルトキ被告事件罪ト爲ラサルトキ及ヒ刑法ニ所謂不論罪ノ場合(即チ辨知力若クハ自由力ヲ缺キタルトキ)ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲シ(三)以上ノ場合ニ於テノミ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キモノトセリ然リ而シテ其公判ニ於テ無罪ノ言渡ヲ爲ス可キ場合ニ於テモ豫審ニ於テハ仍ホ免訴ノ言渡ヲ爲ス所以ノモノハ他ナシ豫審ニ於テハ彼レ公判ニ於ケルカ如ク犯罪ノ有無ヲ判決スルモノニ非サルニ由ル

被告人ノ
 死去シタル
 時ハ免訴ノ
 言渡ヲ爲ス
 可キトスヘ
 キカ

被告人死去シタル時ハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キヤ否ヤ惟フニ其死去シタルヲ知ラスシテ公訴ヲ起シタルト將タ起訴後ノ死去タルトヲ論セス別ニ免訴ノ言渡ヲ爲スニ及ハサルヘシ何者被告人ヲシテ其訴訟ヨリ免脱セシムル言渡ヲ爲スマテモナク事實上其公訴ハ終結ニ至リ

タルモノト云フ可ク到底對手人ナクシテ訴訟ヲ爲シ得可ラサルト勿論ナレハナリ

特赦ノ場
 合ニハ如
 何

特赦ノ場合ニ於テハ如何蓋特赦アリタル故ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キ場合アルトナカルヘシ何トナレハ元來特赦ハ第三百三十一條ニ云ヘルカ如ク刑ノ言渡確定ノ以後ニ之ヲ爲スナルカ故ニ此場合ニ於テハ必ス前述確定判決ヲ經タル時ト云ヘル原由ニ因リテ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キナリ
 被告人本犯ニ非サル時即チ人違ナル場合ハ如何此場合ニ於テハ前述犯罪ノ證據十分ナラサルトキト云ヘル原由ニ因リテ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス蓋犯罪ノ證據十分ナラサル時トハ即チ犯罪ノ成立ヲ證明スル證據十分ナラサル時ト犯罪ハ成立シタルモ本犯ノ誰タルト証明スル證據十分ナラサル時ト二者ヲ包含シタルモノナレハナリ例ヘハ變死人アル場合ニ於テ其犯罪ニ原因スルモノナリヤ否ヤ明

瞭ナラサル時ハ之ヲ前者ノ場合ト爲シ其犯罪ニ原因スルコトハ明瞭ナルモ果シテ何人ノ兇行ニ係ルカ明瞭ナラサル時ハ之ヲ後者ノ例ト爲ス可キナリ而シテ其孰レノ場合ニ於テモ法律ハ之ヲ犯罪ノ證憑十分ナラサルトキト云ヘルナリ

一罪前ニ發シ既ニ確定判決ヲ經タル後其判決以前ニ犯シタル罪發覺シ而シテ前發ノ犯罪ニ等シク若クハ輕キカ故ニ到底不論罪ノ言渡ヲ受ク可キ場合刑法第百二條參看ニ於テハ如何是レ會テ公訴ノ消滅ヲ論スルニ方リ解説シタルカ如ク元來起ス可ラサル場合ニ公訴ヲ起シタルニ非サルヲ以テ固ヨリ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キモノニアラス即チ其重罪タルト將タ輕罪タルトノ區別ニ從ヒ之ヲ重罪ノ公判又ハ輕罪ノ公判ニ付スル決定ヲ爲ス可キナリ

免訴ノ言渡ヲ爲スニ於テモ亦事實及ヒ法律ニ依リ之レカ理由ヲ付スモノトス例ヘハ被告人罪ヲ犯ス時精神錯亂シタル事實又ハ正當防衛

ノ所爲ニ出タル事實又ハ法律ニ罰ス可キ正條ナキ事實ニ因リ被告事件罪ト爲ラサルコト若クハ公訴ノ時効ニ罹リ又ハ大赦アリタル事實ニ因リ公訴受理ス可ラサルモノナルコト等ノ原由ヲ示スハ併セテ法律ノ理由ヲ付スルモノニシテ別ニ法律ノ正條ヲ記載スルニ及ハサルナリ何者前述ノ原由ハ元ト法律ニ於テ所爲ヲ犯罪ト看做サシメス又ハ公訴權ヲ消滅セシムル原由タルヲ以テ別ニ法律ノ正條ヲ記載スル要ナケレハナリ是レ次項ニ從ヒ區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スハ其罪ヲ罰スヘキ法律ノ正條ヲ明示ス可シトアリテ爰ニハ法律ノ正條ヲ明示スヘシトノ語ナキヲ以テモ知ルヘキナリ

又犯罪ノ證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ單ニ事實上ノ理由ヲ付スルニ止マリ法律上ノ理由ヲ付スルニ由ナシ故ニ法文ニ於テモ其旨ヲ明示シ可シト云フニ止マレリ更ニ語ヲ換ヘテ云ヘハ犯罪ノ證憑十分ナルト否トハ事實上ノ認定ニシテ法律上

ノ理由ニアラス法律ハ豫審判事ニ於テ犯罪ノ證據十分ナラストスル
キハ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキヲ命スルト雖モ其之ヲ命シタルヲ以
テ直チニ法律上ノ理由ヲ付ス可キモノナリト云フヲ得ス然レハ豫
審判事カ證據十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ爲スハ唯事實ノ認定
即チ事實上ノ理由ニ因リ之ヲ爲スモノナリト知ル可シ而シテ事實ノ認
定ニ付テハ別ニ法定ノ確然タル標準アラサルヲ以テ豫審判事ハ最モ
注意ヲ爲サ、ル可ラサルナリ

前段解説スル所ノ如クナルヲ以テ第六百六十九條第一項ニハ「豫審終結
ノ決定ニハ事實及ビ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シトアレハ其決定ニ
ハ事實上ノ理由ノミヲ付シテ足ルモノアルナリ然レハ法律上ノ理由
ヲ付シテ爲シタル決定ト事實上ノ理由ノミヲ付シテ爲シタル決定ト
ノ間ニハ著大ナル差アリ即チ法律上ノ理由ヲ付シタル決定ナルハ
之ニ對シ上訴ナキカ又ハ上訴アルモ其効ヲ生セサルニ於テハ確定ノ

効ヲ生シ復タ動スヲ得ス之ニ反シテ事實上ノ理由ノミヲ付シテ爲
シタル決定ナルハ常ニ假ノ効力ヲ生スルニ過キス即チ新ナル證據
ノ出ルハ更ニ其事件ニ付キ起訴スルヲ得ルナリ

免訴ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタルモノナル時ハ同
時ニ放免ノ言渡ヲ爲サ、ル可ラス然レハ其免訴放免ノ言渡確定スル
マテ即チ抗告期間内抗告アリタル時ハ其判決アルマテハ實際被告人
ハ放免セラル、トナシ(第七十四條)但免訴ノ言渡アリタル場合ニ於
テ檢事ノ意見同一ナル時ハ實際抗告期間ノ盡クルヲ待タス直チニ之
ヲ放免スルモ敢テ事ニ害ナク却テ被告人ノ實ニ大ナル利益アル可シ
ト思惟セラル、トナリ

豫審判事若シ誤テ免訴ノ言渡ト同時ニ放免ノ言渡ヲ爲サ、ル時ハ如
何余惟フニ此場合ニ於テハ被告ハ言渡ノ執行ヲ司ル者即チ檢事ニ對
シ放免セラレシヲ求ムルヲ得可ク檢事モ亦抗告期間經過ノ上直チ

ニ放免ノ指揮ヲ爲スコトヲ得可シト、何者訴訟ヨリ免脱セラレタル者即チ勾留ノ原由消滅シタルニ拘ラス特リ勾留ヲ存シ置ク可キ謂レナキコト固ヨリ言フ俟タサレハナリ但若シ被告人他ノ被告事件ニ付キ勾留ヲ受ケタル時ハ此限ニアラサルナリ

豫審判事ハ免訴ノ言渡ヲ爲スト同時ニ被告事件ヨリ脱離スルモノナレハ其附帶シテ生シタル私訴ノミニ付キ公判ニ移ス言渡ヲ爲ス可ラサルヤ論ヲ竣タス又自カラ私訴ノ判決ヲ爲スコトヲ得サルヤ勿論ナレハ此場合ニ於テハ民事原告人ハ民事裁判所ニ非サレハ到底要償ヲ爲スコトヲ得サル可シ然レモ若シ新ナル證據出テ、公訴ノ更ニ起リタル時ハ復、附帶シテ刑事裁判所ニ要償ノ訴ヲ起シ得可キコト固ヨリ論ヲ俟タサルナリ

抑、放免トハ勾留セラレタル被告人ノ身體ヲ自由ニ復セシムル謂ニシテ即チ免訴及ヒ無罪ノ場合ト免刑ノ場合トニ論ナク均シク用ヒラル

、所トス然リ而シテ其自由ヲ復スル點ニ於テハ彼ノ曾テ解説シタル保釋責付ノ如ク法律上ニテハ假ノ性質ヲ有スルモノニ非ス被告人ハ全ク其訴訟ヨリ免脱セラル、モノトス故ニ又余カ將ニ次ニ述ヘントスル所ノ釋放トモ同シカラス蓋釋放ハ被告人ヲシテ訴訟ヨリ免脱セシムルニ非ス乃チ罪ノ問フ可キモノアリト雖モ然カモ其被告事件ノ爲メニハ法律上未決勾留ヲ許サル場合ナレハナリ

第三 區裁判ニ移ス言渡

第四 公判ニ付スル言渡

右第三第四ノ言渡ヲ爲ス場合ハ第六十六條乃至第六十八條ニ記載セリ即チ被告事件違警罪又ハ裁判所構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタル時ハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ其他ノ輕罪ト思料シタルハ其裁判所ノ輕罪公判ニ又重罪ト思料シタル時ハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可キナリ而シテ此違警罪ト

第三、公判ニ移ス言渡

思料シ又ハ重罪、輕罪ト思料スルコトタル會テ說示シタルカ如ク敢テ確信アルヲ要セス單ニ其事件ノ刑律ニ問フ可キ所タリ及ヒ被告人ノ人違ナキコトニ付キ假信ヲ措ク丈ケノ證憑アルヲ以テ則チ十分ナリトス蓋、公判ニ於テハ豫審終結ノ處分ニ對スル第二審ノ判決ヲ爲スニ非サルト同シク豫審ノ終結ハ敢テ本案ニ付キ第一審ノ判決ヲ與フルモノニ非ス要スルニ重難ナル事件ノ下調ベヲ爲スニ過キサレハナリ
違警罪事件ニ付キ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲サ、ル可ラス抑、違警罪事件ニ付キ未決勾留ヲ爲ス可ラサルコトハ余カ前ニ詳說シタル所ノ如クナルヲ以テナリ而シテ釋放ハ被告人チシテ訴訟ヨリ脫離セシムルニアラス單ニ其身體ノ自由ヲ回復セシムル謂ナルコト余亦已ニ之ヲ述ヘタリ
輕罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス場合ニ於テ被告事件罰金ノ刑ニ該シ被告人勾留ヲ受ケタルホハ之ヲ釋放セサル可ラサルコト猶ホ前段違警罪

事件ノ被告人ニ於ケルカ如ク而シテ其禁錮以上ノ刑ニ該ルニ於テハ豫審判事ノ認定如何ニ因リテ前ニ發シタル令狀ヲ存シ若クハ保釋ヲ許シ責付ヲ爲スコトヲ得可ク又新ニ令狀ヲ發スルコトヲモ得可キモノトス

重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲ス場合ニ於テ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發シ若シ又保釋責付中ニ係ル時ハ須ク之ヲ取消ス可キモノトス其然ル所以タル抑、重罪ノ被告人ハ常ニ兇悍ニ非サレハ則チ奸譎ノ徒タル可ク縱使ヒ然ラサルモ重罪公判ニ付スル言渡ヲ受ケタル時ハ一層逃亡ノ恐アルコト勿論ニシテ社會ノ公安ヲ害ス可キ危險モ亦隨テ大ナル可キニ由ル

重罪若クハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ事件ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲ス場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルコト能ハサル時ハ余カ前ニ令狀ノ事ヲ詳說スルニ當リ一言シタルカ如ク令狀ヲ發シテ訴訟記録ニ編綴

公判ニ移
ス言渡ニ
ハ如何ナ
ル記載ナ
スルカ要
トハ性犯
トハ何ソ

シ置クコトヲ必要トスル場合アル可シ殊ニ重罪事件ニ係ル時ハ更ニ其必要ノ切ナルモノアラシク然リ而シテ其令狀ハ則チ勾留狀ヲ以テ最モ至當ナリトス抑、現ニ捕ニ就カサル被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルガ如キハ一見稍、奇ナルカ如シト雖モ然カモ豫審判事ハ豫審ノ終結ト共ニ訴訟事件ヨリ脱離シ復、何等ノ職權アルコトナケレハ後ニ至テ令狀ヲ發スルコトヲ得ス檢事モ亦現行犯ノ場合ヲ除ク外勾留狀ヲ發スルコトヲ得サルカ故ニ同上ノ處分ハ最モ實際ニ切要ナルコトヲ知ルヘシ何トナレハ豫審終結ノ以後公判開廷ノ以前被告人出現スルコトアルモ之ヲ逮捕スルニ由ナク空ク復ヒ蹤跡ヲ踏ム餘地アラシムルコトナキヲ保セサレハナリ

又區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ十分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示スルコトヲ要ス(第百六十九條末項)而シテ茲ニ所謂犯罪ノ性質トハ國事犯常事犯等ノ性質ヲ言ヘルニ非ス即チ竊盜タリ詐欺取財タリ若シハ謀殺タリ過失

殺タル性質ヲ云ヘルナリ又摸樣トハ加減重輕等ノ情狀ヲ云フ但酌量減輕ノ摸樣ハ如キハ特ニ刑ノ言渡ヲ爲ス裁判所ノ所見如何ニ在テ存スルモノナレハ固ヨリ此中ニ包含セサル可シト思惟セラル然リ而シテ此等ノ記事ヲ要スル所以ノモノハ他ナシ豫審ノ取調最モ精密ニシテ敢テ輕忽ニ決定ヲ爲ササルヲ表白スルニ在リ就中其區裁判所ニ事件ヲ移ス場合ノ如キハ暗ニ檢事カ地方裁判所ニ屬スル事件ナリト誤認シタルコトヲ證スルモノナルカ故ニ之ヲ精密ニ爲スコトノ緊要ナル知ルヘキナリ

總テ豫審終結ノ決定書ニハ第七十六條ノ規定ニ從ヒ被告人ノ氏名職業住所等ヲ明示ス可キモノトス(第百七十條)是レ同名異人ニ因リ人違ヲ生スル等ノ恐アルニ由ル而シテ其決定書ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人ニ送達スルコトヲ要ス(第百七十一條)蓋豫審終結ノ決定ハ豫審判事ニ於テ親シク之ヲ言渡ス可キモノニアラサルカ故ニ檢事及ヒ被告人ハ

同上ノ送達ヲ受クルニ非サレハ其決定アリタルヲ知ルニ由ナク又設ヒ之レニ對シテ抗告ヲ爲サント欲スルモ得可ラサレハナリ
舊治罪法ノ所定ニ據レハ檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障(本法ノ抗告ニ類ス)ヲ爲スヲ得可ク被告人ハ重罪裁判所ニ移ス言渡ニ對シテハ常ニ故障ヲ爲スヲ得可ク又輕罪裁判所又ハ違警罪裁判所ニ移ス言渡ニ對シテモ豫審判事ノ管轄違越權又ハ其事件ヲ移ス裁判所ノ管轄違ナルトキハ故障ヲ爲スヲ許シ尙ホ民事原告人ニ於テモ私訴ニ付キ越權ノ處分アルトキハ亦故障ヲ爲スヲ得可キモノト爲シタリシモ本法ニハ第七十二條ニ於テ檢事ハ重罪公判ニ付スル決定又ハ免訴若クハ管轄違ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スヲ得ルモ被告人ハ特リ重罪公判ニ付スル決定ニ對シテ抗告ヲ爲スヲ得ルノミト爲シ而シテ民事原告人ニハ總テ抗告ヲ許サ、ルコト改メタリ是レ蓋余カ前ニ解説シタルカ如ク豫審終結ノ處分ハ假信ヲ以テモ尙ホ之ヲ爲ス

ヲ得可キモノニシテ敢テ罪ノ有無ヲ判決スルモノニ非サレハ成ル可ク速ニ事ノ結局ヲ見ントスル趣旨ニ外ナラサル可シ然リ而シテ其特ニ重罪公判ニ付スル決定又ハ免訴若クハ管轄違ノ決定ニ對シ檢事ニ抗告ヲ爲スヲ許シ重罪公判ニ付スル決定ニ對シテハ被告人ニ抗告ヲ爲スヲ許シタルハ他ナシ同上ノ處分ハ或ハ被告人ノ爲メ或ハ社會公益ノ爲メ至大至重ノ關係ヲ有スルモノナルカ故ニ法律ハ之ヲ豫審判事ノ專權ニ付スルヲ欲セス檢事及ヒ被告人ニ抗告ノ途ヲ與ヘ以テ萬一ノ誤謬ヲ理正セシメンコトヲ望メリ然リ而シテ民事原告人ニハ總テ抗告ヲ許サ、ルコト爲シタルハ甚タ至當ナルカ如シ蓋舊治罪法ニハ被害者ハ豫審判事ニ對シ告訴ト共ニ民事原告人ト爲ル可キ申立ヲ爲シ以テ公訴ノ提起ヲ爲シ得ル規定アリタリト雖モ本法ニハ民事被告人ノ公訴ヲ提起スル規定ヲ擯ケタルカ故ニ亦隨テ民事原告人ノ抗告ヲ杜絶スルハ前後ノ事理一貫シテ頗ル宜シキニ適スルノミナラス

抑豫審判事ハ余カ前ニ解説シタルカ如ク單ニ證據ヲ集取シ其公判ニ付ス可キカ否ヤヲ決定スルニ過キサレハ事專ラ公訴ニ關シ民事原告人ノ爲メ特ニ證據ノ集取ヲ爲スモノニアラス民事原告人ハ唯與テ其益ヲ受クルニ過キサルカ故ニ豫審判事ノ爲シタル處分ノ爲メ別ニ損害ヲ被ムル可キ謂レナケレハ其終結處分ニ對シ如何ナル場合ト雖モ不服ヲ唱ヘ抗告ヲ爲シ得可キ權利ナキモノト決スルハ寔ニ當然ナリト謂フ可キナリ

重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被告人ニ送達ス可キ決定書ニハ其決定ニ對シ抗告ヲ爲スヲ得可キヲ及ヒ其期間ヲ記載スルヲ要ス若シ其記載ナキ片ハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ決定書ヲ送達スルマテ抗告期間ノ經過ヲ停止ス可キモノトス是レ第七十三條ニ規定シタル所ナリ此規定アル所以タル凡ソ上訴ノ期間ハ常ニ法律ニ從事スル者ト雖モ實際往々失念遺忘スルコトアリテ而シテ其關係甚ク大ナルカ故ニ口頭ノ言

渡ニハ必ス口ツカラ告知ヲ爲シ書面ノ言渡ニハ必ス其附記ヲ要シ若シ同上ノ告知又ハ附記ナキ片ハ法律上當事者ニ於テ眞ニ知了セサルモノト看做シ以テ其須要ノ場合ニ於ケル上訴權ヲ失ハサラシメント努メタルナリ

豫審終結ノ決定ハ第二百九十五條ニ規定スル抗告ノ期間内(即チ三日)又抗告アリタル片ハ其抗告ニ對スル抗告裁判所ノ決定アルマデ執行ヲ停止ス可キモノトス(第七十四條)然レモ豫審ノ決定保釋又ハ責付ノ言渡ヲ取消スモノニ係ルトキ例ヘハ豫審判事カ被告人ヲ重罪ノ所爲アル者ト認メ重罪公判ニ付スル決定ト共ニ前ニ許シタル保釋又ハ責付ヲ取消シタルニ檢事又ハ被告人アリ其決定ニ對シ抗告ヲ爲シタリトセン本案重罪ノ公判ニ付スル決定ハ右抗告ノ爲メ其執行ヲ障礙セラレ抗告ノ期間内又抗告アリタル片ハ其抗告ニ對スル決定アルマテ重罪公判ニ付スルコトヲ得スト雖モ然カモ被告人ハ抗告ノ有無

ニ關セス直チニ勾留セラル可シ何者保釋責付ノ言渡ヲ取消ス決定ハ
 抗告アルニ拘ラス執行ス可キモノト爲シタレハナリ此規定アル所以
 ノモノハ惟フニ前例ノ如キ場合ニ於テ被告人ハ逃亡センカ爲メ謂レ
 ナキ抗告ヲ爲シ以テ其隙ヲ偷マント希圖スルカ如キ者ナキヲ保セサ
 レハナリ豫審ニ於テ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者再ヒ訴ヲ受クルコトアリ
 ヤ否ヤ將タ其例外アリヤ等ノコトハ余之ヲ公訴私訴消滅ノ原由タル確
 定判決ノ場合ニ詳解シタレハ茲ニ反復セス

余カ此マテ述ヘ來リタル所ハ重モニ檢事ノ起訴及ヒ現行犯罪ニ因リ
 豫審判事ニ於テ爲ス豫審處分ニシテ要スルニ通常ノ豫審處分即チ犯
 罪ノ證據ヲ集取シ被告事件ヲ公判ニ付スヘキモノナルヤ否ヤノ決定
 ヲ爲シ之カ終結ヲ爲スニ至ルマテノ處分ナリシナリ然レ此通常ノ豫
 審處分ノ如ク前述ノ起訴又ハ現行犯罪ニ因リ着手スルニアラサルモ
 然カモ亦豫審ノ處分ナリトシテ決シテ不可ナキモノ固ヨリ未タ茲ニ罄

本法中
 常豫審處
 分ノ外他
 處分アリ

キス今試ミニ之ヲ茲ニ列舉セン乎尙ホ數者ヲ掲クルコトヲ得ヘシ
 例ヘハ第二百九十八條ニ規定セルモノ即チ豫審終結ノ決定ニ對スル
 抗告アリテ必要ナリトスル時抗告裁判所ニ於テ受命判事ヲシテ更ニ
 豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲サシムル場
 合(一)第二百四十一條ニ規定スルモノ即チ地方裁判所カ輕罪トシテ受
 理シタル事件ヲ重罪ナリトシ豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲シタル場
 合(二)又ハ同條ニ規定スルモノ即チ豫審ノ末輕罪トシテ受理シタル事
 件ヲ重罪ナリトシ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲サシムル場合(三)
 第百九十五條ニ規定シタルモノ即チ公判ニ呼出サレタル證人鑑定人
 ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタ
 ルニ因リ裁判所ニ於テ豫審判事ニ送致シタル場合(四)ノ如キ是ナリ而
 シ此等ノ場合中ニハ裁判所ノ職權ヲ以テ豫審ヲ爲サシムルモノアリ
 或ハ檢事被告人等ノ請求ニ因リ豫審ヲ爲サシムルモノアリ又前掲第

二百四十一條及ヒ第百九十五條ノ場合ニ於テハ檢事ヨリ訴訟記録證
 據物件ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事モ亦通常ノ規定ニ從ヒ豫審終結
 ノ決定ヲ爲サ、ル可ラサルヲ勿論ナリト雖モ其檢事ヨリ記録物件ヲ
 送致スルノ事タル、畢竟裁判所ノ決定ヲ執行スルニ在リテ固ヨリ尋常
 檢事ヨリ爲ス豫審請求ト同視スルヲ得サルナリ
 又第二百八十條及ヒ第三百五條ニ依レハ上告及ヒ再審ノ訴アリタル
 場合ニ於テ上告裁判所ハ受命判事ヲシテ取調ヲ爲サシムルノ規定アリ
 ト雖モ箇ハ畢竟上告又ハ再審ノ訴ヲ爲シ得ル原由アルヤ否ヤ一切
 ノ記録ニ就テ之ヲ取調フル規定ニシテ固ヨリ事實ニ關スル報告ヲ爲
 サシムルカ爲メニアラス要スルニ前段ニ解説シタル豫審處分即チ證
 憑集取ノ爲メニスル規定ト大ニ徑庭スル所アルヤ固ヨリ論ナキナリ、
 右説示シタル尋常豫審ニ異ナル豫審ノ事タル余カ曾テ豫審ハ何ノ爲
 メニシテ設ケラレタル乎ノ問題ヲ決スルニ當リ解説シタル三箇ノ理

由中專テ其第一及ヒ第三ノ理由ニ基因スルモノタル敢テ疑ナキナリ、
 余ハ茲ニ序ナカラ一言セン抑豫審處分ハ之ヲ秘密ニスルヲ法ト爲ス
 一業已ニ告ケタル所ノ如シト雖モ其處分ノ秘密ニス可キモノ決シテ豫
 審ノ場合ニ限ルニアラス乃チ再審ノ訴、管轄ヲ定ムル訴、公安又ハ嫌疑
 ノ爲メ管轄ヲ移ス訴及ヒ抗告等ニ對スル裁判又ハ決定ハ總テ之ヲ公
 行セサルナリ

第五編 公判

公判ノ性
 豫審判事ノ行フ審査即チ豫審ハ上來既ニ之ヲ述ヘタリ而シテ余カ本編
 ニ解説セント欲スルモノハ裁判所カ公廷ニ於テ行フ裁判手續即チ公
 判ニ關スル規定是ナリ抑豫審處分ノ秘密ナル緣及ヒ其之ヲ秘密ニス
 ル所以タル業已ニ解了シタル所ノ如クニシテ公判手續ノ都テ公行セ
 ラル、モノト大差アル所ナリ夫レ公判ハ犯罪ノ成立、不成立及ヒ責任
 ノ有無ヲ判決スル所ニシテ苟クモ之ヲ公行セザラン乎、人其公平無私

ノ處分ヲ詳ニスルニ由ナケン事情ヲ詳ニセシテ其間ニ狐疑ヲ懷クハ蓋人ノ通情ナリ今然ラサルモ判事ニ於テ或ハ私情ニ絆サレ或ハ寛猛ヲ妄リニスル弊ナキヲ保ス可ラス果ノ如斯ナレハ則チ法ノ効ナク罰罰ノカナシ何ソ法律ト刑罰ト共ニ尊嚴ヲ有テリト謂フ可ケン宜ナリ泰西右文ノ土開化ノ邦未タ裁判密行ノ制度ナキト夫レ公判ハ犯罪ノ有無ヲ判決スル所ナリ被告人ノ身體ト名譽トニ關スル焉ヨリ大ナルハ莫シ故ニ良シヤ豫審ノ調書犯罪ノ證據ナリト雖未タ遽ニ輕斷ス可ラス蓋被告タル者豫審ノ審査ニ得サル有益ノ證據ヲ得タルモ知ル可ラス又如何ナル辨解ヲ想起シタルヤモ亦知ル可ラサレハ其十分ノ辯護ヲ聽キ事情ヲ盡シ至ラサル無キト恰モ器中ノ水ノ如ク唯充實ナラサラントテ是レ恐ル於是乎無罪ノ言渡處刑ノ判決社會ト被告人ト共ニ恨ミナカル可キノミナラス亦以テ無益ノ上訴ヲ減スル一得アリ是レ公判ニ於テハ必ス判事檢事裁判所書記ノ出廷

ヲ要シ口頭且對席ノ審査ヲ用ヒ以テ訟擊辯難ヲ便ニシ交々遺憾ナカラシメントテ努メタル所以ナリ而シテ第百八十九條ニ豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人ハ更ニ之ヲ呼出ストテ得ルモノトシ又之ヲ呼出サ、ル時若クハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述鑑定ヲ比較ス可キ片ハ其供述書又ハ鑑定書ヲ朗讀スルトテ得可シト定メタルモ亦此趣旨ニ基カサルハ莫キナリ公判ニ於テ原被兩造カ互ニ訟擊辯護ヲ爲スハ是レ實ニ各貴重ナル權利ヲ實地ニ行用スルモノナリ即チ檢事ハ紊亂セラレタル社會ノ秩序ヲ回復セシカ爲メニ訟擊ノ權ヲ行ヒ民事原告人ハ己レノ被リタル損害ノ賠償ヲ得ンカ爲メニ訟擊ノ權ヲ行ヒ被告人ハ此等訟擊ニ對シ反論駁撃以テ辯護ノ權ヲ行フニ在リ蓋訟擊ノ權アリテ茲ニ辯護ノ權生スルハ素ト自然ノ道理且順序ナリト謂フ可シ而シテ法律ハ被告事件ノ重大ナルニ從ヒ之ヲ保護スル道自ツカラ他ニ愈ルモノアリ但此辯護

審判公行
ニ三種アリ

權ノ一ニ付テハ余ハ尙ホ後ニ至テ解説スル所アル可シ
 公判ノ手續ハ之ヲ公行スルコト余既ニ之ヲ解ケリ而シテ公行ニ二種アリ
 第一ハ認廷ヲ公開シテ公衆ノ傍聽ヲ許スニ在リ第二ハ新聞紙其他ノ
 出版物ニ之ヲ掲載スルコトヲ許スニ在リ總テ判決ヲ公行スルハ實ニ法
 理ノ當ニ然ル可キ所ニシテ即チ之ヲ原則ト爲ス然リト雖モ公益又ハ
 秩序ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ法律ハ右原則ニ對スル例外處分ヲ
 爲スコトヲ許セリ即チ裁判所構成法第一百五條乃至第一百七條ニ規定スル
 モノ是ナリ

右第一ノ公行ニ付テハ被告事件若シ公安ヲ害シ(即チ公ケノ秩序ヲ害
 スル意例ヘハ政府ヲ顛覆セントシ又ハ 皇室ニ對シ危害ヲ加ヘント
 スル犯罪事件ノ如キ其辯論ハ公ケノ秩序ヲ害スル恐往々ナキニアラ
 ス)又ハ猥褻ニ涉リ風儀ヲ紊ル恐レアル時(例ヘハ姦通若クハ姦淫ノ被告
 事件ノ如シ)ハ裁判所ニ於テハ對審ノ公開ヲ停ムル決議ヲ爲シ其決議

ヲ爲シタル理由例ヘハ公ケノ秩序ヲ害スル恐アルニ因リ云々又ハ風
 儀ヲ紊ル恐アルニ因リ云々トノ理由ト共ニ公衆ノ退廷ヲ命スル前之
 ヲ言渡ス可キモノトス但裁判所ニ於テ公開ヲ停ムル事タル唯審問及
 ビ辯論ノミニシテ何レノ場合ト雖モ裁判所カ判決ノ言渡ヲ爲ス場合
 ニハ必ス再ヒ認廷ヲ公開シ公衆ノ傍聽ヲ許サル可ラス是レ裁判所
 構成法第一百五條ニ規定スル所ナリ故ニ裁判所ニ於テ倘シ判決言渡ノ
 片認廷ヲ公開セス又ハ公開ヲ停ムル決議ヲ爲シ及ヒ其決議ノ言渡ヲ
 爲サスシテ審問及ヒ辯論ヲ公行セサルトキハ其判決言渡被告人ニ不
 利益ナル場合ハ勿論縱使ヒ被告人ニ利益ナル場合ト雖モ齊シク法律
 ニ違背シタルモノナルカ故ニ第二百六十九條第八號ニ依リ上告ノ原
 由ト爲ル可キナリ
 前段解説スルカ如ク裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムル決議ヲ爲シ之
 ヲ言渡シタル片ハ總テノ傍聽人ヲ退カシム可キコトコレ通常ナリト雖

凡裁判長ハ入廷ノ特許ヲ與フルヲ至當ト認ムル者例ヘハ前ニ取調ヲ爲シタル官吏若クハ被告人ノ父母兄弟ノ如キ者ニテ傍聽ヲ許スモ前ニ述ヘタル恐ナシト認ムル者ハ之ヲ入廷セシムルヲ得可ク又婦女兒童及ヒ相當ナル衣服ヲ着セサル者即チ或ハ公益ヲ害シ或ハ公廷ノ威嚴ヲ瀆スカ如キ者ハ裁判長ハ特ニ其者ヲ退廷セシムルヲ得可キナリ但其理由ハ之ヲ訴訟ノ記録中ニ記入ス可キモノトス(裁判所構成法第百六條及ヒ同第百七條)

又第二ノ公行ニ付テハ設シ第一ノ公行ヲ禁シタル片ハ則チ當然此公行ノ禁アリト爲サル可ラス夫レ審問及ヒ辯論ヲ公行スルヲ禁シタルハ其公安ヲ害シ又ハ風儀ヲ紊ル恐アルカ爲メニ非スヤ果シ然レハ則チ之ヲ出版物ニ掲載シテ此等ノ恐ナシトハ決ノ云フヲ得サラン蓋訴訟ニ傍聽スル者ノ數ハ素ト限アリト雖凡出版物特ニ新聞紙ヲ以テ江湖ニ公ケニスルヲハ更ニ傳播ノ廣博ナル可キヲ勿論ニシテ

其恐モ亦隨ヒテ一層深カラサルヲ得サレハナリ去レハ此理由ニ因リ余ハ設ヒ第一ノ公行即チ傍聽ヲ禁セザリシキト雖凡裁判所ハ或ル場合ニ因リ其審問及ヒ辯論ノ次第ヲ新聞紙其他ノ出版物ニ掲記スルヲ禁スルヲ得可シト思惟ス尤モ此結論ニ付テハ必ス異議者アルヲ免カレサル可シト雖凡前段業己ニ述フルカ如ク果シ第二ノ公行ハ第一ノ公行ヨリ其及ホス所廣博ナリトセハ其廣博ナル第二ノ公行ヲ禁セサル上ハ乃チ狹隘ノ限涯ナル第一ノ公行ヲ禁スル理ナシト立論スルヲ最モ至當ナルモ今之ヲ逆ニシテ危險ノ狹少ナル第一ノ公行ヲ禁セサレハトテ必スシモ第二ノ公行ヲノミ禁ス可ラストノ道理ハ余ノ未タ發見セサル所ナリ唯然ルノミナラス此等操縦ノ權ヲ裁判所ニ與フルハ社會ノ安寧秩序ヲ保ツ上ニ於テモ亦甚ダ必要ナル可キヲ信スルナリ但其何レノ場合ニ於テモ判決ノ掲載ヲ禁ス可テサルヲハ猶ホ判決言渡ハ必ス公行セサル可ラスト爲ス理由ニ異ナラサルナリ

以上解説セル審判公行ノ事タル趣ニ區裁判所及ヒ地方裁判所ニ普通ナルノミナラス彼レ控訴院大審院ニ於ケル審判ノ場合ニモ亦齊シク適用セラル、モノトス

第一節 通則

訴件ノ受理

受理ノ文詞ハ本法ニ於テ二箇ノ意義アリ第一審理ノ意義第二交収ノ意義是ナリ而ノ第百八十六條ニ云ヘル受理ノ文詞ハ是レ單一ノ交収即チ収握チ云ヘルニ非スシテ則チ第一ノ意義ナル訴件ノ審理ヲ爲ス意義ニ解釋ス可キナリ蓋此意義ニ從ヘハ元來受理ス可ラス即チ受理シテハナラヌ場合ナリト見サル可ラサルモ然カモ此場合ニ於テモ亦到底一箇ノ言渡ヲ以テ其受理セサルコトヲ決定セサル可ラサル故ニ矢張訴件ヲ交収シタルニハ相違ナキナリ
藉シ訴訟ヲ提起スル者アル時ハ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ判決ヲ爲

裁判所ハ受理シタル訴件ヲ裁可セザルを得ス

スト將タ管轄違若クハ公訴受理ス可ラザル判決ヲ爲ストテ問ハス必ス其事件ニ付キ決定ヲ爲ス權利アリ義務アリ而シテ此權利義務ヲ有スル時ハ即チ裁判所カ其事件ヲ受理シタル時トス然リ而シテ此訴訟受理ノ條件及ヒ手續ニ至リテハ各裁判所ノ間多少ノ異同アリト雖一箇ハ區裁判所及ヒ地方裁判所ノ公判ニ係ル規定ヲ義解スル際ニ讓ラン
裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得ス又訴ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サ、ルコトヲ得ス之ヲ原則ト爲ス(第百八十四條第百六十九條七余ハ今先ツ第二ノ規定ヨリ詳説セン
夫レ裁判所ハ訴訟アランコトヲ豫期シ其訴訟ヲ判決センカ爲メニ設ケタルモノナルコト固ヨリ論ヲ竝タス然ラハ則チ其受理シタル訴訟事件ニ付テハ必ス之ヲ判決セサル可ラサル義務アルコト亦敢テ多辨ヲ要セサル所ナリ去レハ裁判所ニ於テ其受理シタル事件ノ判決ヲ爲サ、ルコト一部ニ係ル時ハ他部分ノ判決ニ對シテモ控訴及ヒ上告ヲ爲シ得

ル原由ト爲ル可ク(第二百六十九條七全部ニ係ル時即チ徒ラニ遷延シテ判決ヲ爲サ、ル時ハ則チ刑法第二百八十三條ノ制裁ヲ受クルニ至ル可キナリ(帝國法例第十七條參看)

是ヨリ第一ノ規定ニ反リ説カン

不告不理
ハ原則ト
如何ト

決

蓋不告不理ハ一般法律ノ原則ナリ抑裁判所ニ於テハ訴追ナクシテ判可ヲ爲ス可ラサルヤ敢テ辨明ヲ要スルマテモナカル可シ如何トナレハ前既ニ一言シタルカ如ク裁判所ハ訴追者アリテ然後判決スル權利ト義務トヲ生スルモ自カラ訴訟ヲ提起ス可キモノニ非サレハナリ去レハ第八十四條ニ於テモ亦明ニ此原則ヲ掲出スルヲ怠ラサリシナリ然レモ此原則ニ付テハ同條直チニ一ノ變則ヲ設ケリ曰ク辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラスト故ニ此場合ニ於テハ非除ヤ訴追者ナシト雖モ裁判所ハ自カラ起テ之レカ判決ヲ爲ス可ト得ルモノトス然リ而シテ茲ニ所謂附帶ノ犯罪トハ即チ第八十五

右原則ニ
例外ヲ爲
スノ場合
アリヤ

條ニ記載シタル場合即チ公訴事件ヲ指稱スルニアリト雖モカノ民事ニ關スル附帶ノ事件例ヘハ沒収ニ係ラサル差押物品及ヒ贓物等ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲サ、ル可ラス(第二百二條但賠償ニ付テハ之レニ異ナリ設ヒ辯論中發見シタル犯罪ニシテ且他ニ巨額ノ損害ヲ與ヘタル證左確著ナリト雖モ其被害者請求ナキ限リハ決シテ賠償ノ言渡ヲ爲ス可ラサルト勿論ナリ

附帶ノ犯
罪トハ如
何

附帶ノ犯罪トハ數罪並起シ其數罪ノ間脈絡互ニ相通シテ牽連スルモノヲイフ故ニ附帶ノ犯罪ハ到底二箇以上ノ犯罪並起シタル場合ニ非サレハ決シテアルトナシ而シテ附帶ノ犯罪ト非附帶ノ犯罪トハ要スルニ判事又ハ檢事ノ判斷ニ任ス可キモノタリト雖モ本法ニ於テ第八十五條ニ其三箇ノ場合ヲ列舉セリ但此ハ例示ニシテ制限シタルニハ非サルナリ

第一號ニ云同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタ

ルトキト此場合ニ於テハ其數罪ノ間互ニ相牽連スルト固ヨリ多カル可シ例ヘハ兇漢アリ一夜途中ニ於テ兼テ怨ム所ノ人ニ逢テ直チニ縛シテ之ヲ毆打創傷シタル後尙ホ其掣フル所ノ婦ヲ強姦シタリトセン其創傷及ヒ強姦ノ二罪ハ元來別個ノ犯罪ナリト雖モ同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人ニテ犯シタル犯罪ニシテ二者交牽連スルモノナルカ故ニ之ヲ同時ニ審判スル利アリコレ附帶ノ犯罪ト爲ス所以ナリ

又一人ノ兇漢男ヲ殺シテ其財ヲ奪フニ當リ偶然他ノ一人來リテ婦ヲ強姦シタリトセン乎此二人ノ兇賊ハ元來通謀シタルモノニ非スト雖モ本號所謂同一ノ場所ニ於テ同時ニ數人ニテ數罪ヲ犯シタルトキト云フニ當ルヲ以テ亦附帶犯罪ト爲シ審判ス可キモノトス

第二號ニ云數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタルトキト例ヘハ數人内乱ヲ謀リ一人ハ甲地ニ在テ兵器金穀ヲ準備シ他ハ乙地ニ在テ兵丁ノ招集ニ盡力シタル時ノ如シ其場所日時ハ同一ナラス

ト雖モ思想相通シ即チ牽連シタルモノナルカ故ニ亦之ヲ附帶ノ犯罪ト爲スナリ

第三號ニ云自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カルル爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキト例ヘハ一賊アリ寂寞無人ノ境ニ於テ男女二人ノ行旅ヲ認メ其女ヲ強姦セント欲シ先ツ其男ヲ殺シ然ノ後強姦ヲ遂ケタルカ如キ類ナリ

而シテ其罪ヲ免カルルカ爲メ云々トハ例ヘハ犯罪ノ顛末ヲ目撃シタル者或ハ告發ヲ爲シ又ハ他日證人ト爲リテ供述センコトヲ恐レ之ヲ殺害シタル等ノ類ヲ指シタルモノトス又所謂其トハ獨リ自己ノ字ノミナラス他人ノ字ヲモ承ケタルモノト解ス可キコト勿論ナリ

辨論中發見シタル附帶ノ犯罪ニシテ裁判所カ請求ヲ待タス直チニ審理及ヒ判決ヲ爲サンカ爲スニハ彼ノ犯罪ヲ種類ニ由ル裁判管轄ノ規定ニ從ヒ其裁判所ノ管轄若クハ下級裁判所ノ管轄ニ屬スルモノタル

トヲ要ス故ニ例ヘハ區裁判所ノ受理シタル違警罪又ハ輕罪事件ノ公
 判辯論中之レニ附帶スル重罪事件ヲ發見シタリトセンニ區裁判所ハ
 此重罪事件ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得ス然レモ其發見シタル事件違警
 罪若クハ裁判所構成法第十六條第二號及ヒ第三號ニ記載シタル輕罪
 ニ係ルトキハ則チ併セテ之レカ判決ヲ爲スコトヲ得可キナリ
 區裁判所ニ於テ違警罪又ハ其權限ニ屬スル輕罪事件ノ辯論中附帶シ
 タル重罪事件ヲ發見シ若シ其被告人同一ナル時ハ其辯論中發見シタ
 ル重罪事件ニ付キ判決スル權限ナキコト前段解説スル所ノ如ク尙ホ其
 初メ受理シタル輕罪又ハ違警罪ノ事件ニ付テモ亦之ヲ管轄スルコトヲ得
 ス乃チ管轄違ノ言渡ヲ爲サル可ラス蓋附帶ノ犯罪ハ之ヲ別ツ可ラ
 サルコト前ニ解説シタル所ノ如クニシテ而カモ第二十五條ノ精神ナル
 ヲ以テナリ但同條ニハ云々同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタルト
 キハ云々トアリ今文詞上窮窟ニ之ヲ解釋スル時ハ同時ニ同一ノ被告

人ニ對シ起訴ノ手續アリタル場合ニ限ルカ如シト雖モ余ヲ以テ之ヲ
 觀ルニ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ事件ノ生シタルトキト云フ意義ニ
 讀テ可ナルカ如シ蓋元ト事件ノ生セスシテ判決ヲ爲スコトアル可ラサ
 ルハ事理ノ當然ナルモノニシテ而シテ而ノ第八十四條ノ場合ニ於テ辯論
 ニ因リ附帶ノ犯罪ヲ發見シタル時ハ其發見シタル所爲ノミニ因リ其
 被告人ニ對シテハ既ニ事件ノ生シタルヤ明ナレハナリ今假リニ一步
 ヲ讓リ單々起訴ノ手續アリタル場合ノミニ限リ第二十五條末項ノ適
 用ヲ爲ス可キモノトスルモ抑該條ノ適用ニ付キ起訴ノ手續アリタル
 場合ト辯論中附帶ノ犯罪ヲ發見シタル場合トノ間ニ斯ク涇渭ノ別ヲ
 置ク可キ正當ノ理由ハ余ノ未タ發見セサル所ナリ
 又辯論中ニ發見シタル附帶事件ノ被告人ト辯論ニ係ル本案ノ被告人
 ト別人ニシテ而シテ其附帶事件ト本案ノ事件ト同種ノ犯罪ナル時即チ
 例ヘハ共ニ同一ノ權限ニ屬ス可キ輕罪ナル時ハ設ヒ土地ノ區劃ニ因

此裁判管轄ヲ異ニスル場合ト雖モ其本案事件ヲ受理シタル裁判所ハ
 彼レ土地ノ區劃上正當管轄トスル他裁判所ニ此附帶事件ヲ審判セシ
 メンガ爲メ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可キモノニ非ス乃チ自カラ本案事件
 ト共ニ之ヲ判決ス可キナリ語ヲ換テ云ヘハ即チ第百八十四條但以下
 ノ適用ニ入ル可キモノトス然レモ設シ他裁判所即チ彼レ附帶ノ犯罪
 ニ付キ他ノ區劃上正當管轄トスル裁判所ニ於テ是ヨリ先キ既ニ豫審
 又ハ公判ニ着手シタル時ハ本案事件ヲ受理シタル裁判所ニ於テモ本
 案事件ト共ニ之レカ管轄違ノ言渡ヲ爲サ、ル可ラス蓋犯罪ノ種類ニ
 因リ裁判管轄ヲ異ニスル二箇ノ裁判所ニ付テハ則チ上等ノ裁判所併
 セテ之ヲ管轄シ土地ノ區劃ニ因リ齊シク裁判ノ權限ヲ有スル二箇ノ
 裁判所ニ付テハ則チ最初豫審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ニ於テ之
 チ管轄ス可キヲ余カ前ニ第二十七條ノ義解ニ詳悉シタル所ノ如クナ
 レハナリ

豫審ニ關
 シテモ不
 告不理ノ
 原則ニ例
 外ヲ爲ス
 場合アリ

夫レ本案事件ト附帶事件ト元來其管轄ヲ異ニシ又其被告人ヲ別ニス
 ルニ拘ラス法律ハ強メテ之ヲ同一ノ裁判所ニ併合スルヲ素ト其精神
 ナリ況ンヤ同一ノ被告人ニ係ル場合ニ於テヲヤ之ヲ一箇ノ裁判管轄
 ニ屬セシメントスルヲ洵ニ明ナリト云フ可シ

豫審判事ノ爲ス決定ニ關シテモ亦不告不理ノ原則ニ例外ヲ爲ス場合
 アリ先ツ現行ノ重罪輕罪アル場合ニ於テ豫審判事檢證調書ヲ作りタ
 ル時ハ檢事ノ起訴ナクハテ法律上公訴ヲ受理シタルモノト做スカ故
 ニ(第百四十三條)此場合ヲ算入セサルモ彼ノ證人出廷宣誓ヲ肯セス又
 ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル場合(公判ニ於テノ證人ニ付テモ亦同一ノ
 規定アリト雖モ爰ニ述フル所ハ豫審ニ於テノ證人ニ就テノミ云ヘル
 ナリ)ノ如キハ別ニ公訴ノ起ルヲナク事實及法律上單ニ豫審判事ニ於
 テ刑法ノ定ムル所ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可キモノトスル(第百二十六
 條)カ故ニ到底前述ノ原則ニ對スル例外ノ一ニ措カサルヲ得サルナリ

呼出ニ應セサルハ證人又ハ鑑定人ニ對シテ爲ス刑ノ言渡ナリト雖モ先ツ證人又ハ鑑定人故ナク呼出ニ應セサル場合ニ裁判所又ハ豫審判事ノ爲ス罰金ノ言渡ハ素ト起訴者ナクシテ爲ス刑ノ言渡ナリト雖モ之ヲ前述不告不理ノ原則ニ對スル例外ヲ爲スモノト云フ可ラサルコト是ナリ蓋此場合ノ制裁タル彼レ正當ノ故ナクシテ呼出ニ應セサル者ニ對シ其呼出狀ヲ發シタル官廳又ハ官吏ニ於テ自カラ之ヲ言渡スコトヲ法律上認許シタルニ過キス即チ審査ノ遅延セサランカ爲メ又ハ審査ノ材料ヲ失ハサランカ爲メ強ユルニ此制裁ヲ以テシ又場合ニ依リ自カラ言渡シタル制裁ヲ取消スコトヲモ得ル等全ク一種特別ノ規定ニシテ自カラ他刑罰ニ異ナル所アレハナリ

第百八十四條ニハ辨論ニ因リ發シタルノ犯罪云々トアリテ言辨論ニ因リ發見シタル共犯ノ場合ニ及ハス然レハ裁判所ニ於テ辨論ニ因リ發見シタル共犯者ニ付テハ別ニ檢事ノ起訴アルニ非サレハ則チ判決スルコトヲ得可ラサル乎

此疑問ハ唯タ一言以テ氷解セシムルコトヲ得可シ曰ク裁判所ノ公訴ヲ受クルヤ事件ニシテ人ニ非スト是ナリ今少シク之ヲ詳言センニ元來裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得スト雖モ其最初受理シタル被告人以外ノ人ニ對シテ裁判ヲ與フ可ラサルモノニアラス何トナレハ裁判所カ最初受理シタルハ犯罪事件ノ全體ニシテ即チ又總テノ被告人ニ對スル公訴ナルカ故ニ其被告人ノ登初發覺シタルト中コロ發覺シタルトハ毫モ茲ニ問フ所ニ非サルノミナラス事件全體ニ關シテ精密ナル審査ヲ爲シ其事件ニ係ル所爲其者ヲ裁判セサル可ラサレハナリ然リ而シテ今試ニ最初公訴ノ際發見セラレサリシ共犯人ハ則チ未ダ公訴セラレサル者ナリト假定セン乎裁判所カ受理シタルハ犯罪事件其者ニ非スシテ則チ被告人其者ナリト云フニ至ラン本法ノ規定明カニ被告事件ノ受理云々ト云ヒテ被告人ノ受理云

々ト云ヘルモノナキニ依テ之ヲ觀ルモ法意ノ在ル所ヲ知ルニ足ラン
 其レ然リ然ラハ則チ大凡共犯者ハ彼ノ單ニ牽連シタル筋合アルモ元
 來殊別ノ犯罪ナル附帶ノ犯罪ト同視スルヲ得サルヤ晰ケシ依此觀
 之第百八十四條ニ於テ共犯云々ノ語ナシト雖モ若シ辯論ニ因リ共犯
 者ヲ發見シタル時ハ併セテ之レカ裁判ヲ爲シ得ルヲ復タ多辯ヲ要セ
 サルナリ要スルニ其未タ發見セラレザリシ共犯人ニ對シテモ既ニ檢
 事ノ起訴アルモノト爲ス可キニ由ル

公廷ノ取
 締

公廷ノ取締

公廷ニ於
 テ暴行等
 チ爲シ辯
 論ヲ妨礙
 スル場合
 ニ於テハ
 裁判長ハ

裁判長ハ審問辯論ヲ整理シ且公廷内ノ秩序威嚴ヲ保維スルカ爲メ相
 當ノ處置ヲ爲ス權利アリ亦義務アリ(裁判所構成法第百八條)
 若シ公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ審問ヲ妨ケ其他不當ノ行狀ヲ爲
 ス者アル時ハ裁判長ハ職權ヲ以テ其者ヲ退廷セシムル權アリ若シ其
 違犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ勾引シ閉廷ノ片ニテ勾留スル必要アリト認

如何ナル
 權アリヤ

ムルトキ例ヘハ引續キ審問辯論ノ妨害ヲ爲ス者ノ如キハ閉廷ニ至ル
 マテ之ヲ勾留スルヲ得可ク而シテ閉廷ノ片裁判所ハ之ヲ釋放シ又ハ
 五圓以下ノ罰金若クハ五日以内ノ勾留ニ處スルヲ得可シ其處罰ヲ
 受ケタル者ハ上告ヲ爲スヲ得ルモ控訴ヲ爲スヲ得ス是レ元來法廷
 内ノ取締權ニ依リ處罰ヲ科シタルノミナラス現行ノ所爲ニシテ更ニ
 覆審ノ必要ナシト爲スニ由ル然レモ其所爲輕罪(例ヘハ判事檢事ニ對
 シル侮辱ノ罪ノコトシ)又ハ重罪(例ヘハ毆打殺人罪ノコトシ)ノ刑ニ該
 ル者ナル片ハ通常ノ手續ニ從ヒ檢事ヨリ起訴ヲ爲ス可キナリ此等ノ
 事ハ裁判所構成法第百九條ニ規定スル所ナリ就テ看ル可シ
 前段述フル所ノ違犯者被告人其他訴訟關係人又ハ證人鑑定人ニ係ル
 片ハ如何裁判所ハ閉廷ヲ待タス直チニ前掲罰金若クハ勾留ノ刑ヲ科
 スルヲ得可ク違犯者原告ナル片ハ處罰ノ上仍ホ本人宥恕ヲ請フカ
 又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其審問ヲ中止スルヲ得可

シ又被告人退廷ヲ命セラレ又ハ勾留セラレタル場合ニ於テハ其被告人ハ法律上辯論ノ權ヲ拋棄シタルモノト看做スカ故ニ被告人ハ現ニ公廷ニ在ラサルニ拘ラス對席トシテ引續キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可キナリ去レハ被告人ハ彼レ闕席判決言渡ニ於ケルカ如ク其判決ニ對シテ故障ヲ爲スコトヲ得ス只々通常ノ對席判決ニ於ケル上訴ヲ爲シ得ルノミ(第百八十二條及ヒ裁判所構成法第百十條參看)

然レモ其辯論常日局ヲ結ハスシテ二日以上ニ渉ル時ハ被告人ハ其間自カラ悔悟スルコトアルヘク苟クモ悔悟シテ辯論ノ妨礙ヲ爲サ、ル時ハ其辯論ノ權利ヲ永久ニ剝奪ス可キ理由ナク又必要ナシ故ニ被告人ヲシテ辯論及ヒ裁判ニ立會ハシメサル可ラス若シ此手續ヲ爲サスシテ辯論及ヒ裁判ヲ爲シタル時ハ無論之ニ對シテ故障ヲ爲スコトヲ得可シ但其更ニ出廷シタルニ當リ又々前同様ノ所爲アリタル時ハ復タビ退廷セシメ若クハ勾留ヲ爲シ得ルコト固ヨリ言ヲ俟タサルナリ(第百八

十二條末項

若シ辯證士ニ於テ上來解説スル所爲アリタルハ如何裁判所ハ前段記述スル處罰ヲ爲スコトヲ得可キハ勿論ニシテ又設ヒ其所爲未タ審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲スニ至ラスト雖モ判事又ハ檢事ニ對シ不敬不當ノ言語ヲ用ヒルハ裁判長ニ於テ其事件ニ付キ引續キ陳述スルコトヲ禁スルヲ得可ク且辯證士規則ニ依リ懲戒處分ヲ爲スコトヲモ得可キナリ(裁判所構成法第百十一條)

被告人

被告人トハ社會刑罰權ノ趣旨ニ因リ立法者カ制定シタル法律即チ禁止命令ニ違犯シタリトシテ裁判所ニ訴ヘラレタル者ノ謂ナリ而シテ其罰金以下ノ刑ニ該ル者タリ又ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル者タルニ因リ法律ノ規定スル所同シカラス先ツ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ被告人ナル時ハ被告人ハ自カラ出廷スルニ及ハス代人ヲ以テ呼出ニ應スルコトヲ

被告人

被告人トハ如何
該當スヘキ刑ノ如何
何ニ因リ
治罪手續
特ニ出頭
關シテ
アリヤ

得可シ(第二百十四條)然レモ禁錮以上ノ刑ニ該ル者アル時ハ疾病ナルニ非サレハ必ス自カラ呼出ニ應ジテ出廷スル義務アリトス
總テ被告人ハ前述ノ區別ニ從ヒ自カラ出廷スルト代人ヲシテ出廷セシムルトヲ問ハス裁判所ヨリ出廷ス可キ告知ヲ受ケタル時ハ必ス之レニ應セサル可ラサル義務アリトス是レ他ナシ抑裁判所ハ犯罪ノ事實ト被告人ノ情狀トヲ審明シ之レカ判決ヲ爲ス職務ヲ有スルモノニシテ固ヨリ片言ヲ聽テ獄ヲ折ム可ラサル道義アルノミナラス闕席裁判ハ實ニ社會ト被告人ト共ニ損害ヲ被ムルヲ屢々ナルニ由ル何ヲカ社會ノ損害ヲ來タスヲアリト云フ乎曰ク他ナシ設ヒ闕席裁判ヲ爲シタリトテ一タヒ被告人ヨリ故障ヲ爲ス時ハ則チ其言渡ハ無効ト爲ルカ故ニ裁判所ハ其審判ヲ復タヒセサルヲ得ス而シテ裁判ノ元來事實及ヒ法律上秋毫モ非難ス可キ點ナキニ拘ラヌ妄リニ不服ヲ唱ヘテ萬一ヲ僥倖シ闕席裁判ニ満足ヲ表セサルハ滔々タル被告人ノ常態ナリ夫レ

徒ラニ無益ノ費用ト事務トヲ二重ニス社會ノ損害ニ非スシテ何ソヤ何ヲカ被告人ニ損害ヲ來タスヲアリト云フ乎曰ク他ナシ被告人出頭セサレハ事情審カナラス事情審カナラサレハ非除ヤ檢事ノ公平ナル起訴ト裁判所ノ熟練ナル判決ヲ以テスルモ亦或ハ誤謬ナキヲ保セス誤謬ノ判決ニ因テ被告人ニ不利ナラン乎被告人ハ其判決ニ對シテ故障ヲ爲スコトヲ得可シト雖モ其判決後ニ於ケル無罪ノ辯護ハ果ソ能ク容易ニ裁判所ノ心證ヲ動かスコトヲ得可キヤ否ヤ蓋未タ曾テ刑ノ言渡ヲ受ケサル者ニ比シテ更ニ一層困難ナル可シ被告人ノ損害ニ非スシテ何ソヤ況ンヤ誤テ有罪ノ人ヲ漏ラスハ無辜ノ民ヲ罰スルト共ニ法律ノ尊嚴ヲ傷ケ社會ノ損害ヲ來タスヲ更ニ焉ヨリ甚シキモノナキヤヤ法律カ被告人ニ出廷ノ義務ヲ負ハシムルモ亦宜ナリト謂フ可シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルニ非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ強テ之ヲ引致スルコトヲ得ヘシ(第七十八條)若シ出廷シテ辯論ス

ルヲ肯セサル時ハ之ヲシテ強テ辯論セシムルヲ得サルモ然カモ亦
 被告人ノ頑慢ナルカ爲メ曠日遷延ス可キニ非サルヲ以テ已ムヲ得
 ス被告人ハ辨論ノ權能ヲ拋棄シタル者ト看做シ對席トシテ裁判ヲ爲
 ス可キ者トセリ(第百八十二條初項)
 然リ而シテ被告人ノ所在分明ナラス引致スルヲ能ハサル場合ニ於テハ
 單ニ呼出狀ヲ被告人ノ住所若クハ親屬等ニ送達シタルノミヲ以テ未
 タ闕席裁判ヲ爲スニ充分ナル手續ヲ盡シタリトセス是レ輕忽ニ裁判
 ヲ爲サス成ル可ク被告人ノ出廷ヲ得ンカ爲メノ趣旨ニ外ナラサルナ
 リ然リト雖モ被告人ニシテ若シ故ラニ其所在ヲ鞫晦セハ之ヲ逮捕ス
 ル期固ヨリ逆賄ス可ラス今無限不定ノ逮捕ヲ望ンテ爲メニ裁判ヲ遷
 延スルカ如キハ之ヲ迂濶ノ甚シキモノト謂ハサル可ラス於此乎所謂
 已ヲ得サル方法即チ闕席裁判ノ窮策ヲ擇フニ至ル然ルモ法律ハ尙ホ
 鄭重ノ手續ヲ定メ實際被告人ニ於テ被告事件ノ公訴起リ居ルヲ知

闕席判決
 付テモ被
 告人ニ該
 當スヘキ
 刑ノ如何
 ニ因テ治
 罪ノ手續
 上差異ナ
 キ乎

リテ出頭セサル者ナル證アルカ若クハ法律上被告人ニ於テ被告事件
 ヲ知了セリト看做サル、方法ヲ行ヒタル上ニ非サレハ未タ俄ニ闕席
 裁判ヲ爲スコトヲ許サス所謂實際被告人カ公訴事件ヲ知了シタル證
 トハ即チ豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ被告本人ニ送達シタ
 ル證ニシテ(第二百二十七條第一項)又法律上被告人カ公訴ノ起リタル
 ヲ知了セリト看做スヘキ方法トハ即チ裁判所ニ於テ猶豫ノ期間ヲ定
 メ其期間内ニ出頭セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キ旨ノ告知書ヲ其親
 屬又ハ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達スル等ノ手續
 チ云フ而シテ親屬又ハ市町村長等ハ成ル可ク本人ニ言渡書、呼出狀若ク
 ハ告知書ヲ傳達スル手續ヲ爲ス可キヲ固ヨリ論ヲ俟タヌ又被告人ノ
 本籍及ヒ最後ノ住所ノ地不分明ナル場合ニ於テハ同上ノ告知書ヲ少
 クトモ一月間裁判所ノ揭示場ニ貼付シテ公示シタル上ニ非サレハ闕
 席裁判ヲ爲スヲ得サルナリ(同條第二項)

之ヲ要スルニ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人故ナク出頭ヲ肯セサル
場合ニ於テ其所在分明ナル時ハ必ス公力ニ籍リ強テ之ヲ引致ス可ク
若シ又所在分明ナラサル時ハ其豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人
ニ送達シタルト否トニ依リ前述ノ區別ニ從ヒ或ル手續ヲ盡シタル上
闕席裁判ヲ爲シ得ルノミ
故ナク出頭セサル被告人ヲ引致スルコトヲ得ルハ單ニ禁錮以上ノ刑ニ
該ル可キ事件ニ限ル蓋主刑罰金科料ニ該ル可キ者ナル時ハ元來其主
刑スラ尙ホ身體ノ拘束ヲ受ク可キ者ニ非サルニ因リ之ヲ引致スルコ
トヲ許サ、ルモノ歟然レモ前既ニ述ベタルカ如ク凡ソ闕席裁判ハ容易
ニ之ヲ爲ス可キモノニアラサルノ趣旨ニ依テ之ヲ觀レハ設ヒ罰金以
下ノ刑ニ該ル可キ被告人ト雖モ呼出狀ヲ受ケテ故ナク出頭セス且實
際勾引スルコトヲ得可キ場合ニ於テハ社會ノ爲メ將タ被告人ノ爲メ之
ヲ引致シテ裁判ヲ爲スノ優レルニ若カサルカ如シ

第二百二十七條ニ規定シタル闕席裁判ヲ爲スニ付テノ制限即チ豫審
終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルヲ要スルコト若ク
ハ裁判所ニ於テ猶豫ノ期間ヲ定メ告知書ヲ發スルコト等ノ規定ハ亦禁
錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ付テノミ定メタルモノナルカ故ニ之
ヲ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ適用スルコトヲ得ス而シテ其罰金以
下ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出頭セサル時ハ之ヲ奈何ス可
キ乎他ナシ直チニ闕席裁判ヲ爲ス可キノミ即チ豫審終結ノ言渡書又
ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル證アルヲ要セス尋常ノ手續ニ依リ呼出
狀ヲ其親屬又ハ住所ノ地ノ市町村長ニ送達シタルヲ以テ充分ナリト
シ又別ニ猶豫ノ期間ヲ定メ告知書ヲ發スル等ノ手續ヲ要セサルモノ
トス是レ第二百二十六條ニ規定シタル所ナリ然レモ余ハ前段ニ立法
上意見ヲ演ヘタルカ如ク可成的闕席裁判ヲ爲サ、ランコトヲ欲スルカ
故ニ其趣旨ヲ擴充シテ第二百二十七條ノ規定ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル

可キ者タルト否トニ拘ラス齊シク之ヲ適用スルノ可ナルヲ信スルナリ何トナレハ該條ハ要スルニ闕席裁判ノ容易ニ可ラサル趣旨ニ成リタルモノナレハナリ

被告人精神錯乱又ハ疾病ニ因リ出頭スルヲ能ハサルハ瘡癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止スルモ若シ罰金以下ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ引續キ辯論ス可キモノト爲ス是レ第百八十三條ニ規定スル所ナリ然レモ該條罰金以下ニ該ル可キ事件ニ付キ代人ヲ差出シタルトキハ被告人カ精神錯乱ノ場合ヲ包含セサルモノト思認セサル可ラス何者精神錯乱者ハ代人ヲ委任スル能力ヲ有セサレハナリ

被告人尋常ノ疾病ニ因リ出頭スルヲ能ハサル場合ニ於テハ出頭ノ延期ヲ乞ヒ得ルヤ否ヤ論者或ハ延期ヲ乞ヒ得サルモノト爲ス蓋其說ニ曰ク开モ尋常ノ疾病者ハ藉使ヒ躬ヲ出頭スルヲ得サルモ亦以テ代

人ヲ委任スルヲ得可シ何ゾ必スシモ公判ノ延期ヲ爲スヲ要セン故ニ若シ代人ヲシテ出頭セシメサル者ハ乃チ直チニ闕席裁判ヲ爲ス可キノミト然レモ余ハ此所說ヲ以テ其當ヲ得タリト謂フヲ得ス他ナシ特リ闕席ノ容易ニス可ラサルヲハ前既ニ説ケルカ如キノミナラス元來代人ヲ委任スルト否トハ一ニ本人ノ隨意ニ在テ存スルモノニシテ固ヨリ他人ノ強テ之ヲ爲サシムルヲ得サル所ナルヲ以テナリ去レハ親屬故舊ニ於テ被告人疾病ニ罹リタルカ爲メ出頭スルヲ能ハサル旨ヲ證明シタル時ハ裁判所ニ於テ其公判ヲ延期スルヲハ甚タ至當ナルヲ信スルナリ

被告事件共犯ニ係リ其一名又ハ數名ハ出頭シタルモ他ノ一名又ハ數名出頭セサル時ハ其出頭シタル者ニ付テハ通常ノ規定ニ從ヒ對席裁判ヲ爲ス可キモ出頭セサル者ニ付テハ闕席裁判ヲ爲ス可キヲ復タ言ヲ喚タサルナリ

被告人ノ法律上代理人ハ其補佐人ト爲リ辯論ニ與カルコトヲ得(第百八十一條)蓋被告人ノ法律上代理人即チ父母後見人等ハ若シ被告本人即チ未丁年者若シハ有夫ノ婦等ノ所爲ニシテ有罪ナリト判決セラレ又ハ設ヒ有罪ノ判決ナキモ其被告人ノ所爲ナリト判決セラル、時ハ此等ノ者ハ監督補佐ノ周到ナラサリシ嫌アリテ名譽上寢損スル所アルノミナラス民事上賠償ノ責ニ任セサル可ラサルカ故ニ被告本人ト俱與ニ百方辨護ヲ盡シ刑法上及ヒ民法上ノ責任ナキ判決ヲ受クル利益アルコト論ヲ竣タサルナリ

審査及ヒ辯論

余ハ茲ニ審査及ヒ辯論ヲ講究スルニ先チ第百八十六條ノ規定ニ付キ説明セサル可ラサルモノアリ蓋該條ハ管轄違又ハ公訴受理ス可ラサル申立ヲ爲スコトヲ得ル人及ヒ場合ヲ規定シタルモノニシテ本案即チ被告事件ニ關スル事實上又ハ法律上犯罪ノ成立不成立若クハ證據ハ

十分不十分ニ付キ審議討論スルモノニ非サレハ爰ニ所謂審査及ヒ辯論トハ元來其事ヲ異ニスルカ故ニ今之ヲ審査及ヒ辯論ノ項下ニ解説スルハ或ハ其處ヲ失スル觀ナキニ非サル可キモ抑該條ノ所定ニ據レハ同上ノ申立ハ設ヒ辯論中又ハ辯論終結ノ後タリトモ苟クモ未タ判決ナキ限りハ之ヲ爲スコトヲ得ル規定ナルカ故ニ爰ニ該條ヲ講究スルハ序次上強キ其宜シキヲ失フモノト云フ可ラス今先ツ該條ノ成文ヲ茲ニ掲出セン

第百八十六條 檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審ヲ問ハス本案ノ判決アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲ爲スコトヲ得裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

本條ノ成文ヲ一見スル時ハ管轄違又ハ公訴受理ス可ラサル申立ハ其公訴事件ノ第一審タリ第二審タルニ拘ラス本案ノ判決アルマテハ何

第百八十六條ニハ
本案ノ判決アルマテ

アルニ以テ既ニ一
タビタル
アリタル
上ハ設ヒ
其被告事
件ノ管轄
違ハ公事
訴又ハ公
可ラサル
申ノナリ
シヲナリ
知スルモ
最速ス
可キ方
ナキ乎

時ニテモ之ヲ爲シ得可キモ既ニ本案ノ判決アリタル上ハ又此等ノ申
立ヲ爲スコトヲ得ス設ヒ管轄違又ハ公訴受理ス可ラサルモノタルヲ覺
知スルモ事既ニ晚ク復タ施ス可キ術ナキニ似タリ然レモ此見解ハ畢
竟法律ノ一斑ニ齷齪セル謬見ノミ大レ非管轄ノ裁判所ニ於テ判決ヲ
爲シ又公訴受理ス可ラサル場合ニ於テ公訴ノ判決ヲ爲シタルカ如キ
其判決ノ瑕疵アルハ更ニ論ヲ俟タス苟クモ瑕疵アラハ之ヲ匡補スル
活途ナカル可ラス彼ノ控訴(第二百五十條)上告(第二百六十七條)ノ二者
ハ則チ匡補ノ方法ト云フ可キナリ
之ヲ要スルニ本條ハ單ニ本案ノ判決アルマテハ其第一審ノ裁判所ニ
在ルト第二審ノ裁判所ニアルトヲ問ハス又審査若クハ辯論ニ取掛リ
タル前タルト審査若クハ辯論ノ終結シタル後タルトヲ問ハス管轄違
又ハ公訴受理ス可ラサル申立ヲ爲シ得ルコトヲ明カニスルノ意ニ外ナ
ラサルナリ

第一審第
二審ヲ問
ハス判決
アルマテ
何時ニテ
モ管轄違
又ハ公訴

本條ノ申立ハ限ルニ本案ノ判決アルマデト云フヲ以テセリ是レ幾ン
ド明定ヲ要セサルニ似タリ何者裁判所ニ於テハ判決ヲ爲スト同時ニ
其事件ヨリ脱離スルモノナルコト余カ屢々開示シタルカ如ク固ヨリ當
然ノ事ナルカ故ニ其判決ノ以後管轄違ノ申立ヲ爲シ得サルコトモ亦敢
テ明定ヲ待テ後定マルモノニ非サレハナリ然レモ立法者ノ特ニ此規
定ヲ爲シタルハ惟フニ辯論前之ヲ申立テサレハ最早之ヲ爲スコトヲ得
ス又第一審ノ判決アルマテニ之ヲ申立テサレハ最早之ヲ爲スコトヲ得
ストノ疑ヲ懷ク者ナキニ非サルヲ慮リ其然ラサルヲ知ラシメントノ
趣旨ニ外ナラス更ニ之ヲ再言スレハ判決前ハ同上ノ申立ヲ爲スヲ得
可キヲ云ヒテ判決後ハ之ヲ爲スヲ得スト云ヒタルニハ非サルナリ
然リ而其辯論中若クハ辯論終結後ニ拘ラス又第二審ノ裁判所ニ於テ
スルニ拘ラス同上ノ申立ヲ爲スコトヲ許シタル所以タル設ヒ此申立ヲ
爲スニ期間ヲ限リタリトテ其管轄違ノ場合及ヒ公訴受理ス可ラサル

受理ス可
ラサル申
立ヲ爲ス
ルヲ許シ
タル理由
如何

場合ニ於テ爲シタル本案ノ判決ハ到底上訴ニ依テ取消サル可キモノ
ナルヲ以テ寧ロ何時ニテモ其申立ヲ許スノ愈レルニ若カストスルニ
在ルナリ

而シ裁判管轄ノ規定ハ余カ曾テ解説シタルカ如ク公ケノ秩序即チ公
益ニ關スルモノナリ又公訴受理ス可ラサル申立ヲ爲ス可キ場合ハ即
チ第六條ニ列記スルモノニシテ是レ亦余カ曩ニ詳論シタルカ如ク其
公ケノ秩序ニ關スル言ヲ俟タス故ニ裁判所ニ於テモ其時ニ制限ナ
ク本案ノ判決アルマテハ何時ニテモ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理
ス可ラサル言渡ヲ爲ス可キモノトセリ

本條ニハ檢事及ヒ被告人云々トアリア言民事原告人ニ及ハス乃チ民
事原告人ハ管轄違又ハ公訴受理ス可ラサル申立ヲ爲ス可キ得サル可
キ乎願フニ決シ然ラサル可シ蓋民事原告人ヨリ公訴受理ス可ラサル
申立ヲ爲シテ利益アル場合ハ實際稀有ナル可キ勿論ナルモ例ヘハ

民事原告
人ハ管轄
違又ハ公
訴受理ス
可ラサル
申立ヲ爲
ス可キ得
サル乎

公訴起リタル後被告人ノ死去セシヲ發見シタル場合等ノ如キ速ニ公
訴受理ス可ラサル申立ヲ爲シ公訴ノ結局ヲ得テ更ニ被告人ノ相續人
ニ係リ損害賠償ノ請求ヲ爲ス時ハ徒ラニ無益ノ日子ト費用ヲ嵩加ス
ル弊ヲ防クコトヲ得可キノ類實際之レナキニアラサル可シ
其レ然リ故ニ管轄違ノ申立ニ付テハ其公訴豫審判事ノ言渡ニ因リ受
理セラレタルモノナルト檢事ヨリ直チニ起訴シタルモノニ係ルトヲ
問ハス齊シク管轄違ノ申立ヲ爲ス可キ得可シト決定セサル可ラス何
者前既ニ詳説シタルカ如ク抑管轄違ノ申立ハ公ケノ秩序ニ關スルモ
ノタリ果シテ公ケノ秩序ニ關スルモノタラハ設ヒ檢事又ハ民事原告人
ハ其初メ自カラ誤テ非管轄ノ裁判所ニ公訴私訴ヲ爲シタリトモ其隨
意ニ非管轄ノ裁判所ニ訴訟シタル故ヲ以テ最早管轄違ノ申立ヲ爲ス
可キ權利ヲ拋棄シタルモノナリト看做ス可キ得ス蓋公ケノ秩序ニ關
スル事項ニ付テハ明瞭又ハ暗黙ニ其權利ヲ拋棄スルコトヲ得サルヲ以

テ原則ト爲セハナリ
 前段解説スルモノ、外凡ソ種々ナル異議ノ申立ハ本案ノ判決アルマ
 テ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得ルモノアリ又辨論ニ取掛ル前ニ非サレ
 ハ之ヲ爲スヲ得サルモノアリ而シテ其第一ノモノハ概シテ公ケノ秩
 序ニ關シ法律ニ於テ其法式手續ノ所定ニ背戾シタル時ハ無効タル可
 キ旨ヲ明示シタル場合ニ爲ス可キ異議ノ申立ナリ又其第二ノモノハ
 公ケノ秩序ニ關セス專ラ訴訟ノ私益ニ關スル規定ニ背戾シタル場合
 ニ爲ス可キ異議ノ申立ナリ

公判ノ審
 査下豫審
 ノ差異

余ハ此ヨリ公判ノ審査ヲ述ン蓋豫審ノ審査トハ大ニ其淵源ヲ異ニシ
 一ハ彼ノ彈劾主義ニ出テ一ハ糾問主義ニ出ルヲ以テ隨テ其性質ヲ同
 クセス豫審ニ於テハ被告人ノ人違ナキヤ否ヤ及ヒ犯罪ノ有無ニ關ス
 ル證據徵憑ヲ集取シ而シテ其證據ハ果シテ被告人ノ人違ニ付スルニ足
 ルヤ否ヤヲ審査スルニ在ルモ公判ノ審査ハ然ラス管ニ被告人ノ人違

辯論下審
 査下元

ナキヤ否ヤ及ヒ犯罪ノ有無ヲ審査スルニ止マラス設ヒ其被告人ノ所
 爲ハ即チ犯罪タルヘキ所爲ナルモ其情狀ノ輕重其他ノ狀況ヲ審覈セ
 サル可ラス加之ナラス公判ノ手續ハ公然ニ且對席ニテ之ヲ爲スヲ本
 則トスルカ故ニ其審査ニハ必ス序次アリ辯論ニハ必ス準備ノ手續ナ
 カル可ラス又要スルニ公判ノ審査ハ之ヲ豫審ノ審査ニ比シテ更ニ精
 密ヲ要スルカ故ニ其既ニ集取シタル証憑ノミニ依據セス更ニ原被双
 方ノ地位ニ立者ヲシテ隨意ノ供述ヲ爲サシメ之ヲ審聽シテ以テ其事
 實ノ認定ヲ下サ、ル可ラス(對席裁判ヲ假想ス)設ヒ被告人ノ闕席シタ
 ル場合ト雖モ裁判所ハ原告證據即チ犯罪ノ證據ヲ審査スルニ止マラ
 ス被告ニ利益アル證據モ亦同時ニ之ヲ審査シカメテ事實ヲ得ンコト
 注意ス可キヲ論ヲ竣タス余前ニ闕席裁判ハ之ヲ容易ニス可ラサルコ
 トヲ詳論シタリシモ亦要スルニ此趣旨ニ外ナラサルナリ
 然リ而シテ其原被双方ヲシテ迭ニ辯論セシムルコトタル事實及ヒ情狀

來特殊ノ
モノナル
乎

ヲ發見スルカ爲メ最好ノ手段ナルカ故ニ尙シ審査ノ語ヲ推察シ之ヲ
汎博ノ意義ニ解了スルキハ辯論ハ即チ審査ノ語中ニ包含セリト看做
シ敢テ不可ナル可シ試ミニ語ヲ變ヘテ之ヲ言ハン乎裁判所ハ被告
人ノ訊問、證人ノ供述、檢證、鑑定、書證、其他ノ證憑ノミニ依テ心證ヲ容ツ
クルモノニアラス固ヨリ原被双方ノ辯論ニ依リ事實ノ有無情狀ノ輕
重ヲ勘査ス可キカ故ニ辯論ハ即チ審査ノ一部ト斷了スルコトヲ得可シ
而シテ就中被告人訊問ノ如キハ亦同時ニ辯護ノ手段ナルコト余前ニ之ヲ
述ヘタリ

此對席即チ原被相互ノ辯論ノ如キハ豫審ニ於テハ全ク存セサルモノ
ナリト雖モ彼ノ證據ニ至テハ余カ前ニ述ベタルカ如ク之ヲ採集スル
手續ニ付キ些カ豫審ト差異アルノミ證據其者ニ至テハ二者毫モ涇渭
ノ別アルコトナシ此等ノ事項ハ前既ニ詳説シタル所ナレハ今復茲ニ贅
セス唯一言ス可キハ凡ソ審査中最モ緊要ニシテ裁判所ノ須臾モ忽カ

一着手ト
審査ノ第
一着手ト
シテ被告
人ノ氏名
年齢等ヲ
訊問スル
所以

セニス可ラサルハ即チ證據採擇ノ一事ナリトス

審査ハ判事(判事數名ナル時ハ裁判長)ヨリ被告人ノ氏名年齢身分職業
住所出生ノ地ヲ訊問スルヲ以テ第一着ト爲ス(對席裁判ヲ假想ス)蓋犯
罪ノ審査ヲ爲サンニハ必ス先ツ其被告人ノ人違ナキヤ否ヤチ確カム
ルコトノ須需ナルハ更ニ論ヲ竣タス而シテ其被告人トシテ現ニ出頭シ
タル者ノ果ソ被告人其者ナルヤ否ヤハ先ツ之レカ氏名年齢等ヲ訊問
スルニ非サレハ得テ知ルコトヲ得サレハナリ而シテ審査ノ手續及ヒ順序
ハ本案事件ノ重罪タリ輕罪違警罪タルニ從ヒ各其揆ヲ一ニセサレハ
余ハ爾後公判ノ手續順序ヲ講説スルヲ待テ之ヲ明カニス可シ但茲ニ
一言ス可キハ凡ソ判事若クハ裁判所ハ自カラ審査ノ十分行届キタル
ヤ否ヤチ思認スル職權アルカ故ニ若シ事實發見上必要ナリト思料ス
ル時ハ總テ法律ニ背反セサル限りハ證憑集取ノ處分ヲ爲スコトヲ得可
シ例ヘハ第百八十八條第百八十九條第百九十七條第百三十八條等

辯論

ニ記載スル處分ノ如キ是ナリ
 裁判所諸般ノ證憑ヲ取調ヘ終リタル時ハ原被告ノ間交々辯論ヲ爲ス
 可シ而シテ辯論ハ先ツ原告即チ檢事及ヒ民事原告人ヨリ證憑ニ據リ犯
 罪及ヒ損害ノ成立情狀并ニ被告人ノ責任及ヒ其程度ヲ證明スルカ爲
 メノ供述ヲ爲シ續テ被告人ヨリ犯罪及ヒ損害ノ不成立又ハ自己ノ無
 責任及ヒ其程度ニ付テノ供述ヲ爲スニ在リ要スルニ辯論トハ被告事
 件ニ付キ原被双方各自ノ目的ヲ達センカ爲メニ爲ス所ノ攻撃辯護ノ
 陳述ヲ云フナリ

辯論ニ
アリ

辯論ニ二アリ一ニ曰ク事實上ノ辯論ニ二曰ク法律上ノ辯論是ナリ而
 ノ其第一ノモノハ犯罪ノ有無及ヒ加重減輕ノ模様等總ヘテ事實ニ關
 スル辯論ヲ云ヒ第二ノモノハ法律ノ適用ニ關スル總テノ辯論ヲ云フ
 (第二百十八條第二百二十條參看)而シテ其順序タル先ツ事實上ノ辯論終
 結シテ始メテ法律上ノ辯論ヲ爲ス可キモノ蓋事實アリテ始メテ法律

辯護權ハ
何人ニ屬
スル乎

ノ適用アルヲ以テ此ヲ先ニシ彼ヲ後ニスルハ序次上固ヨリ當然ノ事
 タリ其他供述及ヒ辯論ハ總テ原告ヨリ被告ニ及フ等ノ規定アリト雖
 凡復茲ニ喋々スル必要ナカル可シ
 辯論ノ事ニ付キ特ニ解説ヲ要ス可キモノ唯辯護權アルノミ抑人ノ攻
 撃ヲ受ケテ自カラ之ヲ辯護スルハ其身体ニ對スル名譽ニ對スルト將
 タ財産ニ對スルトヲ問ハス最モ貴重ノ人權ナリ蓋檢事カ公訴權ヲ行
 ヒ彈劾ヲ爲スヤ實ニ社會ノ秩序ヲ維持スルカ爲メニ外ナラス故ニ其
 犯人ノ法網ヲ脱スルコトナカランカ爲メニハ須ラク被告人ニ對シテ論
 難攻撃ノ正確嚴密ナル可キハ固ヨリ論ヲ竣タス苟クモ然ラサレハ能
 ク懲罰ノ功ヲ奏スルコトナカル可ケレハナリ然リト雖凡ソ公訴ハ既
 ニ屢々縷述セルカ如ク素ト非常ノ事ニ關スルヲ以テ藉シ一步事實ノ
 認取ヲ錯リ一點法律ノ適用ヲ誤ルハハ翅ニ被告人ノ損害ヲ醸出スル
 ノミナラス舉家非理ノ汚辱ニ悲泣スル慘狀ヲ演スルコトナシト云フ可

ラス今誤テ無辜ノ人ヲ罰シタリトセンニ是レ豈ニ一身一家ノ損害ニシテ止マンヤ法律ハ爲メニ汚サレ秩序ハ爲メニ紊レン社會ノ不幸焉ヨリ甚シキハ莫シ是以テ辯護權ハ徒ニ之ヲ被告人ノ專有ニ歸セシメス社會モ亦之ヲ抱有セリト云ハサル可ラス夫ノ立法者カ被告人ヲシテ辯護權ヲ容易ニセシメンカ爲メ設ヒ兇惡非道ノ所爲アル嫌疑者ト雖モ公廷ニ在テハ毫モ身体ノ拘束ヲ受クルヲ無ク自由ニ辯論ヲ爲スヲ得ル法ヲ定メタルモ亦皆此レニ是レ職由セサルハナシ

辯護權ノ
行用ヲ容
易ニシタ
ル規定

立法者カ被告人ノ辯護權ヲ行用スルニ容易ナラシメテ欲シテ規定シタルモノ祇ニ前段述フル所ニ盡キス即チ被告人ニ對スル呼出狀ニ被告事件ノ記載ヲ要シ若シ其記載ナキ場合ニ於テ被告人未ダ其事件ニ付キ取調ヲ受ケサリシキハ辯護準備ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得可ク又呼出狀ノ送達ト出頭トノ間ニハ少ナクトモ二日ノ猶豫ヲ要スル等ノ規定アリ(第二百十四條第二百十五條第二百三十六條)又重罪

ノ被告事件ニ在テハ開廷前裁判長又ハ受命判事ニ於テ一應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ等ノ規定(第二百三十七條)アル所以ナリ

輕罪即決
法

佛國ニテハ千八百六十三年以來英國ノ制度ニ倣ヒ即決法ヲ採用セリ即チ竊盜又ハ毆打犯等ノ如キ通常輕罪ノ現行犯人ニシテ捕ニ就キタル時ハ直チニ之ヲ檢事ニ引致シ檢事ハ一應之レカ訊問ヲ爲シタル上事簡易ニシテ即決ニ付ス可キモノト思料シタル時ハ公益及ヒ私益ノ爲メ直チニ之ヲ公判ニ付シ若シ又即日公判ヲ開キ得サル時ハ之ヲ其翌日ノ公判ニ付スルノ法ナリ蓋即決法ノ事タル上來述フル所ノ猶豫ヲ與ヘス急速判決ヲ爲スヲ以テ辯護權行用上寢宜キヲ得サルモノアルカ如シト雖モ抑現行犯ノ如キ其犯蹟殊ニ顯著ナルノミナテス限ルニ輕罪中ノ最モ簡易ナル事件ト云フヲ以テスルカ故ニ一ニハ被告人未決勾留ノ日數ヲ減シ二ニハ國幣ノ費用ヲ除ク利益アリテ爲メニ毫

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告ヲ強テ出頭セシムル所以如何

被告人疾病ニ因リ出頭スルヲ能ハサル

モ被告人ノ利益ヲ害スルヲ無シ實ニ公益ト私益ト共ニ其宜キヲ得タルモノト云フ可シ本邦ニ在テモ區裁判所ニ於テハ同上ノ理由ニ因リ即決法ヲ採用シ實地ニ之ヲ當行スル裁判所アル可シ余カ被告人呼出ニ猶豫ヲ置キタル法ヲ説テ辯護權ノ行用ヲ容易ニスル相定ノ一ナリト云ヘルモノ固ヨリ毫モ相戾ラサルヲ知ラサル可ラス又禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ヲ強テ出頭セシムル規定モ亦彼ヲシテ十分辯論ヲ爲サシメ事實ヲ得ント欲スル趣旨ニ外ナラス而シテ被告ハ徒ニ公廷ニ出ツルヲ以テ未タ足レリトセス須ラク辯護ノ權ヲ十分ニ行用シ得可キ精神若クハ狀體ヲ以テ出頭スルヲ要ス是レ第百八十三條初項ニ「被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキハ云々」ト云ヘル所以ナリ此第百八十三條ノ規定ニ付テハ少シク解説ヲ要スルモノアリ即チ被告人ノ精神錯亂又ハ疾病ニ因リ辯論スルヲ能ハサル場合ニ於テハ必

ル場合ニ於テ如何ニ處分ス可キ乎

ス醫師ノ診斷ニ因リ之ヲ檢定シタル上其處分ヲ決セサル可ラス但疾病就中精神錯亂ノ事タル果ノ其然ルヤ否ヤ醫師ト雖モ時ニ之ヲ確認スルヲ能ハサル場合ナシトセサルカ故ニ尙シ其レ等確認スルヲ能ハサル場合ニ於テハ須ラク其辯論ヲ停止ス可キモノナル可シ又尋常疾病ノ場合ニ於テ強メテ出頭セントスレハ敢テ之ヲ爲シ能ハサルニ非サルモ然カモ十分ノ辯論ニ堪ユ可ラサル診斷アリタル時ハ即チ亦疾病ニ因リ出頭スルヲ能ハサル者ト解シテ可ナラン要スルニ出頭スルヲ能ハサル者トハ出頭シテ辯論ヲ爲スヲ能ハサル者ト認ム可ケレハナリ

辨論ニ着手シタル後被告人精神錯亂ニ因リ辯論ヲ停止シタル時如何

若シ既ニ辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル片ハ如何此場合ニ於テハ其以前ニ爲シタル辯論ハ總テ之ヲ空無ト看做シ其痊癒ヲ待テ新ニ辯論ヲ爲ス可キモノトス蓋或種ノ精神錯亂者ハ以前ノ事柄ヲ全ク遺忘シ新ニ世ニ生出シタルカ如キ者アリト云ヒ又設ヒ其種ノ錯

他ノ疾病ニ因リ辯論ヲ停止シタル時ハ如何

亂者ニ非サルモ爲メニ辯論ノ序次ヲ遺忘シ自ツカラ辯論上ニ盡サル所アル可キノ虞アルヲ以テナリ
他ノ疾病ニ因リ辯論ヲ停止シタル時ハ其停止ノ時間五日ヲ經過スルカ又ハ未ダ五日ヲ經過セサルモ檢事其他訴訟關係人ノ請求アル場合ニ非サレハ裁判所ハ前キニ停止シタル以後ノ手續ヲ繼續スルノミ新ニ最初ヨリノ辯論ヲ爲サシムルヲ要セサルモノトス是レ五日間停止シタル場合ニ非サレハ概シテ以前ノ手續ヲ遺忘スルヲナシト看做セハナリ

第百八十三條ニ云ハル辯論ノ意義

爰ニ一ノ注意ヲ要スルモノアリ第百八十三條ニ所謂「辯論」ノ語ハ些カ修正シテ讀マサル可ラサルト是ナリ蓋被告人ノ精神錯乱又ハ疾病ニ因リ公判中停止ス可キモノハ實ニ事實上及ヒ法律上ノ辯論ノミニアラスシテ即チ夫ノ被告人訊問ハ勿論證人訊問及ヒ豫審ノ訊問調書檢證調書ノ朗讀等凡テ辯論ニ關係アル公判ノ手續ハ總テ之ヲ停止セザ

被告人ノ精神錯乱ハ公訴權ノ執行ヲ停止スルニ足ル乎

ル可ラサレハナリ(第百九十八條參觀)但被告人精神錯乱シタル場合ノ如キ被告人ノ訊問ヲ停止セサル可ラサルハ實ニ公判ニ於テ然ルノミニアラス豫審ニ於テモ亦同様ナリトス
學者或ハ被告人ノ精神錯乱シタル場合ヲ以テ公訴權ノ執行停止(即チ中止)ノ場合ト爲ス者アリト雖モ余ハ之ヲ採ラス抑被告人ノ精神錯乱(犯罪ノ後之ヲ發シタル者ト假想セサル可ラサルヲ勿論ナリ何者然ラサレハ其所爲ハ元來罪ト爲ラサレハナリ)ハ第百八十三條ノ精神ニ於ケルカ如ク單ニ辯論即チ公判ノ手續及ヒ豫審ニ於ケル被告人訊問ヲ停止ス可キノミニシテ敢テ公訴權ノ執行ヲ停止ス可キモノニ非スト信スレハナリ去レハ余ハ實ニ檢事及ヒ被害者ニ於テ其被告人ニ對シ時効中斷ヲ目的トシテ起訴ノ手續ヲ爲スヲ得可キノミナラス豫審判事ハ其被告事件ニ關スル證憑ヲ集取シ總テ豫審ノ處分ヲ行フヲ得可ク檢事ハ其必要ナリトスル處分ニ付キ隨時豫審判事ニ請求ヲ爲

罰金以下
ノ刑ニ該
ル可キ破
ル人精神
錯乱其他
疾病ニ因
リ病ヲ出
スルハ何
能ハサル
時ハ如何

スヲ得可シト言ハンノミ蓋其然ル所以ノモノハ他ナシ此等ノ處分
ハ元來社會ト被害者及ヒ被告人トニ利益アリテ敢テ被告人辯護ノ權
ニ傷害ナキニ由ル而シテ豫審ノ處分ハ單ニ有罪ノ証憑ヲ集取スルニア
ラスシテ被告人ノ利益ト爲ル証憑ヲモ亦同時ニ之ヲ集取スルモノタ
ルヲ余既ニ之ヲ告ケタリ
大凡辯護ノ權ハ被告事件ノ違警罪タルト輕罪タルト將タ重罪タルト
ヲ問ハス齊シク之ヲ行用シ得可キヲ固ヨリ論ヲ竣タス然レモ其事件
ノ違警罪ヨリ輕罪輕罪ヨリ重罪ト罪質ノ漸ク重大ナルニ從ヒ其行用
ニ關スル規定モ亦更ニ密ナルモノアリ而シテ今罰金以下ノ刑ニ該ル可
キ被告人精神錯乱又ハ疾病ニ因リ躬カラ出頭スルヲ能ハサル者アリ
トセンニ元來罰金以下ノ刑ニ該ル可キ被告人ハ代人ヲシテ出頭セシ
ムルヲ得ル者ナルカ故ニ其規定ヲ推及シテ之ヲ論スルハ此場合
ニ於テハ敢テ公判ノ手續ヲ停止スルニ及ハサルカ如シ蓋此問題ヲ決

センニハ須ラク區別セサル可ラス即チ精神錯乱ノ場合ニ於テハ其發
作ノ辯論着手前タルト將タ後タルトニ拘ラス又其既ニ代人ヲ撰定シ
タルト否トニ拘ラス必ス公判ハ之ヲ停止セサル可ラス何者設ヒ代人
ヲ撰定シタリトテ被告人ノ精神錯乱シタル時ハ其以前ニ爲シタル代
理契約ハ當然解除セラレハモノニシテ又其錯乱ノ辯論着手後ニ係ル
時ハ被告人ハ元來契約ヲ爲ス能力ナケレハナリ而シテ又他ノ疾病ノ場
合ニ於テハ更ニ再別シテ之レニ答フルヲ要ス乃チ躬カラ出頭スル
ヲ能ハサルモ若シ代人ヲシテ出廷セシメタル者ハ其躬カラ出頭スル
ヲ能ハサルノ故ヲ以テ公判ノ手續ヲ停止ス可キニ非サルナリ何者其
代人ヲシテ出頭セシメタルニ依リ之ヲ觀レハ則チ躬カラ出頭シテ辯
論ヲ爲ス意ナキヤ得テ徵ス可ケレハナリ況ンヤ代言人ヲ代人ト爲シ
タル場合ノ如キハ出頭ノ意ナキヲ一層著明ナルヲヤ然レモ彼レ代人
ヲ撰定セス醫師ノ診斷書ヲ以テ出頭若クハ辯論ヲ爲シ得サル旨ヲ申

立タル者ノ如キハ其罰金以下ノ刑ニ該ル可キ被告人ナルニ拘ラス其
 痊癒シテ躬カラ出頭及ヒ辯論ヲ爲シ得ルニ至ル迄公判ノ手續ヲ停止
 セサル可ラス何者其躬カラ出頭シテ辯論ヲ爲ス意アルモ事實出頭シ
 得サル情況明瞭ナレハナリ此論結ハ本法之ヲ明言セスト雖モ法理上
 辯護ノ權ヲ貴尊セサル可ラストスル趣旨ヨリ之ヲ論スレハ到底同上
 ノ如ク決定セサルヲ得サルナリ
 辯護權ヲ貴尊スル趣旨ニ出テタル規定上來述ル所ノ外例ヘハ第二百
 二十條ニ於テ被告人又ハ辯護人ヲシテ最終ニ發言セシムルカ如キ又
 第八十二條末項ニ於テ被告人公廷ニ於テ審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行
 狀ヲ爲シタルカ爲メ裁判長ヨリ退廷ヲ命セラレタル場合ニ於テモ若
 シ辯護二日以上ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出頭セシムルカ如キ等ノ規
 定アリ但此場合ニ於テハ被告人公廷ヲ退ケラレタル處分ニ懲怛シ次
 日ニハ復タ前日ノ如ク審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲サ、ル可シト

辯護權ハ
 他人ヲシ
 テ之ヲ行
 用セシム
 ルヲ得

法律上推測シテ然ルモノナル可キモ要スルニ辯護權ヲ貴尊スル趣旨
 ニ出テタルヲ余ノ少シモ疑ハサル所ナリ
 夫レ辯護權ハ本法ニ於テ之ヲ貴尊スルヲ以上解説スル所ノ如シ而シ
 被告人ハ自カラ之ヲ行用スルヲ得ルノミナラス又他人ヲシテ之ヲ
 行用セシムルヲ得ルナリ其被告人ノ爲メニ權ヲ伸ベ理ヲ争フ者之
 ヲ稱シテ辯護人ト云フ辯護人ハ被告事件ノ輕罪タリ違警罪タルニ拘
 ラス被告人ニ於テ之ヲ委任スルヲ得可シ而シテ其被告事件重罪ニ係
 ルキハ必ス辯護アルヲ要ス故ニ若シ被告人ニ於テ辯護人ヲ選任セ
 サルキハ裁判長ハ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任
 ス可シト爲ス(第三百三十七條)抑辯護人ヲ選任スル事タル之ヲ大ニシ
 テハ生命之ヲ小ニスルモ仍ホ身体名譽若クハ財産ニ至大至重ノ關係
 ヲ有スル訴訟ナルヲ以テ其所在ノ如何ヲ問ハス常ニ適任者ヲ撰任セ
 サルヲ得ス然ルニ第七十九條ノ所定ニ據レハ其裁判所所屬ノ辯護

士中ヨリ之ヲ選任ス可シト制限シタルハ果シテ何等ノ理由ニ職由スル
 カ余ノ少シク疑フ所ナリ蓋東京大坂ノ如キ土地ニ在テハ格別僻遠代
 言人員ノ甚タ多カラサル地ニ在テハ學識ト經驗トニ富ミ尙ホ且剛毅
 直實ノ人ヲ得ルニ難キ場合ナキニアラサル可ケレハ寧ロ之ヲ制限セ
 サルノ愈レルニ若カスト思惟セラル、ナリ但法律ハ此制限ヲ爲シタ
 ル後直チニ裁判所ノ允許ヲ得ルルハ辯護士ニ非サル者ト雖モ辯護人
 ト爲スヲ許シタルヲ以テ之ヲ觀レハ其裁判所ノ所屬ニ非サル辨護
 士ト雖モ右ノ允許ヲ得テ之ヲ撰任スルコトヲ得可ク而シテ裁判所ニ於テ
 モ亦容易ニ之レカ允許ヲ與フルコトニ注意スルルハ庶幾クハ實際ニ支
 障ナカル可キ歟唯タ一ハ直チニ撰任ヲ爲シ得ルモ一ハ裁判所ノ允許
 ヲ受クルノ手續ヲ要スル別アルノミ而シテ裁判所所屬ノ辨護士トハ即
 チ大審院及ヒ各裁判所所在地ニ住居スル辨護士ヲ指稱シタルモノナリ
 一旦訊問ヲ訖リ辯論ニ取掛リタル時ト雖モ尙ホ檢事其他訴訟關係人

一タヒ審
 問ヲ訖リ

既ニ辨論
 ニ取掛リ
 タル時ハ
 更ニ審問
 スルコト
 ハサル乎

ヨリ請求アリタルカ又ハ裁判所ニ於テ必要ト思料スル時ハ職權ヲ以
 テ更ニ事實上ニ付キ訊問ヲ爲スヲ得ルノミナラス既ニ事實上ノ辯
 論ヲ訖リ法律上ノ辯論ニ取掛リタル場合ト雖モ事實發見ノ爲ノ必要
 ナリト認めタルハ裁判所ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ
 職權ヲ以テ新タニ被告人證人等ノ訊問ヲ爲シ及ヒ事實上ノ辯論ヲ爲
 サシムルコトヲ得可シ其然ル所以ノモノハ蓋適當ナル判決ヲ下サンニ
 ハ先ツ其事實ヲ明カニシ依テ以テ曲直當否ヲ判別スルノ根本ヲ定メ
 サル可ラサルコト論ヲ煥タサレハナリ但事實ノ審問訖リテ而シテ事實ノ
 辯論アリ事實ノ辯論訖リテ而シテ法律ノ辯論アル可キコト素ト審査上ノ
 順序ナレハ可及的此順序ニ循據セサル可ラサルコト勿論ナリト雖モ唯
 余ガ茲ニ解説シタル所ハ此順序ノ故ヲ以テ彼ノ必要の取調及ヒ辯
 論ヲ抛擲ス可ラスト云フニ在ルノミ

判決

判決

義判決ノ意

判決トハ何ソ之ヲ汎博ノ意義ニ取レハ則チ裁判所ニ於テ其認定ス可
 キ點ニ付キ與ヘタル都テノ裁判決定ヲ指稱スルニ在リ故ニ例ヘハ第
 百八十五條ニ記載スル管轄違又ハ公訴受理ス可ラサル裁判言渡ノ如
 キ又ハ被告人ノ有罪無罪ニ付キ判決ヲ爲スカ如キ孰レモ所謂判決ニ
 非サルハ莫シ然リ而シテ本法中ニハ尙ホ裁判又ハ判決言渡等ノ語第百
 九十九條第二百五十二條其他ニモ往々散見スルト雖モ要スルニ裁判
 ト言ヒ判決ト言フモ別ニ意義上ノ區別アルヲ無シ更ニ之ヲ悉言スレ
 ハ其裁定ス可キ事項ト場合トニ因リ彼レハ裁判ト言ヒ此レハ判決ト
 言フカ如キ各別ノ意義ヲ有セサルナリ但本法ニ於テハ本案即チ罪ノ
 有無ヲ裁定スルニ非サル場合例ヘハ豫審終結ノ處分ノ如キハ概シテ
 之ヲ決定ト云ヘリ
 判決言渡ノ語ニ於テモ亦全シ或ハ單ニ裁判若クハ判決ト謂ヒテ敢テ
 支障ナキ場合ニ之ヲ使用シタルヲアリ例ヘハ前掲第二百五十二條ニ

言渡トハ何ソ

記載スルモノ、如シ
 又言渡ノ語或ハ豫審判事カ豫審終結ヲ告クル名稱ト爲リ(第百六十五
 條以下參看)或ハ裁判ト言渡トヲ包含スル語トシテ使用セラレタル場
 合アリ例ヘハ第百八十六條末項第二百一條初項等ノ如シ或ハ裁判所
 又ハ裁判長若クハ判事ヨリ爲ス手續上若クハ處分上ニ關スル陳告ヲ
 指稱スル場合アリ例ヘハ第百十八條第百五十六條等ノ如シ或ハ裁判
 即チ判決ノ意義ヲ以テ之ヲ使用シタル場合アリ例ヘハ第三百一條第
 三百十九條等ニ於テ刑ヲ言渡シタル判決(又ハ裁判)云々ト言ハスシテ
 單ニ刑ノ言渡云々刑ノ言渡確定云々ト言ヘルモノノ如シ
 夫レ本法ニ於テ或ハ裁判ト云ヒ或ハ判決ト云ヒ言渡ト云フモ其表章
 スル事項ト場合トヲ異ニスルモノアルヲ以上舉示スル所ノ如シ然レ
 モ此等ノ成語ハ何レモ其本義ヲ明了ニシテ其用所ヲ嚴密ニセハ各語
 ニ其固有ノ意義ヲ有セシムルヲ得テ解釋上紛雜ヲ避クル利便アル

可シト思惟スルナリ

判決ノ種類

余ハ是ヨリ諸多ノ判決ヲ配置シテ其性質及ヒ種類ヲ詳ニス可シ

第一 本案ノ判決及ヒ附帶ノ判決

本案ノ判決トハ何

本案ノ判決トハ即チ其被告事件ヲ現ニ受理シタル裁判所カ被告事件

其者即チ被告事件ノ本體ニ付キ爲ス所ノ判決ニシテ若シ一タビ此判

決ヲ爲シタル時ハ即チ裁判所ニ於テ其事件ヨリ脫離スル判決ヲ云フ

ナリ例ヘハ裁判所ニ於テ被告事件ニ付キ刑ヲ言渡ス判決又ハ無罪若

クハ免訴ヲ言渡ス判決ノ如シ然レモ夫ノ管轄違又ハ公訴受理ス可ラ

サル申立ヲ棄却スル言渡ハ之ヲ本案ノ判決ト云フ可ラス何者其管轄

違又ハ公訴受理ス可ラサルノ申立ヲ棄却スルハ即チ其裁判所ニ於テ

自カラ管轄ナリ受理ス可キモノナリト宣言スルノミニシテ其被告事

件ノ本體ニ付キ裁決スルモノニ非ス且其言渡ニ依テ被告事件ヨリ脫

離セサレハナリ但第百八十六條ニ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ管

終局判決トハ何

轄違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲ爲スヲ得ト云ヘル文詞ニ依
テ之ヲ觀ルモ本案即チ被告事件ノ本體ニ付キ判決アルマテハ管轄違
又ハ公訴受理ス可ラサル旨ヲ申立テ其申立ニ對スル言渡ヲ得ルニ因
テモ之ヲ知ルヘキナリ尤モ公訴受理ス可ラサル申立アルニ依リ免訴
ノ言渡ヲ爲シタルハ即チ本案ノ判決アリトス

右本案ノ判決及ヒ管轄違又ハ公訴受理ス可ラサル申立ヲ棄却スル言
渡并ニ余カ後ニ示ス所ノ豫判判決ヲ汎稱シテ之ヲ終局判決ト云フ蓋
終局判決トハ即チ其事件ノ本案タリ又ハ本案タラサルニ關ラズ只其
判決ス可キ事項ニ對シ裁判所ニ於テ與ヘタル裁決即チ結局ノ處分ヲ
云ヘルモノナリ故ニ本案判決ハ常ニ終局判決ナリト雖モ終局判決ハ
必シモ本案判決ニアラス而シテ終局判決(本案)ノ彼ノ確定判決ト同視ス
可ラス他ナシ本案ノ終局判決ハ其判決ヲ爲シタル裁判所ニ於テハ其
訴訟事件ノ終局ヲ告ケタリト雖モ之ニ對シ他ノ上級裁判所ニ上訴ス

附帶ノ判決トハ何

ルコトヲ得可シ之ニ反シテ確定判決ハ概ニ其判決ヲ爲シタル裁判所ニ於テ訴訟事件ノ終局ヲ告ゲタルノミナラス孰レノ裁判所ニ於テモ亦彼ノ非常ノ場合即チ再審及ヒ非常上告ノ場合ヲ除ク外再ヒ其事件ヲ裁判所ニ提出スルコトヲ得サルモノナレハナリ其他執行等ニ付キ此二者ノ間ニ存スル差異ハ余必スシモ茲ニ之ヲ言ハス

- (一) 豫審判決
- (二) 假定判決
- (三) 豫判判決
- (四) 純粹ノ附帶判決

是ナリ而シテ茲ニ先ツ豫シメ告ゲ置ク可キハ法律上此等ノ用語アルニ非ス余ハ唯タ歐州學者ノ鑿ニ倣ヒ之ヲ前掲數者ニ區別シ以テ講學上

豫審判決トハ何ソ

ノ便ヲ攬ルノミ
豫審判決トハ何ソヤ曰ク被告人ノ訊問若クハ對質又ハ書類ノ提出ヲ命スル言渡ノ如キ是ナリ蓋此種ノ判決ハ都テ本案ノ審査處分ニ關シテ爲ス所ノモノニシテ彼レ公判ニ對スル豫審ニ異ナリ茲ニ所謂豫審判決トハ即チ本案ノ判決ヲ爲スニ須要ナル審査ヲ命スル判決換言スレハ本案ノ判決ヲ爲スニ支障ナキ様豫メ證據取調ヲ爲スニ付テノ言渡ヲ云フ故ニ豫審判決ト云ハスシテ之ヲ準備判決ト云フ或ハ允當ナラン歟

民事上豫斷判決ハ如何ナル乎

民事ニ關シ豫斷判決ナルモノアリ亦是レ本案ノ審査處分ニ關シタル判決ナリト雖モ要スルニ豫審判決トハ似テ非ナルモノナリ余ハ今茲ニ一例ヲ舉示セン
例ヘハ原告ヨリ被告ニ對シ宣誓ヲ爲サンコトヲ催シ而シテ裁判所ニ於テ被告ニ宣誓ヲ爲ス可キコトヲ命スル言渡ノ如キ即チ所謂豫斷判決ナル

モノナリ
 此二箇ノ判決ノ大ニ相異ナル點ハ歸スル所豫審判決ハ純然タル審査處分ニ關スル判決ニシテ即チ單ニ本案ノ判決ニ至ルカ爲メ必要ナル審査ヲ命スルニ過キサルモ豫斷判決ハ則チ然ラス前者ト同シク本案ノ判決ニ至ルカ爲メ必要ナル審査ヲ命スルモノナルニ關ラス其命スル所ノ言渡ニ依リ以テ豫シメ本案判決ノ方嚮ヲ端倪セシムルニ足ルモノナリ今試ニ前例ニ依リ更ニ之ヲ詳解セシニ若シ宣誓ヲ求メラレタル被告ニ於テ其宣誓ヲ爲スコトヲ拒ミ若クハ之ヲ原告ニ反求セサル時ハ被告ハ必ス敗訴者タル可キ民事上宣誓ノ本義ニ因リ其本案ノ判決ヲ竣タスシテ固ヨリ之ヲ推知シ得可キナリ依此觀之豫斷判決ノ語ノ由來寔ニ偶然ニ非サルヲ知ル可キナリ(佛國民法第千三百六十一條參看)

本法ニ於テハ豫審

刑事ニ在テハ豫斷ノ性質ヲ有スル審査及ヒ判決ハ佛國ニ於テモ彼レ

判決ト豫
 斷判決ト
 ナル區別
 シタル乎

民事ニ於ケルカ如ク之レアルコトナシ而ノ本法ニ於テハ別ニ豫審判決ト豫斷判決トヲ區別スル利益ヲ有セス蓋元ト此二者ヲ區別スル利益ハ專ラ下ノ一事ニ在リ即チ豫審判決ニ對シテハ本案ノ判決アリタル後其本案ノ判決ニ對スル上訴ト共ニ之ヲ爲スニ非サレハ則チ上訴ヲ爲スコトヲ得サルモノトシ豫斷判決ニ對シテハ本案ノ判決ヲ待タス直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得可シト爲ス是ナリ抑此二者ノ間ニ同上ノ區別ヲ劃シタルハ畢竟一ハ豫シメ本案ノ判決ヲ端倪シ得ルモ一ハ則チ之ニ反スル理アルヲ以テナリ然リ而ノ第九十九條ニ從ヘハ辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ云々ト云ヒテ其申立ニ付テノ裁判ニ對シテハ直チニ抗告其他ノ上訴ヲ爲スコトヲ許シタルコトナケレハナリ
 刑事ニ在テハ審査處分ニ關スル裁判ニ對シテハ概シテ本案ノ判決アリタル後ニ非サレハ之レカ上訴ヲ許サス是レ他ナシ若シ總テ審査處

分ニ關スル判決ニ對シ直チニ上訴スルヲ許スルハ或ハ訴訟ノ進行ヲ妨礙スル意思ノミヲ以テ元來其正當ナラサル上訴ナルヲ知リツツ上訴ヲ敢テスル者ナキヲ保セス苟クモ如斯ナレハ獨リ社會ノ損害ノミナラス被告人ノ不利益ナルヲ更ニ論ヲ煥タサレハナリ加旃ナラス刑事ニ於テ彼レ民事ニ於ケルカ如ク上訴ノ點ニ付キ豫審判決ト豫斷判決トヲ區別スル理由ナキハ开モ刑事上探証ノ事タルニ判事ノ心証ニ放任スルヲ第九十條ニ明言スル所ニシテ固ヨリ法定ノ推測即チ法律ヲ以テ判事ヲ拘束シ得キ證據ナケレハ設ヒ法律上豫斷ノ性質ヲ有スル審査處分ニ關スル判決アルモ之レアルカ爲メ本案ノ判決上秋毫ノ影響アル可ラサルニ緣ルナリ

然リ而ノ第九十九條辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立云々所謂公判ノ手續トハ重モニ審査ノ手續即チ證人訊問若クハ鑑定ノ手續又ハ同一ノ被告人ニ對スル二箇以上ノ事件ヲ附帶事件トシテ之ヲ併合

シ若クハ分離スル手續其他此種ニ屬スル手續ヲ汎稱シタルモノナリ而シテ凡ソ公判中審査及ヒ辯論ノ手續ニ關シ異議ノ申立アリタルハ裁判所ニ於テハ必ス之ヲ裁判セサル可ラス是レ其手續ノ違背ニ付キ無効ノ制裁明記シアル場合ト否ラサル場合トヲ問ハサルナリ但異議ノ申立ニ付キ裁判ヲ與ヘントスルハ必ス先ツ檢事ノ意見ヲ聽クノ要ス其他手續ノ細節ハ余必スシモ之ヲ茲ニ言ハス

本案ノ判決又ハ總テ終局判決ト審査判決即チ豫審判決トヲ區別スル利益ハ實テ上訴ノ場合ニ在リ此事ニ付テハ爾後上訴ヲ講スルニ當リ解説スル所アル可シト雖モ今茲ニ其一ヲ舉示ス可シ即チ本案ノ判決ニ對シテハ直チニ上訴ヲ爲シ得ルト雖モ豫審判決ニ對シテハ本案ノ判決後ニ非サレハ之レカ上訴ヲ許サ、ルヲ是ナリ

假定判決トハ何ヲカ云フヤ曰ク審査中訴訟人ノ便益ノ爲メ假リニ或ル處分ヲ命スル言渡是ナリ例ヘハ被告人ノ請求ニ因リ保釋ヲ許シ又

假定判決トハ何ソ

ハ被告人ヲ責付スル言渡ノ如シ而シテ公判中勾留ヲ受ケタル被告人ハ保釋又ハ責付ヲ請求スルコトヲ得可ク裁判所モ亦已レノ職權ヲ以テ責付ヲ爲シ得可キナリ

豫判判決トハ何ソ

豫判判決トハ何ヲカ云フヤ曰ク本案ノ判決前豫シメ之ヲ判決スルニ非サレハ則チ本案ノ判決ハ到底之ヲ爲シ得可ラサル必需的ノ事件ニ付テノ判決是ナリ例ヘハ竊盜ノ被告事件ニ於テ被告人ヨリ其贓物ト指稱セラル、物品ハ自己ノ所有物ニ属スルモノタルコトヲ主張シタル時、又ハ重婚ノ被告事件ニ於テ被告人ヨリ其前婚ハ元來成立シタルモノニ非サルコトヲ主張シタル時ハ先ツ其物品ノ所有權ハ果シテ被告人ニ属スルヤ否ヤヲ判決セサル可ラス又其前婚ハ眞ニ成立セザリシモノナルヤ否ヤヲ判決セサル可ラス然ラサレハ則チ眞ニ人ノ所有物ヲ竊取シタル者ナリ重婚ヲ爲シタル者ナリト判決スルコトヲ得サル可シ否ナ實ニ罪ノ有無ハ豫判判決ノ如何ニ依テ幾ンド定マルモノト謂フ可

シ是レ之ヲ判決セサレハ則チ本案ノ判決ハ到底之ヲ爲シ得可ラサル必需的ノ事件ナリトスル所以ナリ

然リ而シテ本法中特ニ豫判事件ニ關スル條項ヲ規定セス舊治罪法ニ於テハ唯繼ニ其第三百五十六條ニ三日内ニ非サレハ判決ニ對スル故障ヲ爲スコトヲ得サル場合ノ一トシテ被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時ト云ヘリ該條ニ所謂豫メ裁判ス可キ事件トハ即チ是レ豫判事件ヲ指稱シタルモノニシテ此種ノ申立ニ付テノ判決ハ即チ豫判判決ナリ而シテ學者或ハ此本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ノ申立トアルヲ解釋シテ管轄違又ハ公訴受理ス可ラサル旨ノ申立ナリト云ヘリ然レモ是レ恐ラク正鵠ヲ得タル者ニ非サル可シ如何トナレハ訴訟人ヨリ管轄違又ハ公訴受理ス可ラサル旨ノ申立ヲ爲シ裁判所ニ於テ其申立ヲ正當ナリト認メ管轄違ナリ又ハ公訴受理ス可キ限リニアラサルナリトノ言渡ヲ爲シタル時ハ是レ即チ受理シタル事件

ニ付テ判決ヲ爲ス者ニシテ爾後其裁所判ニ於テ復ビ本案ノ判決ヲ爲スモノヨアラサレハナリ語ヲ換ヘテ言ヘハ其言渡ニ因リ其裁所判ハ被告事件ヨリ當然脱離ス可キカ故ニ其言渡ハ爾後更ニ爲ス可キ本案ノ判決アルカ爲メ豫メ判決シタルモノナリト云フコト能ハサレハナリ

然リト雖モ豫判判決ヲ爲ス可キ事件ハ之ヲ爲サレハ便チ本案ノ判決ヲ爲シ得可ラサルカ故ニ豫判判決ハ本案ノ判決ニ影響ヲ與フルコト亦甚タ大ナリ去レハ本法別ニ明文ノ準據ス可キモノナシト雖モ此場合ニ於テハ本案ノ判決アルヲ待タス直チニ上訴ヲ爲シ得可シト決定セサルヲ得サル可シト信スルナリ

純粹ノ附帶判決トハ何ヲカ云フヤ曰ク本案事件ノ審査ニ關スル判決ニ非サルモ然カモ本案事件アリテ而シテ之レアルモノナリ例ヘハ忌避若クハ回避ノ申請ニ付テノ裁判ノ如シ而シテ本法ニ於テハ其裁判ニ對

純粹ノ附帶判決トハ何ソ

第一審及第二審ノ裁判ハ何ソ又別利益アリヤ

シテハ何等ノ上訴ヲ爲スコトヲ許サルナリ

第二 第一審ノ判決及ヒ第二審ノ判決

控訴ヲ以テ攻撃スルコトヲ得可キ判決之ヲ第一審ノ判決ト云ヒ控訴ヲ以テ攻撃スルコトヲ得可ラサル判決之ヲ第二審ノ判決ト云フ故ニ此二種ノ判決ヲ區別スル利益ハ要スルニ左ノ一事ニ過キサル可シ

第一審ノ判決ハ控訴ヲ以テ之ヲ攻撃スルコトヲ得可キモ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得ス之ニ反シテ第二審ノ判決ハ控訴ヲ以テ之ヲ攻撃スルコトヲ得サルモ然カモ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得可シ

去レハ區裁判所ニ於テハ違警罪及ヒ裁判所構成法第十六條第二號第三號ニ記載スル輕罪ニ付キ第一審ノ判決ヲ爲スカ故ニ其判決ニ對シテハ控訴ヲ爲シ得ルモ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得ス又地方裁判所ニ於テ區裁判所ノ權限ニ屬スル以外ノ輕罪及ヒ重罪ニ付キ第一審ノ判決ヲ爲シ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付キ第二審ノ判決ヲ爲スカ故

ニ其第一ノ場合ニ於テハ控訴ヲ爲シ得可キモ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得ス第二ノ場合ニ於テハ控訴ヲ爲シ得サルモ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得可シ又控訴院ノ判決ハ總テ第二審ノ判決ナルカ故ニ直チニ上告ヲ爲シ得可シト雖モ決シテ控訴ヲ爲スコトヲ得サルナリ

第三 假ニ執行スルヲ得可キ判決及ヒ假ニ執行スルコトヲ得可ラサル判決

假ニ執行スルヲ得可キ判決トハ何ソ

假ニ執行スルヲ得可ラサル判決之ヲ通常トシ(第三百十七條)假ニ執行スルコトヲ得可キ判決之ヲ例外トス而シテ所謂假ニ執行スルコトハ即チ判決確定セサル以前其判決言渡ヲ執行スル謂ニシテ假ニ執行スルコトヲ得可キ判決ハ他ノ如ク夥多ナラス例ヘハ豫審判事カ豫審終結ノ決定ト共ニ前ニ被告人ニ許シタル保釋責付ヲ取消ス決定ノ如キ(第七十四條)是レナリ

第四 對席判決及ヒ缺席判決

對席及ヒ缺席ノ判決トハ何

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ被告本人又罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テル可キ事件ニ付テハ被告本人又罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付テハ被告本人若クハ其代人ノ出頭シタル上取調ヲ爲シ判決ヲ言渡ス時ハ被告人若クハ其代人ノ辯論ヲ爲シタルト否トニ拘ラス(第八十二條)其判決ヲ稱シテ對席判決ト云フ若シ又罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ呼出狀ノ送達ヲ受ケタル被告人自カラ出頭セス又代人ヲシテ出頭セシメサル時(第二百二十六條)又ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタル証アルカ若クハ(第二百二十七條)第二項ノ手續ヲ行ヒタルモ被告人仍ホ出頭セサル時ニ於テ通常ノ式ニ循ヒ被告人不在ノマハ取調ヲ爲シ判決ヲ言渡スルハ其判決ヲ稱シテ缺席判決ト云フ

右ニ述ヘタル所ハ被告人ニ對スル缺席判決ナリト雖モ抑、缺席判決ハ當ニ被告人ニ付キ之レアルノミナラス民事原告人又ハ民事擔當人ニ

於テ公判ノ日時ニ出頭セサル時ハ亦此者等ニ對シテ缺席判決ヲ爲ス可キモノトス(第二百二十六條第二項)

總テ缺席判決ヲ爲スニハ被告人ノ利益ト爲リ又ハ不利益ト爲ル可キ證人訊問ハ勿論其他證據徵憑ノ取調ヲ爲シ出頭シタル檢事其他訴訟關係人ノ辯論ヲ聽キタル上ニテ判決言渡ヲ爲ス可キモノトス

○對席判決ト缺席判決トヲ區別シテ果ソ何等ノ益カアル乞フ之ヲ左ニ述ン

- (一) 對席判決ニ對シテハ控訴ヲ爲シ得ルモ故障ヲ爲スコトヲ得ス(第一審ノ判決ヲ想像ス)缺席判決ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ爲スコトヲ得

- (二) 對席判決ニ對スル上訴ノ期間ハ其判決言渡アリタル日ヨリ之ヲ起算シ缺席判決ニ對スル上訴ノ期間ハ本人又ハ其住所ニ判決言渡書ノ送達アリタル時又ハ本人其判決アリタルコトヲ知リ

對席判決
ト缺席判決
ト區別
如何ナル
利益アリヤ

タル日ヨリ之ヲ起算ス(第二百五十二條第二百二十九條)

- (三) 對席判決ニ付テハ孰レノ場合ト雖モ其判決書ヲ送達スルコトナシ缺席判決ニ付テハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ缺席シタル者又ハ其住所ニ判決書ヲ送達ス(第二百二十八條)

此第三ノ差異ヨリシテ第二ノ差異ヲ生スト云フテ可ナリ而シテ對席判決ニ付テハ判決書ノ送達ヲ爲スコトナシト雖モ然カモ判決ノ言渡ノミニテハ其判決ノ詳細ヲ聞取ルコト能ハサル場合アル可キヲ以テ若シ此等ノ場合ニ於テ其判決ノ詳細ヲ了知スル必要アル者ハ自己ノ費用ヲ以テ判決書ノ正本謄本又ハ自己ニ必要ナル部分ノミヲ了知セントスル時ハ抄本ヲ求ムルヲ得可キナリ(第二百六條)元來法律ニ於テハ對席判決ノ場合ニハ現ニ其言渡ヲ聞キテ之ヲ詳悉シタル可シト看做シ別ニ判決書送達ノ手續ヲ定メスト雖モ缺席判決ノ場合ニ於テハ現ニ其言渡ヲ聞キタル者ニ非サレハ法律上其言渡ニ因リ判決ノ詳細ヲ了

知シタル可シト看做スヲ得ス而シテ法律ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ判決書ノ送達ヲ爲ス可キモノト爲シ裁判所ノ職權ヲ以テ其送達ヲ爲ス可シト規定セサル所以ノモノハ他ナシ抑々缺席判決ヲ受ケタル被告人ハ故障ヲ爲シテ其判決ヲ消滅セシムルヲ得ル道アリ加之ナラス其故障ノ期間ハ判決書ノ送達アリタル日ヨリ起算スルモノナルカ故ニ缺席シタル被告人ハ其判決書ノ送達ニ因リテ元來利益ヲ有スル者ニ非ス則チ此送達ニ因リ利益ヲ有スル者ハ只檢事及ヒ民事原告人アルノミ然レハ則チ檢事及ヒ民事原告人ハ其送達ヲ爲スヲ以テ自カラ利益アリト信スル場合ニ於テハ毫モ躊躇スル所ナク進テ其請求ヲ爲スニ怠ラサル可ク其自カラ送達ヲ必要トセス即チ之レカ請求ヲ爲サ、ルニ拘ラス裁判所ノ職權ヲ以テ其送達ヲ爲ス可シト規定スルカ如キハ甚ダ必要ニアラスト做シタルニアルノミ

(四) 對席判決ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ト缺席判決ニ因リ刑ノ

言渡ヲ受ケタル者トハ其時効ノ起算ノ點ヲ異ニス(刑法第六十

一條第六十二條)

以上述フル所ハ即チ對席判決ト缺席判決トヲ區別スル利益ナリ余ハ尙ホ此二箇ノ判決ニ關スル一二ノ事項ヲ解説ス可シ

對席判決ノ言渡ヲ受クル者ハ其言渡ヲ聞クニ因テ之ヲ知ルモノト做シ缺席判決ノ言渡ヲ受クル者ハ其判決書ノ送達ニ因テ之ヲ知ルモノト做ス是レ法律ノ精神ナリ故ニ對席判決ニ依リ刑ノ言渡ヲ受クル者ニハ裁判長刑ノ言渡ヲ爲スト同時ニ言渡判決書ノ正本謄本又ハ抄本ヲ請求スルヲ得ルヲ并ニ其判決ニ對シテハ上訴ヲ爲シ得ルヲ及ヒ上訴ノ期間ヲ告知スルヲ要シ又缺席判決ニ依リ刑ノ言渡ヲ爲スルハ其判決ニ對シ上訴ヲ爲シ得ルヲ及ヒ其期間ヲ判決書ニ記載スルヲ要ス若シ誤テ右告知ヲ爲サス又ハ記載ヲ爲サ、ル時ハ設ヒ對席ニテ判決ヲ言渡シ又缺席ノ判決書ヲ送達シタリトモ之ヲ以テ上訴期間ノ

上訴期間
進行ヲ
停止スル
場合アリ

一旦停止
シタル上
訴期間ハ
何如ナル
手續ニ因
リ再進キ
行ス可キ
乎

進行アルコトナシ是レ第二百七條ニ規定スル所ナリ
其レ然リ然レハ則チ其上訴ノ期間ハ果ソ何レノ時ヨリ進行ス可キ乎
該條末項ニ曰ク「云々更ニ其通知アルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ
停止スト然レモ其所謂通知トハ果ソ如何ナル手續ニ從ヒ通知ヲ爲ス
ノ意乎是レ一見シテ人ノ必ス惑フ所ナリ何者本法中別ニ通知ニ關ス
ル何等ノ規定ナケレハナリ然リト雖モ茲ニ所謂通知トハ要スルニ告
知又ハ記載ノ遺忘若クハ缺漏アリタル時其遺忘若クハ缺漏ヲ補充ス
ルニ非サレハ上訴ノ期間ハ進行セサル可シトノコトヲ明カシタルニ
過キサルノミ去レハ元來告知ハ判決言渡ト同時ニ之ヲ爲ス可ク記載
ハ判決書ニ之ヲ爲ス可キモノナリト雖モ更ニ告知ヲ爲サンカ爲メ復
ヒ判決言渡シ又ハ之ヲ記載シタル判決書ヲ送達スルコトヲ要スルニ
非ス單タ裁判長ヨリ口頭若クハ筆記シタルモノヲ以テ之ヲ知ラシム
ル手續ヲ爲セハ則チ可ナリ蓋法律ニ於テ要スル所ハ歸上訴ヲ爲シ得

刑ヲ言渡
シタル缺
席判決ハ
假令ノ者
ナル乎將
タ確定ノ
者ナル乎

ルコト及ヒ其期間ヲ被告人ニ知ラシムル一事ニ在ル可キヲ以テナリ
余ハ茲ニ缺席判決ノ性質ニ付キ一ノ問題ヲ掲ケテ其答案ヲ擬セン
即チ刑ヲ言渡シタル缺席判決ハ確定ノ性質ヲ有スル乎將タ假定ノ
性質ヲ有スル乎ノ問題はナリ蓋此問題ニ答ヘンニハ宜シク區別ス
ル所アル可シ即チ法律ノ定メタル期間内ニ故障ヲ爲シタル時ハ其判
決ハ當然消滅シ更ニ判決ヲ要スルカ故ニ此點ニ就テ之ヲ觀レハ缺席
判決ハ則チ假定ノ性質ヲ有スルモノナリト決答セサルヲ得ス然レモ
故障及ヒ上訴ノ期間内被告人死去シタル時ハ其判決ハ確定ス(但受刑
者ノ親屬等ヨリ再審ノ訴ヲ爲シ其判決破毀セラレタル時ハ格別ナリ)
又刑ノ言渡ヲ受ケタル者刑ノ時効ヲ得タル時ハ亦其判決ハ確定スル
ヲ以テ更ニ判決ヲ受クルコトヲ得ス此等ノ場合ニ於テハ缺席判決ハ確
定ノ性質ヲ有スト云フテ可ナリ而シテ此最終ノ場合ニ於テハ設ヒ眞ニ
犯罪者ニ非サル者ト雖モ遂ニ終身公權ヲ剝奪セラル、結果ヲ見ルニ

至ルコアル可キナリ

大審院ノ
判決ニ付
キ缺席ト
對席アリ
區別アリ
利益アリ

缺席判決ノ事項ヲ睽ルニ蒞ミ尙ホ一言ス可キハ大審院ニ於テ爲シタル判決ニ付テハ其對席ト缺席トヲ區別スル利益アリヤ否ヤノ疑問是ナリ余願フニ大審院ノ判決ニ付テハ本法ニ於テ此二者ヲ區別スル利益ナカル可シ何者設ヒ上告趣意書ノ送達ヲ受ケサル被告人又ハ民事原告人アリタリトスルモ此等ノ者カ其判決言渡ニ對シ故障ヲ爲シ得ルカ如キコハ素ト其規定ナキヲ以テナリ

凡ソ判決
ラ有効ナ
ラハ如何
ナハルハ
條件ナ
スル乎

○凡ソ有効ノ判決ヲ爲サンニハ諸多ノ條件完備スルコトヲ要ス今ヤ逐次之ヲ講說セン
第一裁判所ノ構成適法ナルヲ要ス
區裁判所ニ在テハ判事一名ニテ判決ヲ爲シ地方裁判所ニ在テハ判事三名控訴院ニ在テハ判事五名(或ル特別ノ場合ニハ七名)大審院ニ在テハ判事七名ニテ列席取調ヲ爲シタル上判決言渡ヲ爲スコトヲ要ス又審

問七日以上引續クヘキ見込アルトキハ裁判所長ハ他ノ補充判事一名ヲ命シ之ニ立會ハシムルコトヲ得是等ノ事ハ則チ裁判所構成法第十一條初項第三十二條第四十一條第五十二條第二百十條等ヲ參看シテ之ヲ了知スルコトヲ得可シ而シテ該條ニ於テ判事三名ト云ヒ五名ト云ヒ七名ト云ヘルニ依リ之ヲ觀レバ若シ其法定ノ人員ヨリ多數ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ判決ヲ爲シタル時ハ實際何人ニ對シテモ毫モ損害ヲ被ラシムルコト莫カル可シト雖モ其裁判所ノ構成法ニ背キタル點ニ於テハ彼レ定員ヨリ寡數ノ判事ニテ判決ヲ爲シタル時ト少シモ差異ナキヲ以テ即チ上告ノ原由ト爲ル可キナリ(第二百六十九條第一項)

審問及ヒ辯論數日ニ涉ル時ハ同一ノ判事其數日ノ審問及ヒ辯論ニ立會ハサル可ラス是レ第二百九條第二項ニ云々同一ノ判事出席シタルコトヲ記載ス可シトアル文詞ニ徴シテ明ナリ故ニ最初ヨリ立會タル

判事疾病其他ノ事故ニ因リ立會フヲ能ハサルニ付キ他ノ判事ヲ以テ之レニ代ヘタル時ハ更ニ最初ヨリ審問及ヒ辯論ヲ爲サル可ラス此手續ヲ省カンカ爲メニ審問及ヒ辯論ノ四日以上ニ渉ルヘキ見込アル時ハ他ノ補充判事ヲ豫シメ裁判所長ヨリ命スルノ規定アルナリ(裁判所構成法第二百十條)

判事ハ終始同一ノ人ヲ要シテ然ラス此區別アル所
以如何

檢事一名ハ必ス公廷ニ立會フ可キモノナルカ故ニ若シ其立會ナクシテ判決ヲ爲シタル時ハ是レ即チ裁判所ノ構成法ニ背キタルモノナリ然レモ管轄檢事即チ同一ノ裁判所ニ在ル檢事ナルキハ設ヒ審問辯論及ヒ判決言渡ノ際甲檢事乙檢事ニ代リ丙檢事又之レニ代ルモ固ヨリ敢テ差問アルヲナシ判事ト檢事トノ間此差異アル所以ハ他ナシ一ハ判決ヲ爲スモノナルモ一ハ判決ヲ爲スモノニ非ス即チ判事ハ心証ニ依テ判決セサル可ラサルニ前後其人ヲ代フル時ハ固ヨリ心証ヲ容ツクルヲ能ハサルニ因ル又檢事數名相互ノ間ニ代位スルヲ得ルハ即

チ會テ述ベタル檢事ハ一体ナリトノ主旨ニモ正ニ適合スルヲ知ル可シ而シテ公廷ニ立會フ所ノ檢事ハ必ス一名ナル可キ乎曰否ラス檢事ノ員數多キヲ加フルヲハ法律ノ固ヨリ禁セサル所ニシテ亦爲メニ害ヲ被ムル者ナカル可キナリ

裁判所書記モ亦各裁判所構成上必要ナルヲ以テ若シ書記ナクシテ言渡シタル判決ハ即チ亦上告ノ原因ト爲ル可キナリ(第二百六十九條第一號)

第二、合議裁判ノ場合ニ於テハ裁判所ノ評議及ヒ各判事ノ意見ハ必ス之ヲ秘密ニスルヲ要ス

判事ハ辯論終結ニ先タチ決メ自己ノ意見ヲ吐露ス可ラス蓋判事ハ事實上及ヒ法律上ノ辯論ニ因リ始メテ其心証ヲ容ツクル可ク又評議ニ因テ其最初ノ意見ノ變更スルヲモアル可キヲ以テ固ヨリ其以前ニ生シタル感覺ノミニ依リ直チニ判決ノ根據ヲ爲クル可ラサルヲ以テナリ若

シ然ラスシテ審問又ハ辯論中ニ其意見ヲ吐露スルカ如キアアルニ於
 テハ其訴訟關係人ハ勿論一般人民ヲシテ或ハ前説ニ拘泥スル恐ヲ懷
 カシメ判決ノ公平ニ關シ自ツカラ疑訝ヲ容レシムル理アル可キナリ
 又評議及ヒ議決ノ狀況并ニ各判事ノ意見ノ如何等ニ付テモ一切之ヲ
 漏洩スルコトヲ得ス何トナレハ合議裁判所ノ裁判ハ元來多數ニ因リ議
 決シテ之ヲ爲ス可キモノナレハ時ニ多數ノ意見ト其意見ヲ異ニスル
 判事アル可キハ固ヨリ止ヲ得サル所ナリト雖モ其言渡ス所ノ判決ニ
 付キ各判事ノ意見ヲ漏洩スルカ如キアアリテハ或ハ判決ノ信用ヲ薄
 クスル恐アル可キヲ以テナリ(裁判所構成法第二百一十一條)

合議裁判
 ノ議決ヲ
 取ル方法
 如何

凡ソ合議裁判所ノ裁判ハ過半数ノ意見ニ依リ之ヲ行フモノトス故ニ
 五名ノ判事ヲ以テ立組テタル控訴院ノ裁判ハ三名以上又七名ノ判事
 ヲ以テ組立テタル大審院ノ裁判ハ四名以上ノ意見ヲ以テ之ヲ爲スナ
 リ然レモ有罪無罪若クハ加重減輕等ノ問議ニ付キ判事ノ意見三説以

上ニ派レタル片ハ之ヲ如何ス可キ乎例ヘハ爰ニ決闘者アリ其一人ハ
 他ヲ殺害シタルニ因リ公訴起リ地方裁判所ニ於テ將ニ判決ヲ爲サン
 トスルニ當リ甲判事ハ之ヲ謀殺ノ罪ニ問ハント云ヒ乙判事ハ毆打致
 死罪ニ丙判事ハ無罪ニ各其意見ヲ異ニシタリトセンニ蓋此甲乙二者
 ハ共ニ有罪ノ意見ナルモ而カモ其認定ヲ齊シクセス夫レ此等ノ場合
 ニ於テ乙者ハ甲者ヨリ輕ク丙者ハ又乙者ヨリ寛ナリ即チ丙者ノ意見
 ハ被告人ニ最モ利益ナルヲ以テ丙者ノ意見ニ從フ可キモノト爲スヘ
 キ乎其少數ナルヲ如何セン去レハ甲乙ノ二者ハ共ニ犯罪ヲ認メタル
 ヲ以テ之ヲ合算シ其輕キ即チ被告人ニ利益ナル毆打致死罪ニ問ハ
 ン乎亦寢穩ナラサルカコトシ何者甲判事ハ被告人ノ所爲ニ就キ謀殺ノ
 証ヲ認メタルモ然カモ毆打致死ノ証ヲ認メタルニ非ス其意見ハ元來
 乙者ノ意見ト氷炭相容レサルモノナレハナリ
 然レハ則チ之ヲ如何シテ可ナル乎今裁判所構成法第二百二十三條ノ規

定ニ從ヘハ云其意見三説以上ニ分レ各過半数ニ至ラサルトキハ過半数ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス
ト依此觀之前例ノ場合ニ於テハ甲判事ノ意見ハ被告人ニ最モ不利益ノ説ナルカ故ニ乙判事ノ意見ニ合算シ過半数ヲ得タルヲ以テ乃チ毆打致死ノ罪ニ依リ處斷ス可キモノト爲スナリ然レモ純理ヲ以テ之ヲ論スルハ右等ノ場合ニ於テハ更ニ他ノ判事二名ヲ増員シ審問及ヒ辨論ヲ爲シタル上評議ヲ盡シ判決ヲ爲スノ甚タ至當ナル可キヲ信スルナリ

刑ノ適用ニ付キ意見三説以上ニ派レ各過半数ニ届ラサル時ハ如何此場合ニ於テ各説犯罪ノ有無ニ付キ意見ヲ異ニシタルニアラスシテ單ニ刑ノ適用ニ關スル異説タルニ過キスト雖モ裁判所構成法第二百二十三條ノ規定ニ依レハ亦過半数ヲ得ルニ届マテ被告人ニ不利益ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス可キモノトセリ例ヘハ被告人ハ有

合議裁判ノ場合ニ於テ刑ノ適用ニ付キ意見三説以上ニ派レ各説犯罪ノ有無ニ付キ意見ヲ異ニシタルニアラスシテ單ニ刑ノ適用ニ關スル異説タルニ過キスト雖モ裁判所構成法第二百二十三條ノ規定ニ依レハ亦過半数ヲ得ルニ届マテ被告人ニ不利益ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス可キモノトセリ例ヘハ被告人ハ有

期徒刑(即チ十二年以上十五以下)ニ處ス可キ犯罪ナリト議決シタルニ甲判事ハ十四年ノ刑ヲ科セント云ヒ乙判事ハ十三年ニ丙判事ハ十二年ニ處セント云ヒ一決セサル時ハ則チ甲判事ヲ十四年ニ處セントノ説ハ乙判事ノ十三年ニ處セントノ意見ニ合算シ之ヲ徒刑十三年ニ處スル類ナリ

又評議ノ際各意見ヲ述フル法ハ先ツ最モ官等ノ低キ判事ヨリ順次官等ノ高キ判事ニ及ヒ官等同シキハ年少者ヲ始メトシ最後ニ裁判長其意見ヲ陳述ス可キモノトス是レ官等低キ者ハ官等高キ者ヲ尊敬シ又年長者又ハ裁判長ヲ尊敬シテ自ツカラ雷同スル弊アラソフ豫防スルニ在ルナリ(裁判所構成法第二百二十二條)
第三判決言渡ニハ其理由ヲ付スルヲ要ス但豫審判決ハ此限ニ在ラス本案ノ判決即チ刑ノ言渡免訴若クハ無罪ノ言渡又ハ管轄違ノ言渡タルト前キニ述ヘタル其他ノ終局判決タルトヲ問ハス其判決言渡ニハ

判決言渡ニ理由ヲ付スルヲ要セザルモノアリ

常ニ理由ヲ明示セサル可ラス然リ而シテ唯リ豫審判決ニ限り理由ヲ付スルコトヲ必要トセサル所以タル抑、此判決ハ前キニ述ヘタルカ如ク判事カ本案ニ付キ適當ナル判決ヲ爲スカ爲メ或ル事實ノ査定ヲ目的ト爲シ判決ノ準備處分ヲ言渡スニ過キサルモノナレハ固ヨリ孰レノ訴訟關係人ニ對シテモ其權利ヲ傷害ス可キ理由アラサレハナリ

○余ハ爰ニ本案ノ判決ニテ爲ス言渡ノ各場合ニ付キ理由明示ノ點ニ關スルコトヲ解説ス可シ

(一)凡ソ刑ノ言渡ヲ爲ス場合ハ即チ犯罪ノ證據ト被告人ノ人違ナキ證據トノ十分ナル時ナリトス而シテ此刑ノ言渡ヲ爲スニハ必ス事實及ヒ法律ニ依リ其理由ト證據トヲ明示セサル可ラス(第二百三條第二百二十三條)抑、判決ハ事實ニ對シ法律ヲ適用スルモノニシテ事實ハ即チ證據ニ依リ之ヲ認定ス可キモノナルカ故ニ凡ソ刑事ノ判決ハ心証ニ依リ之ヲ爲スモノナリト雖モ其心証ハ素ト諸般ノ證據ニ基キ生出スル

事實上ノ理由トハ何ソ

モノニシテ固ヨリ空想ニ出ツルモノニ非サレハ其心証ノ基因スル證據ヲ明示シ又其證據ヨリ生出スル事實ニ適用スル法律ノ理由ヲ明示シテ而シテ判決ノ虛妄穴想ナラサルヲ公示スルハ寔ニ當然ノコト云フ可シ

所謂實質上ノ理由トハ即チ犯罪構成ノ原素(刑法講義一七二丁以下)及ヒ法律上ノ加重減輕ノ原由(刑法講義五七一丁以下)ヲ云フ例ヘハ竊盜ニ付テハ竊盜構成ノ原素ヲ列記シ再犯ニ付テハ再犯ニ必要ナル各條件ヲ列記スルカ如シ而シテ此等ノ理由ヲ明示スル要ハ他ナシ各犯罪構成ノ原素及ヒ其犯罪ニ關シテ生シタル法律上ノ加重減輕ノ原由ニ付キ事實上ノ認定ヲ誤マラサルコトヲ明カスカ爲メニ外ナラス而シテ此理由ハ所謂證據ヨリ生出スルモノナレハ上告裁判所ハ專ラ第二審ノ判決ニ對スル法律適用ノ當否ヲ鑒査スル所ナリト雖モ其判決言渡ニハ即チ事實上ノ理由モ亦之ヲ掲出セサル可ラス上告裁判所ハ自カラ

法律上ノ理由トハ

事實取調ヲ爲ス可キモノニ非スト雖モ然カモ第二審裁判所即チ事實裁判所ノ認定シタル事實ヲ適實ノモノナリト做シ之ヲ基本ト爲スニ非サレハ決シテ法律ノ適用ヲ論擬ス可キ場合ニ至ラサレハナリ所謂法律上ノ理由トハ即チ據テ以テ處斷スル所ノ法律正條ノ指示ヲ云フ例ヘハ某々ノ事實ナルニ因リ刑法第何條ニ照シ云々ト云ヘルカ如キ其刑法正條ノ指示ハ即チ法律上ノ理由ナリ又加重減輕ノ場合ニ於テ例ヘハ刑法第九十二條(再犯加重法)ニ照シ云々ト云ヒ刑法第八十一條(未丁年減輕法)ニ照シ云々ト云フカ如キ其第九十二條及ヒ第八十一條援用ハ即チ法律上ノ理由ナリトス

刑ヲ言渡スニハ以上述ヘタルカ如ク事實及ヒ法律ニ由リ其理由ヲ明示ス可シト雖モ然カモ其理由ヲ以テ直チニ判決ナリト思惟ス可ラス何者判決トハ例ヘハ云々ニ因リ被告人ヲ重禁錮一年ニ處スト言渡スカ如ク即チ處刑ニ關スル言渡其モノヲ指稱スルニ在レハナリ

- (二) 宥恕ニ依リ刑ヲ全免スル言渡ヲ爲ス場合ニ於テモ亦前第一ノ場合ニ於ケルカ如ク第二百三條第一項ヲ用シ事實上及ヒ法上ノ理由ヲ明示ス可キモノトス
 - (三) 免訴ノ言渡ヲ爲ス場合モ亦前者ニ全シ(第二百三條第二項)
 - (四) 無罪ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テモ亦理由ヲ付セサルヘカラス(同上ノ法條而シテ)此場合ニ於ケル理由ニハ或ハ事實上積極ノ證據ニ基ク時アリ例ヘハ被告人ノ人違ナル證據アリタル時ノ如シ或ハ事實上消極ノ證據ニ基ク時アリ例ヘハ犯罪ノ證據全ク存セス若クハ不十分ナル時又ハ法律ニ於テ被告事件ヲ處罰ス可キ明文ナキ時ノ如シ而シテ此消極ノ證據ニ基キ無罪ノ言渡ヲ爲ス可キ場合ハ即チ法律ニ於テ之ヲ犯罪ノ證據十分ナラサル時ノ語ヲ以テ汎稱セリ(第二百二十四項)
- 又被告人ニ犯罪者タル責任ヲ缺ク時(刑法講義一九九丁以下)言渡ス所ノ無罪ノ理由ハ即チ事實上ノ証憑及ヒ法律ノ正條ニ基クモノナリ

(五) 管轄違ノ言渡ヲ爲ス場合モ亦前數者ニ同シク理由ヲ付セサルヘカ
 ラス即チ犯罪ノ場所、性質、若クハ種類又ハ被告人ノ身分ニ關スル事實
 上ノ理由及ヒ法律上ノ理由ヲ明示ス可キナリ(裁判所構成法第十六條
 第二十七條第三十七條第五十條及ヒ本法第二百二十二條)
 第四判決書ヲ作ルヲ要ス

判決書ニ
 掲載ス可
 キ條件

判決書ハ其言渡前裁判官躬カラ之ヲ作ラサル可ラス(第二百四條第二
 百五條)而シテ判決書ニハ左ノ諸件ヲ掲載スルヲ要ス

(一) 被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住所等、苟クモ被告人ノ人別ヲ明瞭ナ
 ラシムルニ足ル可キ事項、但缺席判決等ノ場合ニ於テ若シ其年齢
 職業等ヲ知り得サル時ハ則チ其容貌、体格等ヲ記載スルヲ以テ足
 ルヘシ

(二) 事實ノ點即チ有罪ノ場合ニ在テハ處刑、免刑、加重減輕ノ理由タル
 事實無罪ノ場合ニ在テハ被告人ノ人違、証憑ノ不十分若クハ不論

罪ノ理由タル事實、又管轄違ノ場合ニ在テハ犯罪ノ場所、性質、種類
 若クハ被告人ノ身分ニ付テノ事實及ヒ此等ノ事實ニ關スル証憑
 ニシテ裁判上事實ノ理由トナル可キモノ

(三) 法律ノ點即チ有罪、不論罪、免訴、加重減輕、宥恕等ニ關スル法律ノ正
 條

(四) 判決ノ點即チ處刑、免刑、免訴、無罪(不論罪)管轄違等ノ判決

(五) 判決ノ第一審タリ若クハ第二審タルコト又ハ對席若クハ缺席ナル
 コト

(六) 判決ノ年月日、裁判所ノ名、干與シタル檢察官、官氏名、判決ヲ爲ス判
 事ノ官氏名、及ヒ其判決ニ干與シタル裁判所書記ノ官氏名

(七) 缺席判決ニ係ル時ハ其判決ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ爲シ得ル
 コト及ヒ其期間

判決書ニハ以上列記シタル諸項ノ記載ヲ要スルノミナラス若シ數罪

俱發ノ場合ニ於テハ其各被告事件ニ付キ右(二)(三)項ノ記載ヲ爲シタル
 上(四)項ニ於テ一ノ重キニ從テ處斷シ何々ノ刑ニ處スル旨等ノ記載ヲ
 爲ス可ク又總ヘテ判決書ノ紙尾ニ判事及ヒ裁判所書記ハ自カラ署名
 捺印ヲ爲ス可キモノトス

判決ノ有
 効ナラン
 カ爲メニ
 要スル條
 件ニ背キ
 タル件ノ
 制裁

以上述ヘ來リタル判決ノ有効ナランカ爲メニ要スル四箇ノ條件中其
 第二第三ノ二者ハ本法ニ於テ上告ノ原由中ニ之ヲ明記シタリ(第二百
 六十九條第一號第九號)ト雖モ他二箇ノ條件ニ付テハ別ニ其制裁ヲ示
 スコナシ然レモ若シ此第二ノ條件ニ背キテ第一審ノ判決ヲ爲シタル
 時ハ其瑕瑾ノ故ヲ以テ充分控訴ノ原由ト爲ル可キナリ又其第四ノ條
 件ハ翅ニ判決ヲ他日ニ保存スル手續ノミニアラズ即チ判決言渡上(特
 ニ處刑ノ判決ニ關シテ)必要ナル原素ナルカ故ニ若シ此條件ヲ缺失シ
 タル時ハ其判決ハ元來効力ナキモノト決セサルヲ得ス要スルニ此第
 二及ヒ第四ノ條件ニ付テハ到底法律ニ其違背ノ制裁ヲ明示スルヲ至

當ナリト信スルナリ

此四條件ノ外尙ホ判決ハ訟廷ヲ公開シテ言渡サ、ルヘカラサルコト判
 事ハ惣テノ審問辨論ニ立會ヒタルコト重罪事件ニ在テハ辨護人アルコ
 等ノ要件アリト雖モ或ハ既ニ解說シタルモノアリ或ハ後ニ詳説スヘ
 キモノニ係ルヲ以テ爰ニ之ヲ義解セス

私訴ノ判
 決

○私訴ノ判決ヲ爲スニモ亦前述四箇ノ條件即チ裁判所ノ構成、評議及
 ヒ意見ノ秘密判決ノ理由判決書ノ調製ヲ要ス而シテ曩ニ既ニ述ヘタル
 カ如ク公訴ト私訴トハ元來同一ノ所爲ニ原由スルト雖モ其目的ニ至
 テハ則チ二者兩途ニ出テ且ツ事實上、被告人ノ責任ニ至テモ亦固ヨリ
 同一ニ非ス故ニ被告人ハ刑ノ言渡ヲ受クル時ト雖モ必スシモ損害賠
 償ノ言渡ヲ受ケス却テ無罪ノ宣告ト共ニ損害賠償ノ言渡ヲ受クルコ
 アリ又無罪ノ言渡ヲ受クル者又ハ刑ノ言渡ヲ受クル者ニシテ却テ他
 ヨリ損害ノ賠償ヲ受クルコトアリ(第十三條)依此觀之凡ソ公訴ニ付テノ

判決ト損害賠償ニ付テノ判決トハ元來其事實上及ヒ法律上ノ理由ヲ異ニスル所アルヤ得テ知ル可キナリ

被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ提起シタル時即チ損害ノ賠償又ハ贓物ノ返還ヲ請求シタル時ハ刑事裁判所ハ之レニ付テノ判決ヲ爲サ、ル可ラス(第二百條)若シ其判決ヲ爲サ、ル時ハ則チ上告ノ原由ト爲ル可シ(第二百六十九條第七號)然レモ沒收ニ係ラサル物品ニ付テハ所有主ノ請求ナシト雖モ本案ノ判決ト同時ニ之ヲ還付スル言渡ヲ爲サ、ル可ラス(第二百二條)而シテ還付ノ言渡ハ所有者ノ請求アルニ因テ之ヲ爲スモノニ非サレハ固ヨリ純然タル判決ノ性質ヲ有セサルヤ明ナリ

又此言渡ヲ爲ス可キハ其差押物品ニ付キ素ト所有主ノ明瞭ニシテ毫モ争嚷ナキ場合ニ限ルモノタルヤ復タ論ヲ竣タス然リ而シテ此差押物品還付ノ言渡ハ其被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル場合ト免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合トニ因リ少シモ差異ナキモノトス故ニ被告人刑

ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ其沒收ニ係ラサル差押物品ノ果シテ被告人ノ所有ニ屬スルコト明瞭ナル時ハ之ヲ還付スル言渡ヲ爲サ、ルヲ得ス而シテ被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタルニ拘ラス差押物品ヲ他ノ所有者ニ還付ス可キ場合ハ例ヘハ竊盜事件ノ被告人自己ノ所有物ナリト誤信シテ他人ノ物品ヲ入手シタル場合ノ如キ是レ竊盜ノ一原素ヲ缺キタル者ナレハ則チ無罪ノ言渡ヲ受ク可キモ其物品ハ之ヲ所有者ニ還付セサル可ラス然リ而シテ茲ニ一ノ注意ス可キハ所謂所有者ナル一語是ナリ即チ所有權ヲ有スル者ノミヲ云ヘル旨意ニアラスシテ彼レ占有者ヲモ包含シタルモノト解セサル可ラス例ヘハ他人ノ物品ヲ占有中竊取セラレタル時ノ如キ其占有ニ付キ別ニ争嚷ナキ時ハ債權ノ低償トシテ占有シタルト保管ノ爲メ占有シタルトチ問ハス之ヲ其占有者ニ還付スル言渡ヲ爲ス可キモノトス(刑法第四十八條參看)

被告人刑ノ言渡又ハ免刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ハ職權ヲ以テ

公訴ニ關スル訴訟費用

其本案ノ判決ト共ニ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キ言渡ヲモ爲ス可キナリ(第二百一條初項)是レ此判決ヲ要スルニ至ラシメタルハ即チ被告人其者ナルカ故ニ爲メニ要シタル費用ノ全部又ハ幾分ヲ被告人ニ負擔セシムルハ理ノ當ニ然ル可キ所ナリト云フ可シ然リ而シテ公訴ニ關スル訴訟費用ハ通常被告人ヲシテ其全部ヲ負擔セシムルモノナル可キモ然カモ或ハ民事原告人ヨリ無要ノ手續ヲ請求シ爲メニ多額ノ費用ヲ要シタルカ如キ場合必スシモ之ナキニアラサレハ此場合ニ於テハ被告人ハ其幾分ノ費用ヲ負擔スルニ止マル可キ亦固ヨリ當然ナリトス

判決言渡

判決言渡ハ法律上ノ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可キモノトスコレ第二百四條初項ニ規定シタル所ナリ而シテ所謂次ノ開廷日トハ即チ後ノ開廷ノ日ヲ指シタルモノニシテ強チ次回ノ開廷日ト云ヘル意味ニアラサルナリ蓋判決書ハ

前ニ述ヘタルカ如ク言渡前之ヲ作ルコトヲ要スルカ故ニ實際簡單ナル事件ニ非サルヨリハ辯論終結ノ後即時ニ之ヲ言渡スコトヲ得サル可キナリ

裁判所ニ於テハ事實上若クハ法律上ノ辯論中檢事ヨリ公訴ヲ繼續セサル陳述アリタリト雖モ之レニ關セス本案ニ付キ自カラ信スル所ニ依リ或ハ刑ノ言渡或ハ免訴若クハ無罪ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス其然ル所以タル余カ曾テ述ヘタルカ如ク抑公訴權ハ社會ニ屬スルモノニシテ檢事ハ單ニ之ヲ行フニ過キサレハ固ヨリ自カラ公訴ヲ左右スル職アル者ニ非サルニ由ルナリ而シテ檢事カ公訴ヲ繼續セサル原由ハ即チ或ハ証憑ノ不十分ナルニ由ルコトアル可ク又或ハ法律ニ正條ナキモノトスルコトモアル可ク要スルニ被告人ニ對シ刑ノ言渡ヲ爲ス可ラストスル場合ナル可キヤ明ナリ

私訴ノ判決ハ公訴ノ判決ト同時ニ之ヲ言渡スヲ通常トス蓋公訴ノ審問辯論終結シタル時ハ私訴ニ付テモ亦概シテ審問辯論ヲ終結ス可ケレハナリ然レモ若シ私訴ノ取調未タ十分ナラサル時ハ先ツ公訴ノ判決ノミヲ爲シ爾後私訴ノ取調十分ナルニ至テ其判決ヲ爲スヲ得是レ公訴ハ私訴ニ先テ之ヲ判決スルモ敢テ支障ナク公訴ノ取調既ニ十分ナル時ハ速ニ其判決言渡ヲ爲スヲ以テ却テ社會及ヒ被告人ニ利益アリト做シ法律ニ於テハ必スシモ之ヲ私訴ト同時ニ爲スヲ必要トセサリシナリ(第二百條)

公判ニ於テ作ル書類ノ豫審ト異ナル所以

余ハ今將ニ公判通則ノ義解ヲ畢ラントスルニ臨ミ公判ニ關シテ作ル可キ書類ニ付キ聊カ記述スル所アル可シ前ニモ述ヘタルカ如ク豫審ニ於テハ被告人訊問證人訊問鑑定等ニ付キ各別ニ其調書ヲ作り其他ノ手續ニ付テモ亦概シテ書類ヲ作ルト雖モ公判ニ在テハ然ラス單ニ公判始末書ヲ作ルノミ故ニ被告人及ヒ證人訊問其他ノ事ト雖モ舉テ

此レニ登載シ別ニ調書ヲ作ルヲナシ此差異アル所以ノモノハ他ナシ豫審ハ糾問方法ノ遺質ヲ取り筆記ヲ主トシ即チ證據ヲ集取シテ公判ノ準備ヲ爲スヲ旨ト爲スモ公判ハ彈劾方法ノ遺質ヲ取り口述ヲ主トシ即チ原被ヲシテ對立辯論セシメ判決ヲ爲スカ爲メ心證ヲ得ルヲ旨トスル區別アルニ緣ル

豫審ニ於テ作りタル書類即チ調書ニハ其調書ニ記載シタル供述ヲ爲シタル者又ハ其調書ニ關係シタル者ヲシテ之ニ署名捺印セシム是レ被告事件ニ關スル證據トシテ他日判決ヲ爲ス準備ニ出ツルヲ以テナリ公判始末書ハ其名稱ノ指示スルカ如ク單ニ公判ノ始末即チ履行シタル總テノ手續生シタル總テノ出來事ヲ登載スルモノナルカ故ニ各關係人ヲシテ署名捺印セシムルヲナク唯裁判長及ヒ裁判所書記ノミ之ニ署名捺印スルナリ而シテ此公判始末書ハ各事件(即チ附帶事件ハ主タル事件ト合併シテ一事件ト爲シ一個ノ被告人ニ對スル數罪俱發ノ

場合モ亦一事件ト爲スコトニ之ヲ作ルモノトス(第二百十條)

公判始末書ニ記載ス可キ事項ハ載セテ第二百八條及ヒ第二百九條ニ在リ該條ニ記載スルモノハ即チ公判ノ手續中重要ノモノヲ例示シタルノミニシテ其之レニ記載ス可キ事項固ヨリ此ニ盡キス而シテ法律ニ於テ公判始末書ヲ作ラシムル趣旨ハ要スルニ公判ニ關スル規定及ヒ手續ノ履行ヲ嚴密ニ爲サンカ爲メニ外ナラス其之ヲ嚴密ニ爲ス所以ノモノハ他ナシ若シ他日規定及ヒ手續ノ違背ヲ理由トシ上訴スルモノアルニ當リ上訴ヲ受理シタル裁判所ニ於テ其眞ニ違背アリヤ否ヤヲ取調フル具ニ供スルニ在ルノミ

公判始末書ノ性質

公判始末書ハ裁判所書記之ヲ作り裁判長ト共ニ署名捺印スルヲ以テ固ヨリ嚴正ナル公正証書ト爲ス故ニ偽造ノ訴アルマテハ之レニ登載シタル手續ニ付テハ眞正ノモノタル證據力ヲ有ス而シテ其記載ス可キ手續中ニハ或ハ無効ヲ以テ其違背ノ制裁ト爲スモノアリ又ハ然ラサ

ルモノアリ然レモ要スル所之ヲ作ル任アル裁判所書記公廷ニ於テ手續及ヒ出來事ノ生スルニ從ヒ序ヲ追テ直チニ之ヲ記載ス可ク決ノ第二百八條ニ例示シアル手續中例ヘハ公ケニ辯論ヲ爲シタルト被告人ヲシテ最終ニ供述セシメタルト等ノ記載ヲ爲スハ恰カモ一箇ノ式ヲ行フニ過キス即チ之レカ記載ヲ爲スノミヲ以テ足レリト速了ス可クス必ス眞ニ公ケニ辯論ヲ爲シ被告人ヲシテ最終ニ供述セシムルトヲ要スルナリ故ニ曾テ佛國ニ於テ公判始末書ハ豫メ之ヲ印刷シ置ク可ラストノ法令ヲ發シタルトアリ是レ眞ニ行ハスシテ書ニ見ハル、不都合ヲ避ケントスルニ由ルナリ

公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓スルヲ要ス(第二百十條)抑公判始末書ハ隨テ見聞シ隨テ筆録スルモノナリトスル時ハ敢テ三日ノ猶豫ヲ與フルニ及ハサルカ如シト雖モ然レモ之ヲ整頓スルカ爲メ同上ノ日子ヲ與フルハ固ヨリ不可ナキヲ知ルナリ

故障

故障

故障トハ公判ニ於テ闕席シタル者即チ辯論ヲ爲サスシテ不在ノマ、不利ノ判決ヲ受ケタル者其判決ノ取消アラントテ原裁判所ニ請求スル訴訟ナリ而シテ故障ヲ爲シ得キハ闕席シタル被告人民事擔當人及ヒ民事原告人ナリトス法律ノ規定ハ重モニ被告人ニ付テ之ヲ爲シタリト雖モ敢テ民事擔當人民事原告人ヲ取除キタルニハアラサルナリト蓋此故障ノ制アル所以タル他ナシ相手人ノ闕席ニ拘ラス出頭シタル一方ノ片言ニ依リ其闕席者ニ不利益ノ判決ヲ言渡シタルモノナルカ故ニ其判決ハ亦容易ニ之ヲ取消サシムル道ヲ開カサル可ラス而シテ罰金以下ノ刑ニ該ル事件ニ付テハ別ニ被告人ニ對シテ其事件ノ起リタルコトヲ知ラシムル手續ヲ規定セスト雖モ其禁錮以上ノ刑ニ該ル事件ニ付テハ特ニ鄭重ノ手續ヲ竭シタル上ニ非サレハ敢テ闕席判決ヲ下ストナキハ余カ前ニ詳説シタル所ナリ(第二百二十七條參觀其レ然リ

然レハ則チ闕席ニテ禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人ノ故障ニ付テモ亦特別ナル規定アリテ其闕席判決ハ容易ニ之ヲ確定セシメサル方針ヲ取ルモ亦當然ナリト謂フ可シ而シテ故障ハ其訴訟ノ性質トシテ之ヲ原裁判所ニ爲スヲ法トス是レ第二百三十條ニ規定スル所ナリ

故障ニ付テハ彼レ上告ニ於ケルカ如ク法律上一定ノ原由アルコトナク又一定ノ原由アル可キ筈ナシ何者出頭シテ辯論ヲ爲ス可キ訴訟人カ現ニ出頭セサルモ法律上出頭シタリト看做ス場合(第百八十二條第一項)ヲ除ク外出頭ナク辯論ナキノミヲ以テ即チ故障ノ原由アリトスレハナリ

故障ノ期

故障ノ期間ハ區裁判所及ヒ地方裁判所ノ闕席判決ノ送達アリタル日ヨリ三日内トスコレ原則ナリ然レモ禁錮ノ刑ヲ言渡シタル闕席判決ニ對シテハ第一被告人自カラ闕席判決書ノ送達ヲ受ケタル日第二判

決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヨリ右三日ノ期間ヲ起算ス可キモノトス而シテ右第一ノ場合ハ即チ被告人カ現ニ捕ニ就キタルニ因リ決定書ヲ送達シタル時ノ如ク第二ノ場合ハ例ヘハ附加ノ罰金徴收ニ因リ被告人刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル場合ノ如シ(第二百二十九條)

前述二箇ノ場合ニ於テ故障期間ヲ三日内ニ短縮セル所以タル此場合ニ於ケル被告人ハ自己ニ對シ闕席判決ニテ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リ若クハ知リ得可キヲ以テ通常ノ期間即チ三日ヲ以テ十分ト爲ス可ク彼ノ或ハ闕席判決アリタルコトヲ知ラサル被告人ニ於ケルカ如ク長久ノ期間ヲ與フル必要ナシトスルニ在ルナリ

私訴ニ關スル者ニ付テノ故障期間

民事原告人及ヒ民事擔當人ノ故障期間ハ如何第二百二十八條第二項ニ從ヘハ單ニ「闕席判決ヲ受ケタル者」トノミ云ヘルカ故ニ同上ノ二者ハ被告人ト等シク決定書ノ送達アリタルヨリ三日内ナル可キヲ得テ

知ル可シト雖モ本案事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ場合ニ於テハ民事擔當人ノ故障期間ニ付キ頗ル疑ナキコト能ハス奈何トナレハ民事擔當人ハ判決書ノ送達アリタル日ヨリ三日内ニ故障ヲ爲サ、ルカ爲メ損害賠償ヲ爲ス可キ判決確定シタル場合ト雖モ被告人ハ故障ヲ爲シテ前判決ヲ無効ニ歸セシメ更ニ刑事上ノ責任ナク隨テ民事上ノ責任ナキ者ナリ(例ヘハ正當防衛ノ場合ノ如シ)トノ對席判決ヲ受クルコトアル可キカ故ニ若シ斯カル場合ニ遭遇シタリトセンニ被告本人ノ無責任ハ即チ亦民事擔當人ノ無責任ヲ證明スルモノナレハ此場合ニ於ケル二箇ノ確定判決ハ交支牒スルニ至ル可キナリ故ニ今法理ニ據テ之ヲ論スル時ハ民事擔當人ノ故障期間ハ被告人ノ故障期間ニ從フト規定スルヲ以テ最モ至當ト爲ス可キカ如シ

被告人ニ對シ闕席判決ヲ以テ禁錮以上ノ刑ヲ言渡シタル場合ハ都テ其被告人カ逃亡シテ捕ニ就カサル場合ナリ何トナレハ若シ逃亡セサ

ルニ於テハ必ス引致シテ對席判決ヲ爲ス可ケレハナリ然リ而シテ其
 且逃亡シタル被告人爾後捕ニ就キタル場合ニ於テ三日以内ニ故障ヲ
 爲サ、ルトキハ其判決ハ確定スルヲ以テ又刑ヲ執行スルヲ得可キ
 ナリ去レハ彼レ刑ノ時効ト爲ル以前ニ於テ被告人捕ニ就キタル場合
 ハ格別否ラサレハ凡ソ禁錮以上ノ體刑ハ到底之ヲ執行スルヲ能ハサ
 ルハ更ニ喋々ヲ要セサル所ナリ

然ルニ剝奪公權停止公權禁治産ノ如キ附加刑及ヒ禁錮ニ附加スル罰
 金ニ付テハ如何主刑ト共ニスルニ非サレハ單ニ此等附加刑ノミヲ執
 行シ得サル可キ乎更ニ之ヲ詳言スレハ主刑ニ付テハ未タ確定セサル
 カ故ニ之レカ執行ヲ爲スヲ得スト雖モ其附加刑ハ縱令判決未タ確
 定セスト雖モ仍ホ之レカ執行ヲ爲スヲ得可キ乎余ハ惟ヘリ剝奪公
 權停止公權禁治産ニ付テハ主刑ノ闕席判決タルニ抱ラス解除ノ未
 必條件ヲ以テ主刑宣告ノ日ヨリ直チニ之レカ執行ヲ爲シ得可キモノト

スト但其理由ノ如キハ余之ヲ刑法講義ニ詳悉シタレハ彼ニ讓テ此ニ
 復詳セス(刑法講義四百三十六丁以下特ニ四百四十二丁參看)而シテ又附
 加ノ罰金ニ付テモ其主刑ノ判決未タ確定セサルニ拘ラス常ニ之レカ
 執行ヲ爲スヲ得可シト信ス但若シ主刑ノ時効ト爲ル以前ニ於テ被
 告人故障ヲ爲シ受理セラレタル時ハ同上罰金ノ執行ハ初メヨリ未タ
 會テアラサリシカ如ク原狀ニ回復セラル可キヲ勿論ナリ何者從ハ主
 ニ從テ存滅スル原則ニ因リ主刑ノ無効ト爲リタルト同時ニ附加刑ノ
 無効ト爲ル可キヲ固ヨリ當然ナレハナリ

要旃罰金ヲ附加シタル禁錮ノ刑ヲ言渡シタル闕席判決ノ確定ハ即チ
 刑ノ時効ノ期間内ニ被告人ヨリ故障ヲ爲サ、ルニ因リ生ス可シトノ
 停止ノ未必條件ヲ帶フルニ非スシテ却テ同期間内ニ被告人カ故障ヲ
 爲スニ於テハ其判決ヲ消滅セシム可シトノ解除ノ未必條件ヲ帶ヒタ
 ルモノト云フ可キナリコレ其判決ノ確定セサルニ拘ラス之レカ執行

ヲ爲シ得可シト爲ス所以ナリ
 解除ノ未必條件ヲ以テ執行シ得可キモノハ前述附加ノ罰金ニ止マラ
 ス損害賠償裁判費用等ノ如キモ彼レ禁錮以上ノ体刑ト共ニ闕席判決
 アリタル時ハ亦同様執行シ得可キモノトス
 刑ノ時効ニ至ルマテ被告人故障ヲ爲サ、ル時ハ最早故障ヲ爲スニ由
 ナク其判決ハ確定スルヲ以テ彼ノ解除條件ヲ帶ヒテ執行シタルモノ
 モ亦確定ト爲リ最早動カスヲ得サルモノトス故ニ例ヘハ重罪ノ刑
 ヲ言渡サレタル者ノ如キ其主刑ハ遂ニ執行ヲ受ケサルニ拘ラス終ニ
 公權ヲ剝奪セラル可キナリ

故障受理
 不受理ノ
 判決

余ハ此ヨリ簡單ニ故障アリタルヨリ以後ノ手續ヲ述ヘン若シ故障ア
 リタル時ハ裁判所ニ於テハ先ツ其故障ノ申立ハ之ヲ受理ス可キモノ
 ナルヤ否ヤヲ判決ス而シテ此判決タル其故障申立ハ眞ニ欠席判決ニ對
 シテ之ヲ爲シタルモノナルカ又闕席判決ニ對スルモノナリトスルモ

期間内ノ故障ニ係ルヤ否ヤ等ヲ取調ヘ其故障ノ受理ス可キモノナル
 カ否ヤヲ裁定スルニ在リ故ニ本案ニ付テハ其審査ヲ爲スニ非サルコ
 言ヲ缺タス又此故障ノ受理ノ受理ヲ判決スルニ付テハ敢テ訴訟人雙
 方ヲ出廷セシメタル上之ヲ爲ス可キニアラス要スルニ故障ノ判決ハ
 所謂書類審査ナリトス但故障ノ申立書ノミニテハ故障ノ當否分明ナ
 ラサル時ハ故障申立人ヲシテ口ツカラ之ヲ辯明セシメ又ハ書面ヲ差
 出サシメ強メテ其要領ヲ得ンコトヲ要スルハ更ニ論ヲ竣タサルナリ
 裁判所ニ於テ前段故障ヲ受理ス可ラサルモノト思料シタル時ハ理由
 ヲ付シ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可ク若シ故障ヲ受理シタル時ハ故障
 アリタルコトヲ其相手人ニ通知シ且其事件ヲ公判ニ付ス可キ期日ヲ定
 メ訴訟關係人ヲ呼出ス可キナリ而シテ故障ノ受理セラルハ、ヤ前ノ闕席
 判決ハ同時ニ其効力ヲ失ヒ無効ト爲リ所謂有レモ亡キカ如キ効果ニ
 至ルヲ以テ其本案事件ニ付テハ更ニ通常ノ審判手續ニ從ハサル可ラ

以上解説スル所ハ第二百二十八條乃至第二百三十三條ニ之ヲ規定セ
 リ而シテ凡ソ闕席判決ハ控訴裁判所ニ於テ爲シタルトキト雖モ其闕席
 者ニ於テ故障申立ヲ爲シ得キト及ヒ控訴裁判所ニ於テ其故障申立
 ノ受理不受理ヲ判決スル等ノ手續ハ敢テ前段通常即チ第一審ノ場合
 ニ付テ解説シタル所ニ異ナラサルナリ但上告裁判所ニ於テ上告事件
 ニ付キ闕席判決(代理人ノ出頭セサルニ因リ)ヲ爲シタル場合ニ於テハ
 彼レ第一審第二審ノ判決ニ於ケルカ如ク故障ヲ爲シ得キニアラス
 (第二百八十四條)其理タル抑上告裁判所ハ法律ノ點ニ付キ第二審判決
 ノ當否如何ヲ判決スルモノニシテ素ヨリ事實認定ノ當否ヲ判断ス可
 キモノニアラサレハ其性質上元來對席判決ヲ必要ナリトセサレハナ
 リ
 故障ノ申立受理セラレテ更ニ公判開廷アルニ至リ其故障申立人公判

ノ期日ニ出頭セサル時ハ如何此場合ニ於テハ裁判所ハ再ヒ闕席判決
 ヲ爲スヲ許サス(第二百三十三條第二項)其然ル所以タル若シ之ヲ然
 ラストスル時ハ其己レニ不利益ナル判決アランヲ推知セル訴訟闕
 係人ハ故ラニ屢次闕席シテ故障ヲ申立テ訴訟ノ終局ヲ妨碍スルニ至
 ル患アルニ由ルナリ
 然リ而シテ或ハ説ヲ爲シテ曰夫ノ故障ニ係ル判決ニ闕席シタル者ハ更
 ニ故障ヲ爲スヲ許サストノ規定アルモノハ蓋其判決ヲ對席ト看做
 スカ故ナリト然レモ此説從フ可ラス法律ニ明文ナキ以上ハ到底之ヲ
 闕席判決ト言ハサルヲ得ス故ニ其判決第一審ノ闕席判決ヲ想像スニ
 對スル控訴ノ期間ハ其判決ノ日ヨリ起算セスシテ判決書ノ送達アリ
 タル日ヨリ起算セサル可ラスト思惟スルナリ

第二節 區裁判所ノ公判

余ハ區裁判所ノ公判ニ付テハ其公訴ヲ受理シタルヨリ判決ヲ爲スニ

至ルマテノ手續ヲ數階ニ別チ其順序ヲ追テ之ヲ義解ス可シ
第一階 公訴ノ受理

區裁判所ハ下記二箇ノ原由ニ因リ違警罪及ヒ裁判所構成法第十六條
第二號第三號ニ記載シタル輕罪事件ヲ受理ス(第二百十二條)

第一 檢事ノ起訴アリタルトキ

第二 豫審判事又ハ上級裁判ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタルトキ

區裁判所ノ檢事公訴ヲ爲サントスルハ被告人ノ氏名職業住所及ヒ
被告事件ヲ指示シ其被告人ニ對シ呼出狀ヲ發セシムヲ裁判所ニ請求
ス裁判所ハ書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發セシム可キモノトス
コレ第二百十三條ニ規定スル所ナリ

違警罪
ハ元來
豫審ヲ
經ル者
ナリ
豫審判
事ハ元
來豫審
ヲ經ル
者ナリ
豫審判
事ハ元
來豫審
ヲ經ル
者ナリ

又豫審判事ノ決定ニ因リ被告事件ヲ受理スル場合ハ第六十六條ニ
依テ明ナリ而ノ區裁判所ノ權限ニ屬スル事件ハ元來豫審ヲ經可キモ
ノニ非サレハ(第六十二條第三號)乃チ豫審判事ノ決定ニ因リ被告事件

公訴ヲ受
理スル場
合アリヤ

ヲ受理スル場合ナキニ似タリト雖モ決ノ然ルニアラス何者前ニ一言
シタルカ如ク檢事ヨリ違警罪ヲ輕罪以上ノ事件ト思惟シ豫審ヲ請求
シ又ハ豫審判事カ現行犯罪アル場合ニ於テ直チニ豫審處分ヲ爲シタ
ル末區裁判所ノ權限ニ屬ス可キモノト認メ決定ヲ與フル場合之レナ
キニ非サレハナリ(第六十六條第六十七條第一項)

上級裁判
所ノ言渡
ニ因リ區
裁判所ニ
於テ公訴
事件ヲ受
理スル場
合

又上級ノ裁判所ノ裁判ニ因リ被告事件ヲ受理スル場合ハ例ヘハ犯罪
ノ場所ニ因ル管轄違ノ申請アリタルニ付キ上級裁判所(此場合ノ上級
裁判所ハ即チ地方裁判所)ニ於テ其事件ヲ他ノ區裁判所ニ移スノ裁判
ヲ爲シ又ハ上告ノ末上告裁判所ニ於テ原裁判ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ
區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シタル時ノ如シ即チ其第二ノ區裁判所ハ上
級裁判所ノ言渡ニ因リ其事件ヲ受理シタルモノナリ(第二百八十六條
及ビ裁判所構成法第十條參看)

上級ノ裁判所ノ裁判ニ因リ事件ヲ受理シタル裁判所ニ於テ其事件ヲ